

平成29年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」報告書

コミュニティ・キャンパス佐賀
アクティベーション・プロジェクト

**COMMUNITY CAMPUS SAGA
ACTIVATION PROJECT**



国立大学法人 佐賀大学

平成29年度 地(知)の拠点整備事業 コミュニティ・キャンパス佐賀 アクティベーション・プロジェクト活動風景



プロジェクトA:鹿島市「民宿みんなの家」でニューツーリズム開発支援
プロジェクトB:佐賀市東よか干潟における小学生対象の生物観察会
プロジェクトC:佐賀市「健康教室」でのレクリエーション
プロジェクトD:小城市で熊本県美里町のゲストを招きランブリング

プロジェクトE:唐津市離島での夏期医療実習
プロジェクトF:嬉野市で地域資源を活用したまちづくり提案
プロジェクトG:東京ビッグサイトでのキクイモのPR活動

ご挨拶

本学と西九州大学が共同し、平成25年度より文部科学省・地(知)の拠点整備事業「コミュニティ・キャンパス佐賀アクション・プロジェクト」を実施して参りました。本プロジェクト開始から3年目に実施された平成28年度評価では「本事業は順調に進んでいる」との評価を頂戴しました。ここに本事業の最終年度の5年目に当たる、平成29年度の活動状況について報告書としてまとめ、発刊する運びとなりました。日頃より本事業に対してご理解、ご支援またご協力頂いている多数の関係各方面の方々には厚く御礼申し上げます。

本プロジェクトは『地域を志向した教育・研究・社会貢献を実践している両大学が、佐賀県全域をキャンパスと位置づけ、学生のみならず教職員らがまさに“一体”となり活動し、実践的な教育・研究を通し、地域が直面する課題の解決に向け、地域の再生および活性化を図ろうとする』、活動内容であります。本プロジェクトが参画する地域(佐賀県および県内6市1町の自治体)と密接な連携を図り、本学では「学生参画による調査・交流・活動を通じた地域創成プログラム」をはじめとした7つのプロジェクト、また一方、西九州大学では「介護(認知症)予防事業に着目したリハビリテーションプログラム」をはじめとした5つのプロジェクト、計12のプロジェクトを展開して参りました。各プロジェクトは「地域と密接な連携を取りながら進める!」ということが大きな特徴と申せます。

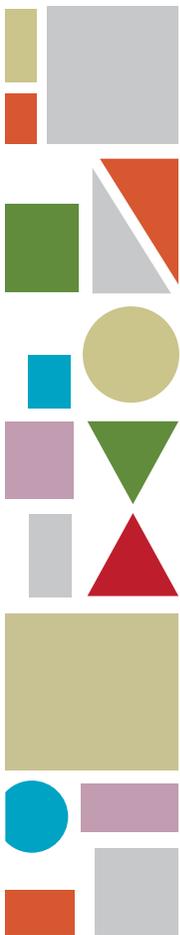
今年度は、平成29年10月14日に「COC/COC+シンポジウム2017」を開催し、地域を志向する教育と地域を担う人材の育成について議論を深める場を設け、連携団体や企業等から115名のご参加を賜りました。また本報告書にて平成29年度における本学の各事業内容・成果をまとめ、掲載させて頂きました。多くの皆様方のご協力にて本事業のミッションである本学学生の研究教育と地域連携に関する事業のみならず、連携する自治体およびNPO団体を含む、地域社会が抱える多様な課題の解決に向けた地域志向型の教育研究、教養教育および学部専門教育(一部大学院教育を含む)において、お陰様で全学的な取り組みをこれまで以上に展開・推進することが出来ました。

また平成29年度はCOC+事業と一体となり、政府が掲げる、『地方創生政策』のもと、「地域の創生と活性化」策をさらに一層推進して参りました。これからも本学がCOC大学として本事業を積極的に進め、「佐賀の“地”における“知”の拠点」として地域社会の発展に益々寄与して参ります。学内外の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援、ご協力のほど、何卒、よろしくお願い申し上げます。



佐賀大学 理事・副学長
コミュニティ・キャンパス佐賀
運営委員会 委員長

寺本 憲功



目次

Page

■ はじめに

03 ご挨拶

佐賀大学 副学長・理事 寺本 憲功

05 平成29年度年表

06 ご挨拶

佐賀大学 事業実施責任者 三島 伸雄

■ コミュニティ・キャンパス佐賀

アクティベーション・プロジェクトについて

08 プロジェクト概要

プロジェクトA～G紹介

60 地域志向教育研究経費事業

■ シンポジウム・研修会等の記録

70 COC・COC+シンポジウム2017

地域を志向する教育と地域を担う人材の育成

72 COC・COC+FD・SD研修会

74 外部評価委員会

■ 広報関係

76 新聞掲載記事

■ まとめ

93 5年間のあゆみ(平成25年10月～平成30年3月)

120 資料

126 編集後記

平成29年度 年表

2017年

- 4月20日 第18回コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会
大学COC事業推進部門会議
- 5月30日 第18回コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議
大学COC事業推進部門会議
- 7月7日 第19回コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会
大学COC事業推進部門会議
- 7月31日 第19回コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議
- 9月11日 高崎商科大学来訪
- 9月26日 第20回コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会
大学COC事業推進部門会議
- 10月14日 第20回コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議
COC・COC+シンポジウム2017
- 10月28日 「地域を志向する教育と地域を担う人材の育成」
「九州・沖縄COC/COC+合同シンポジウム
IN おおいた 2017」参加・ポスター出展
- 11月23日 「さがを創る大交流会」開催
- 12月15日 第21回コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会
大学COC事業推進部門会議



第19回推進会議



第21回運営委員会



高崎商科大学来訪

2018年

- 1月22日 第21回コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議
第22回コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会
大学COC事業推進部門会議
- 2月8日 外部評価委員会
- 2月22日 「FD・SD研修会」開催
- 3月2日・3日 平成29年度COC/COC+全国シンポジウム参加・
ポスター出展
- 3月26日 第22回コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議
- 3月27日 第23回コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会
大学COC事業推進部門会議



COC/COC+シンポジウム2017

地（知）の拠点整備事業と地方創生



事業実施責任者

三島 伸雄

工学系研究科 教授

本学と永原学園西九州大学の共同申請による文部科学省「地（知）の拠点整備事業—コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト—」は、今年度が最終年度になりました。大学の本分は教育と研究であり、地域の活性化ではありません。地域のアクティベーション（活性化）は、地域（住民と行政）に責務があります。

しかし、その地域活性化に地域の一員として協力するとともに、国立大学と私立大学という将来的にも合併する可能性の少ない大学が連携することにより、お互いの良い点の刺激を受けてこの5年間事業に取り組んできました。それが一番意味のあったことだと思います。例えば、西九州大学では私立大学として先行して取り組んでいるループリックや成長評価について、佐賀大学も刺激を受けて導入に取り組み始めました。佐賀大学と西九州大学で共通している研究テーマ（例えば機能性食品）などについて共同での取り組みも始めました。これらは、今後の地域の拠点としての大学の礎になるでしょう。

また、本年度は、地域住民や行政の意見も広く取り入れるべくアンケートを実施し、地域のニーズをより意識した取り組みに励んできました。その結果、地域の方々も大学が関わることに對する期待や満足も高かったと思います。目標には達しませんでした。地域に関係する共同研究等も多く受け入れることができました。教員も、地（知）の拠点事業に対する認識がかなり高まりましたし、地域に出て学習する授業や研究も増えました。

しかしながら、今後の課題もまだ残っています。補助事業期間が終了するに伴い、財源の問題が最も大きいのしかかっています。自立して行うことが求められています。これまでは、補助金でコーディネーターを雇っていました。地域で行う教育・研究の事業実施に必要な手続きや準備を行うためには、教育・研究・国際貢献など様々な責務がある大学教員では処理が追いつきません。学内における人的なサポートを行う組織や人材が不可欠です。また、地域に出る行くための交通手段（バス）の確保も大きな問題です。地域とともに自主財源を確保していくことが望まれます。来年度以降のCOC継続のために、この財源に伴う課題を解決していかなければなりません。

最後になりましたが、本事業の企画・推進に際しては、西九州大学・関連自治体、そして「場の教育」にご協力頂いた地域住民の方々には、様々なご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。次年度以降も、地域課題を意識した学生教育と地域課題解決に向けた取り組みを継続していく必要がありますので、さらなるご支援とご協力をお願いします。

コミュニティ・キャンパス佐賀 アクティベーション・ プロジェクトについて

プロジェクト概要	8～13
プロジェクトA	14～19
プロジェクトB	20～27
プロジェクトC	28～31
プロジェクトD	32～37
プロジェクトE	38～43
プロジェクトF	44～51
プロジェクトG	52～59

プロジェクト概要

コミュニティ・キャンパス佐賀 アクティベーション・プロジェクトとは

佐賀大学と西九州大学は、佐賀県全域をキャンパスと位置づけ、学生・教職員による実践的な教育・研究を通して、地（佐賀県域）と知（教育研究）のアクティベーション（活性化）を進めることで、佐賀の地における知の拠点としての機能を強化します。

このプロジェクトは、佐賀県、佐賀市、唐津市、鹿島市、小城市、嬉野市、神埼市、吉野ヶ里町の1県6市1町と連携し、両大学とも地域での学修機会を増加させる教育カリキュラムの改革を行い、事業の実効性と持続性のある全学的なプロジェクトとして推進します。

図1 佐賀大学・西九州大学によるコミュニティ・キャンパス佐賀
アクティベーション・プロジェクト事業一覧と連携自治体

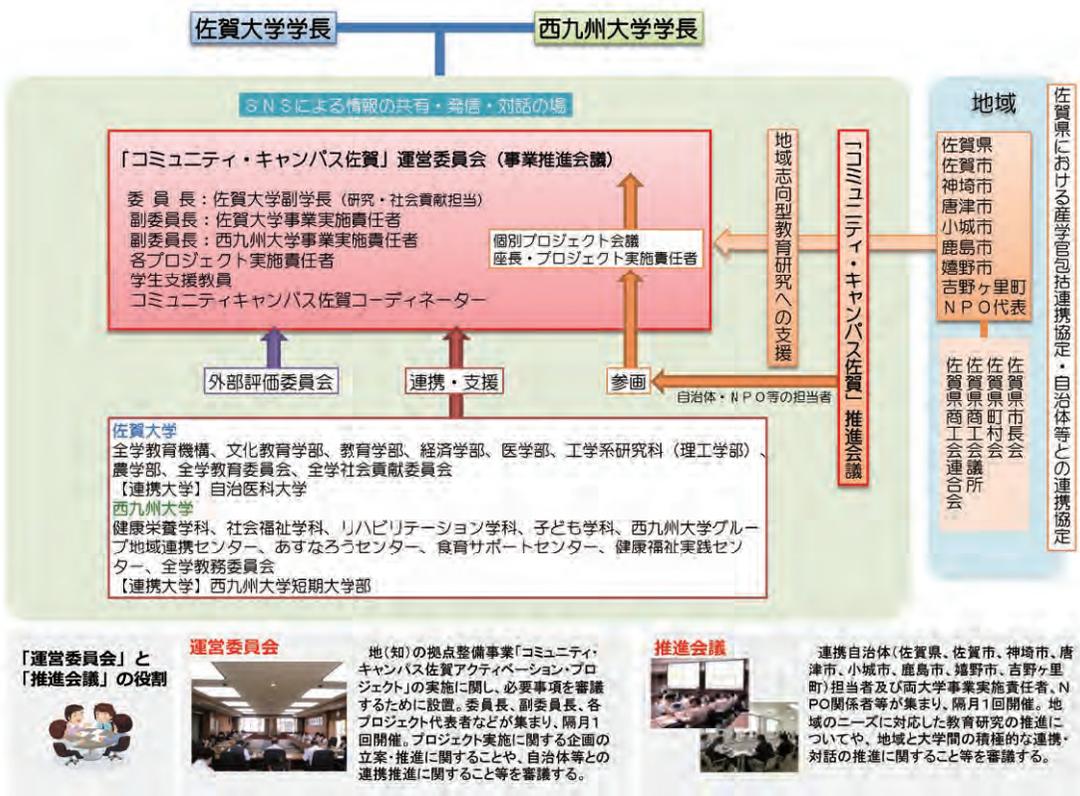


事業推進体制

佐賀大学と西九州大学の連携強化のため、各大学の事業実施責任者及びプロジェクト代表等が集まる「コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト運営委員会」を設置し、プロジェクト実施に関する企画の立案と推進や自治体等との連携の推進に関すること等を協議します。また、平成27年に設置した地域創生推進センターの大学COC事業推進部門会議において、プロジェクトの評価や申請、実績報告、予算配分等に関して協議し、本事業を推進します。

連携自治体とは、各自治体の担当者と各大学の事業実施責任者、NPO関係者で「コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト推進会議」を開催し、事業の円滑な推進を図ります。

図2 佐賀大学・西九州大学、及び地域連携による推進体制



教養カリキュラム改革

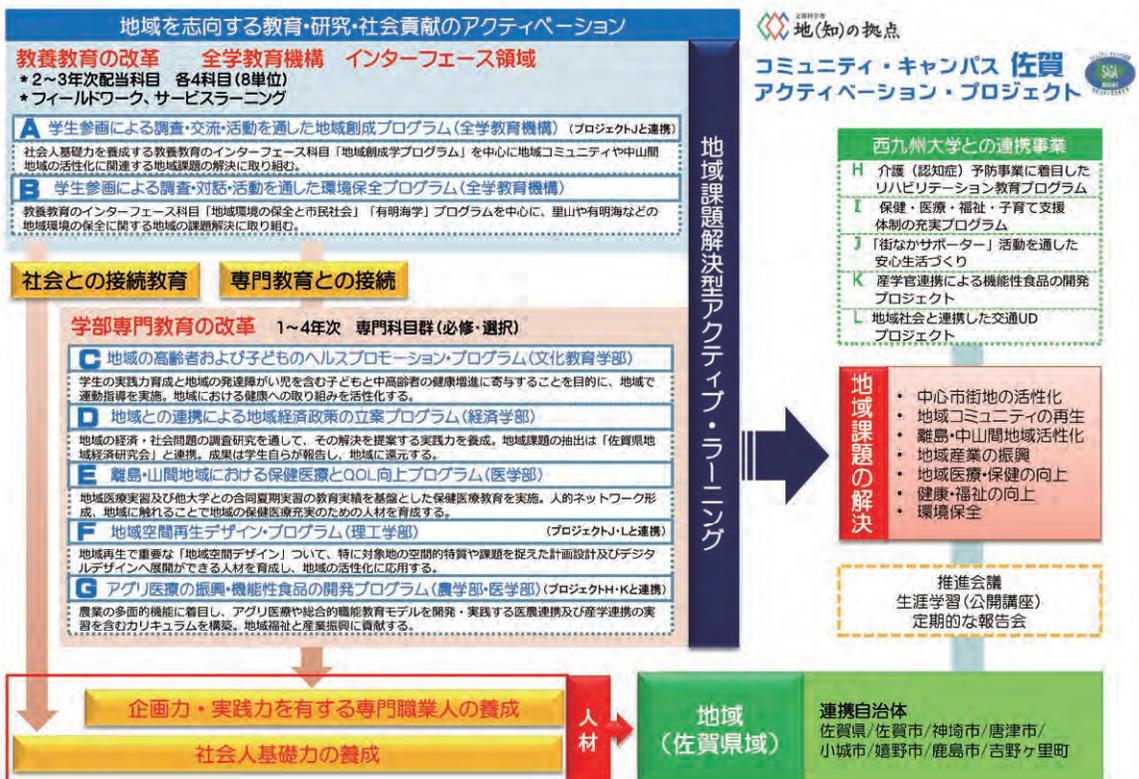
教養教育の改革は、専任教員を配置する全学教育機構（責任部局）が推進する「インターフェース科目」からなる新カリキュラム（平成26年度より開始）によるものです。この科目は2～3年次の2年間で4科目を履修する（選択必修）もので、5コースに分かれ、「インターフェースプログラム（4科目・8単位）」、及びプログラムの担当教員が必要に応じて開講する「インターフェース演習」からなります。これは、社会との接続を目的とする社会人基礎力を養成するプログラムで、アクティブ・ラーニングを基盤にした学生の主体的な学びを推進します。平成28年度からは、インターフェースプログラムの4科目のうち、最低1科目を地域志向型科目とし、全学生が選択必修で地域志向型科目を履修することとなりました。

インターフェース科目中、本COC事業では「環境コース」と「地域・佐賀学コース」の「有明海学」「地域環境の保全と市民社会」「地域創成学」等を中心に、フィールドワーク、ボランティア活動を含むサービス・ラーニング及び実習、実験を重視する地域課題解決型のコース科目群に特色を有します（プロジェクトA・B）。これらの科目では、土日祝日等を利用した学外授業で実施します。

学部専門教育（プロジェクトC～G）においては、実習・演習科目を中心とした地域課題解決型の実践的教育を進め、企画力や実践力を有する専門職業人を養成します。

これらは、佐賀大学学士力に基づいた教育として推進します。

図3 地域課題解決型アクティブ・ラーニングを基盤とする教養教育の改革



佐賀大学・西九州大学、両大学連携事業

両大学は、連携自治体において全12事業を実施しています。佐賀大学はプロジェクトAからGまでの7つ、西九州大学はプロジェクトHからLまでの5つの事業を行っており、今年度は佐賀大学プロジェクトA・F、及び西九州大学プロジェクトJ・K・Lが連携し、佐賀市で1件、嬉野市で1件、神崎市で1件の計3件の事業に参画しました。

平成25年度から平成29年度までの、7つの連携事業における地域活動延べ日数は124日、参加人数は2,639人となりました。連携は、地域活性化イベントへの参画や地域活性化拠点・団体支援、機能性食品の研究、講義開催による知識の共有等となっており、両大学の全学部の学生が連携事業に参画しました。

	関連プロジェクト	連携自治体	実施内容
1	佐賀大学 A 西九州大学 J	佐賀市	佐賀市中心市街地活性化のための調査研究、及びイベントプロデュース
2	佐賀大学 F 西九州大学 J-L	佐賀市	佐賀市中心市街地活性化イベント「サガ・ライトファンタジー」への参画
3	佐賀大学 G 西九州大 H	佐賀市	佐賀大学農学部附属アグリ創生教育研究センターにおけるアグリ医療講習
4	佐賀大学 G 西九州大 K	佐賀市	キクイモの栽培方法の研究及び機能性の分析・研究、商品開発、認知度向上のための広報活動
5	佐賀大学 A 西九州大 K	嬉野市	地域活性化拠点「豊ふぁー夢」におけるイベント支援や6次産業化支援
6	佐賀大学 A 西九州大学 J-L	神崎市	神崎市城原地区における地域活性化イベント等の企画・運営
7	佐賀大学 (地志) 西九州大学 I	佐賀市	公民館等でのスキンケア教室の開催



佐賀駅北地区活性化イベント実行委員会への参画



佐賀市中心市街地での電飾設置



アグリセンターでの動物介在療法体験



アグリセンターにおけるキクイモ栽培



豊ふぁー夢で開催された収穫祭への参画



学生がデザインした豊ふぁー夢 えごま油のラベル



神崎市役所の方の案内で城原地区内を散策



教室参加者に正しいスキンケア方法を教える学生



佐賀大学の7つのプロジェクト

全12プロジェクト中、佐賀大学ではプロジェクトAからGの7つのプロジェクトを実施しています。

プロジェクト

A

学生参画による調査・交流・活動を通じた地域創成プログラム

(連携自治体) 佐賀市、唐津市、鹿島市、嬉野市、
吉野ヶ里町

「中心市街地の活性化」や「離島・山間地域の活性化」「地域コミュニティの再生」を目的に、全学教育機構における教養教育改革の一環として行います。教養教育のインターフェース「地域・佐賀学コース」の「地域創成学プログラム」を基盤に、「文化と共生コース」、「生活と科学コース」等との連携によって、地域活性化を目指します。

代表:五十嵐 勉 全学教育機構教授



プロジェクト

B

学生参画による調査・対話・活動を通じた環境保全プログラム

(連携自治体) 佐賀県、佐賀市、鹿島市

「地域資源の保全と活用」「有明海の環境保全と活用」を目的に、全学教育機構における教養教育改革の一環として行います。教養教育のインターフェース「環境コース」の「有明海学」「地域環境の保全と市民社会」プログラム、及び「文化と共生コース」の「映像・デジタル表現」において、主体的な環境学習プログラムを実施・構築します。

代表:郡山 益実 全学教育機構准教授

プロジェクト

C

地域の高齢者及び子どものヘルスプロモーション促進に向けた学生の実践力育成プロジェクト

(連携自治体) 佐賀県、佐賀市、鹿島市、嬉野市

学生の実践力育成と、地域の発達障害児を含む子どもと中高齢者の健康増進に寄与することを目的に、文化教育学部健康スポーツ科学講座による地域での運動指導等を行います。地域の子どもから高齢者までを対象にすることで、ヘルスプロモーション能力を底上げし、運動・福祉の側面から、地域の健康への取り組みを活性化します。

代表:井上 伸一 教育学部教授

プロジェクト

D

地域との連携による地域経済政策に関わる学生主体の調査研究と成果の地域社会への還元

(連携自治体) 佐賀県(佐賀地域経済研究会)、
佐賀市、唐津市、小城市

学生自身が、地域の経済問題を調査して課題を発見し、対策の検討とまとめを行います。地域が抱える課題への対策は、佐賀県下の市部における地域経済政策立案主体からなる「佐賀地域経済研究会」の協力を得ながら行い、その成果は大学の公開講座等で発表して地域に還元します。

代表:戸田 順一郎 経済学部准教授



プロジェクト **E** 離島・山間地域における保健医療とQOL向上のための人材育成プロジェクト

(連携自治体) 佐賀県、佐賀市、唐津市

地域医療実習及び自治医科大学との合同夏期実習の教育実績を基盤として、全学教育機構や農学部とのプログラムとも連携して保健医療教育を実施。学生同士の交流や将来の人的ネットワークの形成、地域の文化や伝統に直に触れる機会を持つことによる地域貢献意欲の涵養等を行い、地域での保健医療充実のための人材を育成します。

代表:杉岡 隆 医学部教授

プロジェクト **F** 地域空間再生デザイン・プログラム

(連携自治体) 佐賀市、唐津市、鹿島市、小城市、嬉野市

景観や街並み整備等、地域再生において重要な「地域デザイン」。特に地域の空間分析と将来像をわかりやすく伝えられるよう、対象地の空間的特質や課題を捉えた計画設計、及びデジタルデザインへの展開ができる人材(デザインクリエイター)の育成を行います。また、西九州大学のプロジェクトLと連携し、都市のUD(ユニバーサル・デザイン)による再生にも寄与します。

代表:三島 伸雄 工学系研究科教授



プロジェクト **G** アグリ資源の多様性を活用したアグリ医療及び機能性食品の開発プロジェクト

(連携自治体) 佐賀市

平成24年度に農学部の新設された附属アグリ創生教育研究センターと医学部、西九州大のプロジェクトH・Kが連携して実施するプログラム。農の多面的機能に着目して、生き物を通じた医療や総合的食農教育モデルを開発・実践する「医農連携」と、産学連携の実習を含めたカリキュラムです。

代表:上埜 喜八

農学部附属アグリ創生教育研究センター准教授



プロジェクト **H** 介護(認知症)予防事業に着目したリハビリテーション教育プログラム
(連携自治体) 佐賀市、小城市、神崎市、吉野ヶ里町
代表:上城 憲司 教授



プロジェクト **I** 保健・医療・福祉・子育て支援体制の充実プログラム
(連携自治体) 佐賀市、小城市、神崎市
代表:堀田 徳子 准教授

プロジェクト **J** 「街なかサポーター」活動を通じた安心生活づくり
(連携自治体) 佐賀市、小城市
代表:岡部 由紀夫 講師



プロジェクト **K** 産学官連携による機能性食品の開発プロジェクト
(連携自治体) 佐賀県、佐賀市、小城市、神崎市、嬉野市、吉野ヶ里町
代表:安田 みどり 教授



プロジェクト **L** 地域住民と連携した交通UDプロジェクト
(連携自治体) 佐賀市、小城市、神崎市
代表:酒井 出 教授



【★マーク】は佐賀大学と西九州大学が連携するプロジェクトです。

学生参画による調査・交流・活動を通じた 地域創成プログラム



きばる塾での城原地区視察

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:全学教育機構

■連携部局:文化教育学部人間環境課程、工学系研究科都市工学専攻、医学部地域医療支援学講座、農学部生物環境科学科地域社会開発学コース



実施代表者

五十嵐 勉

(全学教育機構・教授)

■取り組む地域課題:

- ・中心市街地の活性化
- ・離島のQOL向上
- ・中山間地域の活性化
- ・地域コミュニティの活性化

■連携プロジェクト:B、E、F、J

■連携自治体等:佐賀市、唐津市、鹿島市、嬉野市、NPO法人まちづくり機構ユマニテさが、認定NPO法人地球市民の会、NPO法人みんなの森プロジェクト、NPO法人蕨野の棚田を守ろう会、豊ふあー夢、鹿島市ニューツーリズム推進協議会 等

■教育カリキュラム:

- ・全学教育機構「インターフェース科目」におけるPBL/SL型フィールドワーク、community-based learning
- ・インターフェース「地域・佐賀学コース」:地域創成学プログラム

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ(自治体別):

佐賀市:

- ・サテライト「ゆつつら〜と館」を利用した世代間交流、イベントプロデュースの企画と実践
- ・中山間地域における耕作放棄地の抑止・活用のための「参加型農地管理」のビジネスプラン、「村おこし」イベント等イベントプロデュースの企画・実践

唐津市:

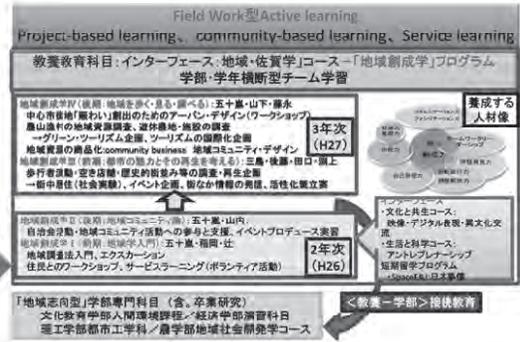
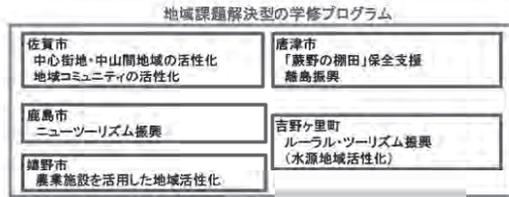
- ・離島における地域資源の発掘とその活用
- ・蕨野の棚田保全活動の企画・支援

鹿島市:

- ・ニューツーリズム振興の企画・支援

プログラムの目的

学部専門教育への接続と社会人基礎力の養成による社会との接続を図るため、全学教育機構における教養教育インターフェース領域「地域創成学プログラム(4科目8単位)」を核として、「地域の再生や活性化」に関わる地域課題解決型の教育プログラムを実施する。



活動報告

- 平成25年度
- 試行的取り組みを開始
1. 佐賀市富士町での地域振興イベントの支援
 2. 吉野ヶ里町ルール・ツーリズム振興
 3. 唐津市萩野の棚田保全支援活動
 4. 鹿島市 ニューツーリズム振興支援
- 平成26年度
- 地域志向型教育・研究・社会貢献の開始
- インターフェース科目「地域創成学Ⅰ・Ⅱ」
- ・嘉瀬まちづくり協議会への参画
 - ・「つながるさかし交流会」参加 等
- インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会Ⅰ・Ⅱ」
- ・唐津市萩野の棚田保全支援活動 等
- 平成27年度
- 地域志向型教育・研究の実践
- インターフェース科目「地域創成学Ⅰ～Ⅳ」
- ・嬉野市「豊ふあー夢」を活用した地域活性化プロジェクト
 - ・佐賀市まちなかゲストハウス計画 等
- 全学教育機構「留学生プログラム教育科目」
- ・七山滝川地区の地域資源を活用した地域活性化事業
- 平成28年度
- 地域志向型教育・研究の実践
- インターフェース科目「地域創成学Ⅰ～Ⅳ」
- ・佐賀バルーンミュージアム活用事業
 - ・農を利用した中心市街地活性化の取り組み 等
- 農学部専門科目「環境地理学」「農学部地域資源学研究室」
- ・里山資本主義 in 富士町プロジェクト 等
- 平成29年度
- 地域志向型教育・研究の実践
- インターフェース科目「地域創成学Ⅰ～Ⅳ」
- ・神埼市「きばる塾」活動支援
 - ・佐賀大学サテライト「ゆつら〜と館」活用事業 等
- 農学部専門科目「フィールドワーク基礎演習」
- ・唐津市離島・向島での地域資源発掘とその活用 等
- 平成30年度
- 地域志向型教育・研究の継続・発展
- ・佐賀市中心市街地活性化の取り組み
 - ・神埼市「きばる塾」活動支援
 - ・中山間地域活性化支援の取り組み
 - ・道の駅を活動拠点としたニューツーリズム振興

今後の展開

- ・インターフェース「地域創成学」を主とした持続的な地域活性化
- ・中山間地域、離島地域におけるイベントプロデュース
- ・ニューツーリズム振興の企画や支援

成果

佐賀市中心市街地の活性化活動

佐賀市中心市街地では、「地域創成学」を受講する学生がさまざまな活動を続けています。「高齢者のまちなかの居場所づくり」やイベントへの参画等に携わり、地域活性化策を実践。ハルーンミュージアム等の公共施設を活用した一般市民対象のワークショップ開催を手掛けるなど、まちなかの賑わい創出に貢献しています。



離島における地域資源の発掘とその活用

平成27年度から唐津市肥前町向島(むくしま)において農学部2年生が「フィールドワーク基礎演習」合宿を実施。2泊3日の滞在で、島内エクスカーションや島民とのワークショップ、奉仕活動を通して、離島地域の魅力や島の資源とともに課題を発見し解決方法を模索。地域課題や魅力を発見する力を身に付け、今後の研究課題選定につながる合宿となっています。



農山村の農業施設を活用した地域活性化の取り組み

嬉野市塩田町の農業体験施設「豊ふあー夢」を中心として、地域の方々や地域活性化に取り組んでいます。この取り組みは活動場所を自分たちで整備することから始まりました。「農」を活用したイベント開催や営業支援を行っており、平成28年度からは6次産業化に取り組み、「えこま油」の商品開発・販売支援を実施。「地域創成学」履修学生が、商品のラベルデザインを担当しました。



中山間地域活性化支援 (佐賀市富士町、三瀬、唐津市相知町萩野、七山 等)

中山間地域において地域住民や団体と連携して地域活性化の取り組みを行っています。佐賀市富士町においては、NPO法人みんなの森プロジェクトと連携し「里山資本主義 in 富士町プロジェクト」として地域資源を活かした活性化支援を学修。唐津市相知町の萩野の棚田では、NPO法人萩野の棚田を守る会と連携し棚田を活用したイベントの企画・運営を実施しています。



■ II.平成29年度の活動

佐賀市:

■農を利用した中心市街地活性化の取り組み

①4/20 平成29年度の呉服「元町ファーム」開園

②5～2月 呉服「元町ファーム」の運営

農学部 生物環境科学科

・地域資源学研究室 (延べ28名)

活動内容:

佐賀大学の学生がゆっつら～と街角大学の受講生(高齢者)と連携して管理するまちなか農園を活用した中心市街地活性化活動。「ユニバーサル コミュニティ ファーム」として運営し、季節に合わせた農作物を栽培した。

成果(学生教育の観点から):

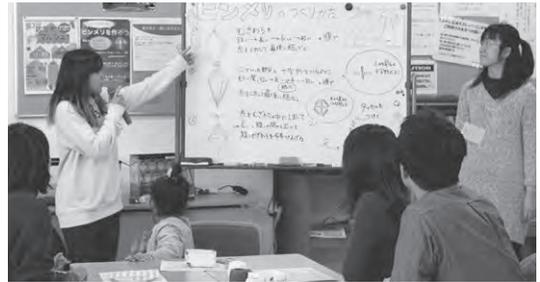
農園の運営が中心市街地の状況を把握や世代間交流につながった。収穫物を佐賀市TOJIN茶屋の「子ども食堂」に提供する等、農作物を通じた交流が生まれた。



呉服「元町ファーム」での収穫作業

■佐賀市中心市街地活性化の取り組み(ゆっつら～と館活用事業)

- ① 5/14 まちなかエクスカーション
- ② 5/31 ゆっつら～と館リノベーション
- ③ 6/ 7 さがバルーンミュージアムでのジオラマづくり参加
- ④ 11/10 ヒンメリワークショップ受講と実践
- ⑤ 12/ 2 ヒンメリワークショップ開催
- ⑥ 12/13 年賀はがき作りワークショップ開催
- ⑦ 2/24 中心市街地活性化イベントおにぎりイベント出店



学生講師によるヒンメリワークショップ開催

全学教育機構 インターフェース科目

・地域創成学Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ (延べ43名)

連携学生サークル:Green Nexas

連携団体:

佐賀市、NPO法人まちづくり再生機構ユマニテさが、麦わら工房ストローミリオネア

活動内容:

佐賀市中心市街地活性化を目的に、佐賀大学のサテライト「ゆっつら～と館」のリノベーション及びゆっつら～と館を拠点としたまちづくりイベントやワークショップを企画・運営した。また、佐賀市が運営する佐賀バルーンミュージアムで行われた市民参加型の定期的なジオラマづくりワークショップに参加した。

成果(学生教育の観点から):

ゆっつら～と館を拠点とした活動を行うことで、中心市街地について知識を得ることができた。また、自らが学び講師を務めるワークショップの開催や中心市街地活性化につながるイベントへの出展により、企画内容の精査やチームワークの大切さを学んだ。学外の社会人とのやり取りを通じた、コミュニケーション能力等の社会人基礎力の向上にもつながった。

唐津市:

■唐津市相知町蕨野地区での棚田保全活動

- ① 5/14 蕨野の棚田保全支援
- ② 6/ 2 棚田の用水路「横溝」の清掃活動、
「AQUA SOCIAL FES!!!」会場の棚田の
除草作業と生物調査



第2回「AQUA SOCIAL FES!!」での稲刈り



サザエの殻割体験

- ③ 6/ 4 第1回「AQUA SOCIAL FES!!」開催
- ④ 9/24 萩野での「月灯りコンサート」の準備
- ⑤ 9/30 第2回「AQUA SOCIAL FES!!」開催
- ⑥ 10/ 7 萩野の棚田での「月灯りコンサート」開催
- ⑦ 12/10 萩野の棚田での花壇作り
- ⑧ 1/20 小岳整備

全学教育機構 インターフェース科目

- ・地域環境の保全と市民社会Ⅲ・Ⅳ
- ・地域創成学Ⅰ・Ⅱ

農学部

- ・アグリ創生教育研究センター
- ・生物環境科学科地域資源学研究室
(延べ161名)

連携団体: NPO法人萩野の棚田を守ろう会

活動内容:

萩野地区の地域資源である棚田をフィールドに、企業と連携した環境保全活動や地域活性化イベントの開催、地域の環境整備活動を実施した。環境保全活動においては、子ども向け環境教室を開催し、棚田に生息する生き物を紹介した。また、環境整備活動では遊歩道の整備や広場への花壇の設置を行った。

成果 (学生教育の観点から) :

地域住民との交流を通して中山間地域の現状を知ることができた。また、地域活性化や環境保全イベントの企画・運営方法を学んだ。さらに、イベントを開催したことにより、地域住民と学生らの「地域創成」に対する価値観の違いを把握することができた。

■向島における合宿型フィールドワーク

- ① 6/20、7/4 事前学習会の実施
- ② 7/15～17 2泊3日「フィールドワーク基礎演習」合宿

- ① 農学部 生物環境科学科
・地域社会開発学コース (12名)
- ② 農学部 生物環境科学科
・地域社会開発学コース (12名)
農学研究科 生物資源科学専攻
・地域社会開発学コース (5名)

活動内容:

- ① 文献資料から唐津の離島の現状や向島の概要について学んだ。
- ② 島内エクスカージョンや島民の方々との交流会、奉仕活動、海士漁見学、動画撮影と映像編集を行い、最後に島民の方々へ発表を行った。

成果 (学生教育の観点から) :

事前学習と2日間のフィールドワークで得た情報を基に、班ごとに島の魅力を伝えるPR動画を作成し、最終日には島民の方々に動画を披露した。動画制作の過程で島の魅力や課題を知ることができた。同時に、平成28年度に向島をフィールドに修士論文を作成した学生による報告会を実施し、研究の成果を地域に還元することができた。

嬉野市:

■豊ふぁー夢を拠点とした地域活性化プロジェクト

- ① 11/11 豊ふぁー夢での農業支援・エゴマ脱穀作業
- ② 12/16 久間地区収穫祭への参画



エゴマの脱穀支援



きばる塾での地域づくりSWOT分析

全学教育機構 インターフェース科目
・地域創成学II (延べ10名)

連携団体:豊ふあー夢

活動内容:

エゴマの栽培支援と昨年完成したエゴマを使った商品の販売支援等の6次産業化に向けた取り組みや、地域活性化イベントの運営に参画した。

成果 (学生教育の観点から):

豊ふあー夢の現状を学び、エゴマの脱穀作業を支援することで、農業の大変さや高齢化等の課題に対応することの重要性を学んだ。また、農作物の販売や6次産業化商品の販売を主とするイベントへの参画によって、6次産業化後の販売等に係る課題を知ることができた。

神崎市:

■城原地区における地域住民主体の地域活性化活動への参画

- ① 5/28 城原地区視察とイベントへの参画
- ② 7/ 9 城原地区集落調査
- ③ 8/11 きばる祭打ち合わせ
- ④10/ 1 きばる祭への参画
- ⑤10/15、11/19、12/17、1/21 きばる塾への参加

全学教育機構 インターフェース科目
・地域創成学I・II (延べ52名)

連携団体:神崎市、きばる塾

活動内容:

城原地区の活性化に向け、集落調査や戦略策定のための「地域づくりSWOT分析」の実施、学生に

よる城原の歴史文化を活用した地域づくり提案を行った。

成果 (学生教育の観点から):

活動を通して地域の魅力である「歴史文化遺産」に加えて「農の風景」や「自然環境」を学生が発見し地域住民に伝えることで、地域資源の再発見につながった。それらの資源を、市が主催するウォーキングイベント用マップとしてまとめる活動が継続予定となるなど地域との連携が深まった。

鹿島市:

■鹿島市におけるニューツーリズム研究及び支援

- ①12/16~17 民宿みんなの家体験学習 (7名)
- ② 1/27~28 民宿みんなの家体験学習 (7名)

全学教育機構 インターフェース科目
・地域創成学IV (延べ28名)

連携団体:鹿島市ニューツーリズム推進協議会

活動内容:

鹿島市ニューツーリズム推進協議会と連携し、新規のゲストハウス開業を含む外国人の滞在型観光振興の支援の一環として、日本人学生及び留学生が民宿に宿泊する体験学習を実施した。

成果 (学生教育の観点から):

鹿島市のニューツーリズム振興に対する知識の向上が図られるとともに、体験を基に課題を発見し、その解決に必要なツールを考え提案(宿泊所へのWi-Fi設備の設置提案と鹿島市ニューツーリズム散策マップ作成)することができた。



みんなの家での民泊体験

■ III. 授業科目・担当者一覧

■ 関連するインターフェース科目

「地域・佐賀学コース」—「地域創成学」プログラム

- ・地域創成学Ⅰ:五十嵐勉(全学教育機構)、稲岡司・辻一成(農学部)
- ・地域創成学Ⅱ:五十嵐勉・山内一祥(全学教育機構)
- ・地域創成学Ⅲ:三島伸雄・後藤隆太郎
- ・地域創成学Ⅳ:五十嵐勉(全学教育機構)、山下宗利・藤永豪(文化教育学部)

「文化と共生コース」—「異文化交流」プログラム

- ・異文化交流Ⅲ:中山亜紀子(全学教育機構)

■ 関連する主な学部専門科目

文化教育学部

- ・地理学フィールド実習(山下宗利)
- ・集落実地調査(藤永豪)

理工学部

- ・建築デザイン手法(三島伸雄他)
- ・卒業制作(三島伸雄他)

農学部

- ・フィールドワーク基礎演習(辻一成他)
- ・農村開発学(五十嵐勉)
- ・環境地理学(五十嵐勉)
- ・地域資源学演習Ⅰ・Ⅱ(五十嵐勉)
- ・卒業研究

■ IV. 関連する主な教育・研究・社会貢献業績

<教員>

(論文等)

- ・五十嵐勉・森部光貴:人口減少社会における小規模離島集落の持続的条件—佐賀県肥前町向島を事例に一、海峡圏研究、第17号、45-60頁、2017.8

(講演等)

- ・五十嵐勉:佐賀大学における地域に根ざしたPBL学習とCommunity Campus—サテライトから村の公民館まで—、Niigataサテライトキャンパス。サミット、於.新潟4大学サテライトキャンパス、2017.6.30

<学生>

- ・岡崎健太:小規模温泉観光地の再生—佐賀市富士町古湯地区を事例に一、平成29年度佐賀大学農学部生物環境科学科卒業論文、2018.3
- ・富吉大樹:生涯スポーツの振興と地域活性化—佐賀市富士町の神水川パークゴルフ場を事例に一、平成29年度佐賀大学農学部生物環境科学科卒業論文、2018.3

学生参画による調査・対話・活動を通じた 環境保全プログラム



小学生対象の干潟の観察会

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:全学教育機構

■連携部局:農学部、低平地沿岸海域研究センター、総合分析実験センター、理工学部



実施代表者

郡山 益実

(全学教育機構・准教授)

■取り組む地域課題:

- ・地域環境の保全と活用
- ・有明海の環境・干潟の保全と活用
- ・市民協働型の環境教育

■連携プロジェクト:A、F

■連携自治体等:

佐賀県、佐賀市、鹿島市、七浦地区振興会干潟体験事業部、東与賀まちづくり協議会、佐賀環境フォーラム、NPO法人有明海再生機構、NPO法人ビッグ・リーフ、NPO法人みんなの森プロジェクト、佐賀自然史研究会、日本野鳥の会佐賀県支部等

■教育カリキュラム:

- ・全学教育機構「インターフェース科目」におけるPBL/SL型フィールドワーク
- ・インターフェース
 - 「環境コース」:有明海学プログラム
地域環境の保全と市民社会プログラム
 - 「文化と共生コース」:映像・デジタル表現プログラム

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ(自治体別):

佐賀市:

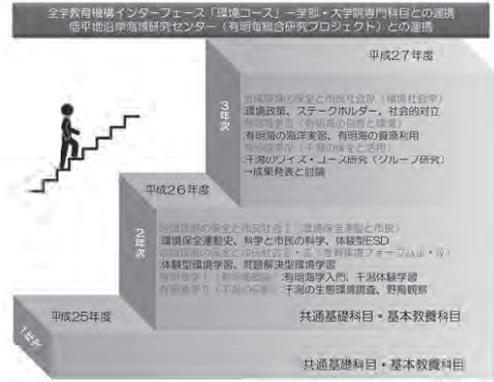
- ・佐賀県生物多様性重要地域「クリークと有明海」における地域環境の保全

鹿島市:

- ・有明海の環境保全とエコツーリズム振興

プログラムの目的

「地域資源の保全と活用」「有明海的环境保全と活用」を目的に、全学教育機構における教養教育改革の一環として行います。教養教育のインターフェース「環境コース」の「有明海学」「地域環境の保全と市民社会」プログラム、及び「異文化理解コース」の「映像・デジタル表現」において、主体的な環境学習プログラムを実施・構築します。



プロジェクト

活動報告

- 平成25年度** 試行的取り組みを開始
1. 「有明海学—市民の科学講座—」による市民・学生参加型の環境教育 等
 2. 有明海・干潟における環境調査及び実習 等
- 平成26年度** 地域志向型教育・研究・社会貢献の開始
- インターフェース科目「有明海学Ⅰ・Ⅱ」
- ・干潟の体験学習 等
 - ・地元小学生の干潟観察会や地域イベント参加 等
- インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会Ⅰ・Ⅱ」
- ・地域や企業と連携した環境保全イベント 等
 - ・干潟の伝統漁撈を知る体験学習 等
- 平成27年度** 地域志向型教育・研究・社会貢献
- インターフェース科目「有明海学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
- ・有明海・干潟のフィールド実習やグループ研究 等
 - ・地元小中学生の干潟観察会や地域イベント参加 等
- インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会Ⅰ・ⅡⅢⅣ」
- ・地域や企業と連携した環境保全イベント 等
- 平成28年度** 地域志向型教育・研究・社会貢献
- インターフェース科目「有明海学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
- ・有明海・干潟のフィールド実習やグループ研究 等
 - ・地元小中学生の干潟観察会や地域イベント参加 等
- インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会Ⅰ・ⅡⅢⅣ」
- ・地域や企業と連携した環境保全イベント 等
 - ・金立公園活用提案プロジェクト 等
- 平成29年度** 地域志向型教育・研究・社会貢献
- インターフェース科目「有明海学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
- ・有明海・干潟のフィールド実習やグループ研究 等
 - ・地元小中学生の干潟観察会や地域イベント参加 等
 - ・佐賀市と連携した干潟の保全事業 等
- インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会Ⅰ・ⅡⅢⅣ」
- ・地域や企業と連携した環境保全イベント 等
 - ・金立公園活用提案プロジェクト 等

今後の展開

- ・インターフェース「有明海学」を主とした実践的な環境教育の促進と地域社会への還元
- ・干潟の保全とワイスユースに関する地域との連携事業の推進

成果

有明海・干潟の環境学習やイベントへの取り組み

「有明海学」や地域志向関連科目を受講する学生が、地域の団体と連携して、地元の小中学生の干潟自然観察会のスタッフとして参加しています。

また、東よか干潟ラムサール1周年記念式典、東よか干潟ふれあい交流事業、シチメンソウまつり、Enjoy!有明海等に参加し、地域の環境保全に関する実践活動や環境コミュニケーションの促進に努めています。



地域と連携した干潟の保全事業の取り組み



平成29年から佐賀市と佐賀自然史研究会との連携で、東よか干潟のベントス調査、シチメンソウの底質塩分環境調査、カニ類の生態・生息分布調査を始めました。今後、連携調査を継続して行い、東よか干潟の保全とワイスユースに貢献していきます。

金立公園活用提案プロジェクト

インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会」の授業の一環で佐賀市の金立公園活用のため、環境保全活動の企画立案から実施まで、年間を通して行います。平成28年度は、ピオトープ作りと地域の方々との植林活動を実施しました。環境保全活動の企画立案から実施まで、年間を通して行い、地域活動の実践力を身に付けることができました。



「食」から有明海的环境保全を考える



インターフェース科目「地域環境の保全と市民社会」や「有明海学」において、有明海の伝統漁撈のひとつであるうなぎ塚漁体験と、有明海の海産物の加工・販売を行う川田食品を訪問しました。有明海沿岸の地域住民の食生活の変化や有明海的环境変化、漁業の担い手不足など、さまざまな地域課題を発見。活動を通して、有明海の生産から消費までを経験し、「食」という分野からの地域環境の保全について学修しています。

■ II.平成29年度の活動

佐賀市:

■東よか干潟のシチメンソウ生育環境調査

平成29年4月～平成30年3月(毎月2回) 東よか干潟のシチメンソウ生育環境調査

農学部 生物環境科学科

・浅海干潟環境学研究室(6名)

連携団体:佐賀市、佐賀自然史研究会

活動内容:

毎月2回、東よか干潟において保護ヤード内に生息するシチメンソウの植生環境をモニタリングした。

成果(学生教育の観点から):

シチメンソウの生育と底質塩分環境の時間的・空間的な変化に関する統計解析法の理解が深まった。



シチメンソウ調査

■東よか干潟の広域生物調査

5/26・8/25・10/20、東よか干潟の広域生物調査

農学部 生物環境科学科

・浅海干潟環境学研究室(6名)

連携団体:佐賀市、佐賀自然史研究会

活動内容:

東よか干潟における広域的なマクロベントスの分布調査を佐賀市環境政策課と佐賀自然史研究会と連携し年3回行った。

成果(学生教育の観点から):

マクロベントスの分布と生息環境を定量的に評価するHSIモデルの基礎データの収集と理解の促進につながった。



ベントス広域調査

■東よか干潟ラムサールクラブの活動参加

5/27 東よか干潟ラムサールクラブの活動参加

農学部 生物環境科学科

・浅海干潟環境学研究室(5名)

農学部 応用生物科学科

・システム生態学研究室(4名)

連携団体:

佐賀市、東与賀まちづくり協議会、佐賀自然史研究会、日本野鳥の会佐賀県支部

活動内容:

シチメンソウヤード周辺の干潟の生き物調査を行った。

成果(学生教育の観点から):

小中学生へ平易に説明するため、干潟の生物に関する基礎知識の定着が見られた。



ラムサールクラブの活動参加

■金立公園活用提案プロジェクト

① 8 / 5 金立公園視察

② 10 / 16 ビオトープづくり

③ 11 / 12 草刈り

④ 12 / 3 植樹活動

⑤ 1 / 21 公園整備・植樹活動



金立公園四季の丘での植林活動

全学教育機構 インターフェース科目
・地域環境の保全と市民社会Ⅲ・Ⅳ (①6名、②4名、③4名、④11名、⑤8名)

連携団体:佐賀市建設部緑化推進課

活動内容:

昨年度に引き続き、佐賀市の金立公園活用のためピオトープづくりや草刈りなどの環境整備、植樹活動を実施した。

成果 (学生教育の観点から):

環境保全活動を通して、身近な環境問題について理解することができた。また、佐賀市役所と連携した取り組みにより、地域のニーズを把握するとともに、一市民として地域の環境保全に対する役割を認識することができた。

■「有明海学Ⅳ」による有明海・干潟のグループ調査と成果発表

10～2月 (全15回) インターフェース科目「有明海学Ⅳ」※1/25、2/1 グループ研究の成果発表

全学教育機構 インターフェース科目
・有明海学Ⅳ (40名)

活動内容:

インターフェース科目「有明海学Ⅳ」で、自然科学系と人文社会系の5つのテーマに学生を振り分け、後学期を通じて各テーマでグループ研究を行い、研究成果を発表した。

成果 (学生教育の観点から):

グループ研究を行うことにより、現地調査やデータの整理・解析等の理解が深まった。また、成果発表会を行うことで、プレゼンテーション資料の作



成果発表会

成方法や、構成、発表技法などのスキル向上につながった。

■環境イベントへの参画

①10/25 「よかウッドフェスタ」用竹狩り

②11/ 5 「よかウッドフェスタ」出展

全学教育機構 インターフェース科目
・地域環境の保全と市民社会Ⅳ (①5名、②13名)

連携団体:NPO法人みんなの森プロジェクト

活動内容:

NPO法人みんなの森プロジェクトと連携し、佐賀県及び公益財団法人さがが緑の基金が主催する「よかウッドフェスタ」に参画した。出展内容の企画案作成から展示物等の準備、当日の運営までを行った。

成果 (学生教育の観点から):

環境保全イベントのブース企画・運営を体験して、イベント出展までの流れを理解することができた。子ども向け環境教育ツールを作成することにより、授業で学んだ知識の定着につながった。また、実際に里山資源を環境教育に活かす方法を学んだ。



「よかウッドフェスタ」での子ども向け環境教育

■干潟の生態調査で学ぶ地域環境

①10/28 東よか干潟での生態調査

②11/ 8 干潟の生物の同定作業

①全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅳ (37名)

農学部 生物環境科学科

・浅海干潟環境学研究室 (6名)

②全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅳ (39名)

活動内容:

①佐賀市の東よか干潟で、干潟底泥中のベントスの採取、干潟の表面の巣穴の分布状況、底泥の酸化還元電位のフィールド調査を実施した。フィールド調査は、6~7名を1グループとし、計6グループで分担・協働しながら作業を行った。

②11/8のフィールド調査で採取したベントスの種の同定と調査データの取りまとめを行った。

成果 (学生教育の観点から) :

①フィールド調査により、干潟の基本的な生態調査に関する調査方法とその取りまとめ方を習得できた。また、調査の結果は「干潟の環境と生態系」に関する一連の講義で紹介したため、講義内容の理解が深まった。

②グループワークを通して、グループ内での役割分担やレポート作成の協働作業により、調査テーマや干潟環境への理解の掘り下げにつながった。

■アジア湿地シンポジウムへの参加

①11/ 8 アジア湿地シンポジウム2017

②11/11 アジア湿地シンポジウム2017公開シンポジウムin佐賀



アジア湿地シンポジウム

①農学部 生物環境科学科

・浅海干潟環境学研究室 (2名)

②全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅱ (3名)

活動内容:

①佐賀市で開催されたアジア湿地シンポジウムのポスターセッションに参加した。

②佐賀市で開催された公開シンポジウムに参加し、有明海の各干潟で取り組まれている活動例を学んだ。

成果 (学生教育の観点から) :

①ポスターセッションのコアタイムでは、英語で質疑応答をすることにより、学術英語の表現やコミュニケーションスキルの向上につながった。

②荒尾干潟、東よか干潟、鹿島干潟での具体的な活動例を学ぶことにより、干潟のワイズユースに関する理解の促進につながった。



干潟のフィールド生態実習

■小学生対象の東よか干潟の観察会

①11/15 観察会の事前学習会

②11/24 干潟の観察会

①農学部 学部専門科目

・干潟環境学 (3名)

全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅳ (1名)

②農学部 学部専門科目

・干潟環境学 (3名)

全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅳ (1名)



東与賀小学生の干潟観察会

農学部 生物環境科学科

・浅海干潟環境学研究室 (1名)

農学部 応用生物科学科

・システム生態学研究室 (5名)

連携団体:佐賀市、東与賀まちづくり協議会、佐賀自然史研究会、日本野鳥の会佐賀県支部

活動内容:

- ①東与賀小学校5年生を対象とした干潟の観察会の打ち合わせと調査方法の事前学習会を行った。
- ②東与賀小学校5年生(100名程度)を対象にした干潟の観察会実施時に、学生が分担して干潟の生物、底泥の環境について現地指導を行った。

成果(学生教育の観点から):

- ①事前学習会の実施により、当日小学生へ説明する調査方法についての理解が深まった。
- ②小学生へ平易に説明するため、干潟の環境や生物に関する基礎知識の定着や、プレゼン能力の向上、環境キャリア教育の促進につながった。

■農産物販売による地域活性化

12/2 佐大マルシェの運営・販売支援

全学教育機構 インターフェース科目

・地域環境の保全と市民社会Ⅳ(8名)

連携団体:佐賀大学マルシェ実行委員会

活動内容:

佐賀市中心市街地で実施した「第3回佐賀大マルシェ」に参加し、イベントの運営及び農産物の販売支援を行った。



成果(学生教育の観点から):

中心市街地活性化のイベント運営を現場で体験することができた。生産者との交流を通して、農産物の生産や販売の現状を学ぶことができた。

■東よか干潟での野鳥観察

12/3 東よか干潟での野鳥観察

全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅱ(40名)

連携団体:日本野鳥の会佐賀県支部

活動内容:

日本野鳥の会佐賀県支部から講師を招き、東よか干潟で野鳥の観察会を行った。野鳥の種類や生態、干潟の環境について説明を受けた。

成果(学生教育の観点から):

干潟の多様な生態系や干潟の環境保全及びワイズユースに関する思考力が深まった。



野鳥の観察会



干潟の体験学習

鹿島市:

■泥干潟を実感する体験学習

5/13 鹿島市干潟体験学習

全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅰ (37名)

活動内容:

鹿島市で干潟体験学習を実施した。干潟体験では、実際に泥干潟に入り、泥干潟の環境や潟スキーなどの体験をし、泥干潟の生物の観察を行った。

成果 (学生教育の観点から):

泥干潟の環境を実体験することで泥干潟の色、におい、感触などを五感で体感し、後学期に開講する有明海学Ⅱへの関心が深まると同時に、有明海学Ⅱで行うフィールド実習の動機付けにつながった。

■有明海の海洋実習

5/27 有明海学Ⅲでの海の実習

全学教育機構 インターフェース科目

・有明海学Ⅲ (40名)

活動内容:

有明海での実習を行った。実習では、有明海の水環境とベントス調査を行った。



有明海での海洋実習

成果 (学生教育の観点から):

海の現地調査の方法や、水環境データの整理・解析法の基礎知識が身に付いた。また、有明海学Ⅲで行う有明海の海域環境に関する講義内容の理解が促進された。

■Ⅲ. 授業科目・担当者一覧

■関連するインターフェース科目

「環境コース」-「有明海学」プログラム

- ・有明海学Ⅰ:速水祐一、木村圭 (低平地沿岸海域研究センター)、五十嵐勉、郡山益実 (全学教育機構)、阿南光政 (農学部)、榎澤秀木 (経済学部)
- ・有明海学Ⅱ:郡山益実 (全学教育機構)
- ・有明海学Ⅲ:速水祐一、木村圭 (低平地沿岸海域研究センター)、郡山益実 (全学教育機構)、阿南光政 (農学部)
- ・有明海学Ⅳ:五十嵐勉、郡山益実 (全学教育機構)、速水祐一、木村圭、藤井直紀 (低平地沿岸海域研究センター)

「環境コース」-「地域環境の保全と市民社会」

プログラム

- ・地域環境の保全と市民社会Ⅰ:五十嵐勉 (全学教育機構)
- ・地域環境の保全と市民社会Ⅱ:五十嵐勉 (全学教育機構)、兒玉広樹 (総合分析実験センター)、宮島徹 (工学系研究科)
- ・地域環境の保全と市民社会Ⅲ:兒玉広樹 (総合分析実験センター)、宮島徹 (工学系研究科)、五十嵐勉 (全学教育機構)
- ・地域環境の保全と市民社会Ⅳ:五十嵐勉 (全学教育機構)、榎澤秀木 (経済学部)、藤村美穂 (農学部)

■関連する主な学部専門科目

農学部

- ・干潟環境学 (郡山益実)
- ・卒業研究 (郡山益実)
- ・卒業研究 (五十嵐勉)
- ・実験水気圏環境学 (郡山益実)

農学研究科

- ・浅海環境工学特論 (郡山益実)

■IV.関連する主な教育・研究・社会 貢献業績

<教員>

(論文等)

・郡山益実,前崎桜樹:東よか干潟高潮間帯域におけるマクロベントスの分布特性と底質環境、佐賀自然史研究、22、1-7、2017

(講演等)

・郡山益実:「有明海における干潟生態系について」、佐賀県立佐賀農業高等学校、2017年6月8日

・郡山益実:「干潟の環境と生態系について」、東よか干潟ガイド養成講座講師、2017年8月11日

・郡山益実:有明海干潟のカニに関するサガテレビへのメール取材、2017年9月27日~28日

・郡山益実:「シチメンソウの植生環境について」、佐賀県立佐賀農業高等学校、2017年10月4日

・郡山益実:「シチメンソウの植生環境-2017年のシチメンソウ調査の研究紹介-」、東よか干潟ガイド養成講座講師、平成28年3月10日

(社会貢献等)

・郡山益実:「東よか干潟環境保全及びワイズユース検討協議会」、副会長、2015年11月~

・郡山益実:「東よか干潟環境保全及びワイズユース検討協議会」、拠点施設検討部会部会長、2017年2月~

<学生>

・中村篤史:「UAV(ドローン)を活用した東よか干潟におけるカニ類の生息環境評価」、平成29年度佐賀大学農学部生物環境科学科生物環境保全学コース 卒業論文

・山口真歩:「東よか干潟におけるカニ類の行動生態解析」、平成29年度佐賀大学農学部生物環境科学科生物環境保全学コース 卒業論文

・植木はる香:「東よか干潟における保護ヤード内シチメンソウの植生環境モニタリング」、平成29年度佐賀大学農学部生物環境科学科生物環境保全学コース 卒業論文

・石橋拓也:「東よか干潟におけるカニ類の巣穴造成に伴う底泥攪拌量の定量的評価」、平成29年

度佐賀大学農学部生物環境科学科生物環境保全学コース 卒業論文

・前崎桜樹・郡山益実・石橋拓也:「東よか干潟高潮間帯域におけるマクロベントス群集」、平成29年度農業農村工学会九州沖縄支部大会、福岡市、2017年11月1日、優秀ポスター賞受賞

・石橋拓也・郡山益実・前崎桜樹:「東よか干潟におけるカニ類の巣穴造成に伴う底泥攪拌量の定量的評価」、平成29年度農業農村工学会九州沖縄支部大会、福岡市、2017年11月1日、優秀ポスター賞受賞

・Takuya Ishibashi・Masumi Koriyama・Sakura Maesaki・Maho Yamaguchi・Atushi Nakamura・Haruka Ueki:「Evaluation of burrowing pattern and burrow structures of crabs in the muddy tidal flat of the Ariake Bay」、8th Asian Wetland Symposium、佐賀市、2017年11月8日

・Sakura Maesaki・Masumi Koriyama・Atushi Nakamura・Takuya Ishibashi:「Temporal and spatial variability of macrobenthic fauna in the high intertidal mud flat of the Ariake Bay」、8th Asian Wetland Symposium、佐賀市、2017年11月8日

・前崎桜樹・郡山益実・石橋拓也:東よか干潟高潮間帯域におけるマクロベントス群集、佐賀大学農学部彙報、103、1-8、2018

・Takuya Ishibashi・Masumi Koriyama・Sakura Maesaki・Maho Yamaguchi・Atushi Nakamura・Haruka Ueki:Evaluation of burrowing pattern and burrow structures of crabs in the muddy tidal flat of the Ariake Bay, Proceeding of the 8th Asian Wetland Symposium, 2018 (in press).

・Sakura Maesaki・Masumi Koriyama・Atushi Nakamura・Takuya Ishibashi:Temporal and spatial variability of macrobenthic fauna in the high intertidal mud flat of the Ariake Bay, Proceeding of the 8th Asian Wetland Symposium, 2018 (in press).

地域の高齢者及び子どものヘルスプロモーション 促進に向けた学生の実践力育成プロジェクト



佐賀大学健康教室集合写真

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:文化教育学部

■連携部局:文化教育学部健康スポーツ科学
講座、文化教育学部地域生活講座

■取り組む地域課題:

- ・地域の高齢者の健康増進と子どもの体力向上

■連携自治体等:

佐賀県、佐賀市、嬉野市、鹿島市、NPO法人
スポーツフォアオール



実施代表者
井上 伸一
(教育学部・教授)

■教育カリキュラム:

- ・ヘルスプロモーション実習Ⅰ
- ・学校保健
- ・健康福祉論
- ・ヘルスプロモーション演習
- ・バイオメカニクス

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ(自治体別):

佐賀市:

- ・佐賀大学における地域住民参加者と学生スタッフでの健康教室の開催。講義や演習等で学んだ運動プログラムを作成し、参加者に指導することにより学生の実践力を育成
- ・身体測定・体力測定の分析と評価
- ・骨密度の分析と評価

嬉野市・鹿島市:

- ・出張型の健康教室における学生オリジナルの運動プログラムの作成、指導、現場に即した指導力育成
- ・身体測定・体力測定の分析と評価
- ・骨密度の分析と評価

■ II.平成29年度の活動

佐賀市:

■佐賀大学中高齢者のための健康教室

4/21~7/14 (全12回)、10/13~12/22 (全9回)

健康づくり推進団体支援事業における健康教室
文化教育学部人間環境課程

- ・ヘルスプロモーション実習II (4名)
- ・健康福祉論 (6名)

教育学部学校教育課程

- ・ヘルスプロモーション実習 (10名)
- ・安全教育 (10名)

連携団体:NPO法人スポーツフォアオール

活動内容:

佐賀大学での健康教室において、参加者の運動プログラムの指導を行い、指導力やコミュニケーション力等の実践力の育成を行った。ストレッチや筋力トレーニングの運動プログラムを学生が構築し、高齢者に対する運動処方の実務的な能力を身に付けた。

成果 (学生教育の観点から):

世代の異なる高齢者とのコミュニケーション力を身に付けることができた。また、地域貢献事業に携わることにより、地域社会の一員としての意識が高まった。



参加者との交流の様子

鹿島市:

■鹿島市における出張健康教室

4/7~3/30 (全57回) 介護予防普及啓発事業における健康教室



骨密度を測定している様子

文化教育学部人間環境課程

バイオメカニクス(6名)

連携団体:NPO法人スポーツフォアオール

活動内容:

出張型の健康教室において、学生自らが考えた運動プログラムの指導を行った。また参加者の体組成、骨密度の測定し、分析・評価を行った。

成果 (学生教育の観点から):

出張型健康教室において高齢者に対する運動プログラムを計画立案することにより、運動処方に関する理解が深まった。また身体・体力測定を行うことで学生のヘルスプロモーションに対する知識の向上が見られた。

嬉野市:

■嬉野市における出張健康教室

5/9~3/27 (全44回)

ロコモ予防運動教室における健康教室

文化教育学部人間環境課程

- ・ヘルスプロモーション実習II (4名)
- ・卒業研究 (6名)
- ・バイオメカニクス(6名)

連携団体:NPO法人スポーツフォアオール

活動内容:

出張型の健康教室において、学生自らが考えた運動プログラムの指導を行った。また参加者の体組成、骨密度、活動量などの分析・評価を行った。

成果 (学生教育の観点から):

出張型健康教室に参加したことにより、嬉野市地域住民と学生との交流が深まった。また身体・体



体力測定を行っている様子

力測定を行うことで学生のヘルスプロモーションに対する知識の向上が見られた。

■ III. 授業科目・担当者一覧

■ 関連する主な学部専門科目

文化教育学部

- ・ヘルスプロモーション実習Ⅱ (井上伸一)
- ・健康福祉論 (山津幸司)
- ・バイオメカニクス (井上伸一)
- ・卒業研究

教育学部

- ・安全教育 (栗原 淳)
- ・ヘルスプロモーション実習 (井上伸一)

■ IV. 関連する主な教育・研究・社会 貢献業績

< 教員 >

(講演等)

- ・井上伸一：佐賀県体育協会「チャレンジウォーク」
(12月8日)
- ・井上伸一：中川副公民館健康支援事業 (10月4日, 10月11日)

地域との連携による地域経済政策に関わる学生主体の調査研究と成果の地域社会への還元



小城フットパスモニターツアー開催

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:

経済学部(地域経済研究センター)

■連携部局:全学教育機構インターフェース

「地域・佐賀学コース」



実施代表者

戸田 順一郎

(経済学部・准教授)

■取り組む地域課題:

- ・地域公共政策の立案
- ・地域産業の振興政策の立案
- ・地方政治の活性化
- ・地域ブランドの開発

■連携プロジェクト:A

■連携自治体等:

佐賀県(佐賀地域経済研究会)、小城市、唐津市、佐賀市

■教育カリキュラム:

- ・地域経済と社会
- ・演習
- ・基礎演習

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ(自治体別):

小城市:

- ・「地域資源を活用した市民の健康増進と地域活性化のための方策」をテーマとした調査研究

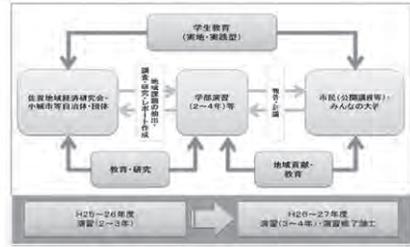
唐津市:

- ・まちづくりの観点を含めた各種防災計画の現状についての調査研究
- ・買い物困難者支援対策におけるICT利活用についての調査研究

佐賀市:

- ・消費者の交通手段と地域資源(文化創造産業)の嗜好に基づく地域活性化に関する調査研究

学生自身が、地域の経済問題を調査して課題を見つけ、対策の検討とまとめを行います。地域が抱える課題への対策は、佐賀県下の市部の地域経済政策の立案主体からなる「佐賀地域経済研究会」の協力を得ながら行い、その成果は大学の公開講座等で発表して地域に還元します。



■ 赤松公民館文化祭でのICTリテラシ啓発発表及び調査分析(経済学部 羽石ゼミ)

「佐賀県高度情報化推進協議会」の実証研究として、平成24年度より27年度まで情報通信技術のシニア層への活用普及事業を行ってきました。平成28年度は若年層及びその保護者の情報通信技術の利用認識等を調査し「リテラシ啓発活動を実施しました。

平成28年度は、佐賀市赤松公民館主催の赤松文化祭に出発者として参加し、身近なSNS事情と題したICTリテラシの啓発ポスター展示を行い、保護者のSNSに関する認識調査を実施しました。また、佐賀市立赤松小学校と佐賀県立佐賀商業高校の児童生徒の利用状況調査を実施し、保護者と利用している児童生徒の認識の違いなどをまとめ、赤松公民館でポスター発表を行いました。また、体験スペースの横にICT相談窓口を設け、スマートフォンやタブレットの基本的な使い方や機能の設定方法など、また小学生の親からは子どもにスマートフォンを使用させる際に感じている不安などについても相談なども受け本事業の重要性を再認識しました。

本活動を通し学生はSNSをはじめとするICTの保護者と児童生徒の認識の違いを明らかにし、その対策を考えるうえでの調査分析を行うことにより、調査・分析やそのための準備を實際学び大きな成長となりました。



赤松文化祭でのポスター展示



赤松文化祭でのポスター説明

■ 佐賀市と連携した自転車イベント企画(経済学部 亀山ゼミ)

今年のゼミ研究のコンセプトの1つを「サブカルチャー」と決めて、私たちは今年3月に佐賀市観光振興課が主催で行った「自転車モニターツアー」に参加しました。これをきっかけとして、佐賀市と「自転車を用いた佐賀県以外の出身者向けのイベント」を企画することになりました。各々が企画を毎週提案し、議論を深めて企画を形にしていきました。

■「ゲームとSNS」この企画が目指すものとは

最終的に、私たちが作り上げた企画は「SNSを用いたゲームを自転車と共に楽しむ」というもので、企画コンセプトとして「佐賀の魅力発見・発信」を掲げています。佐賀市と会議を重ねていくうちに、この企画をただ一度の企画にするのではなく、佐賀ブランドの商品として売れるように作り上げるという、新たな目標も生まれました。企画が段々と形になっていくことで、期待感と共に責任感も生まれました。

■イベントを通じた観光振興、情報発信の実現へ

9月11日に亀山研究室主催のイベントを行いました。参加者の生の声を聞いて、多くの反省点、問題点が浮上してきました。イベントの本開催における私たちの調査研究のコンセプトは「SNSのロコミマーケティングにおけるロコミの伝達速度とその範囲」で、事後アンケートをもとにデータ分析を行っていく予定です。あと2ヶ月という短い期間ではありますが、クオリティの向上に尽力していきたいです。



裏の地図のみを頼りに写真の場所を見つけてSNSに投稿するというゲーム内容

■ 地域住民、行政との協働によるフットパスを用いた地域活性化(経済学部 戸田ゼミ)

平成27年度より、「地域資源を活用した市民の健康増進と地域活性化のための方策」というテーマについて、地域住民や小城市役所との協働のもと、同市内へのフットパスの導入に取り組んでいます。現在は小城市小町桜岡地区において、地域住民のみならずとも小町のまちなかでのフットパスコースづくりに取り組んでいます。同地域においてワークショップやイベントを開催することに加え、先進的な地域を訪れたり、取り組みを行っている団体・大学との交流を図ったりしています。

9月10日には小城市商工会議所会員大会でのフットパス体験会(参加者82名)を、9月30日には主に地元の人を対象としたフットパスモニターツアー(参加者35名)を開催し、多くの方にコースを歩いていただきました。

今後は、現在進めているコースの完成、地域で運営していくためのチーム作り、地域への認知・理解の向上を目標に引き続き活動を続けていきたいと思います。



コースづくりのための情報収集



全体でのミーティング



小城市役所でのプレゼン



イベントでのコース試歩



西日本新聞での紹介記事(2017年6月3日)

■ II.平成29年度の活動

小城市:

■「地域資源を活用した市民の健康増進と地域活性化のための方策」をテーマとした調査研究

- ① 4/16 住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)
- ② 5/14 先進地視察(於 福岡県中間市)
- ③ 6/3 住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)
- ④ 7/14 小城の歴史とまちづくり交流会でのフットパスについての講演(於 小城商工会議所)
- ⑤ 7/15 西南学院大学藤川ゼミとの合同ゼミでのフットパスの取り組みについての研究発表
- ⑥ 7/17 住民ワークショップの実施(於 本町公民館、桜岡地区)
- ⑦ 8/29 小城市商工観光課、企画政策課との「フットパス」に関する意見交換会(於 小城市役所)
- ⑧ 9/10 小城商工会議会員大会でのフットパス体験イベントの実施、住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)
- ⑨ 9/13 桜岡校区区長会でのフットパスモニターツアーについての説明(於 ゆめぶらっと小城)
- ⑩ 9/30 第1回小城フットパスモニターツアーの実施、住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)
- ⑪ 11/4 住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)
- ⑫ 11/10 第2回全国カレッジフットパスフォーラムへの参加・発表(於 北九州市立大学)
- ⑬ 12/9 住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)
- ⑭ 1/20 住民ワークショップの実施(於 ゆめぶらっと小城、桜岡地区)



フットパスコース探しのまち歩き風景

- ⑮ 1/27 「おぎの未来デザイン」での活動報告(於 ゆめぶらっと小城)

経済学部 経済学科 戸田ゼミ

- ・演習4年(9名)
- ・演習3年(10名)
- ・基礎演習(10名)

- ①10名、②10名、③9名、④1名、⑤10名、⑥10名、⑦2名、⑧10名、⑨2名、⑩24名、⑪20名、⑫20名、⑬17名、⑭25名、⑮2名

連携団体:

小城市企画政策課、NPO法人よろこぞ小城、小城商工会議所、フットパスネットワーク九州、熊本大学工学部社会環境工学科、北九州市立大学地域創生学群

活動内容:

小城市桜岡地区において、フットパスコースについては、約20名の地域住民と「フットパス」に関する意見交換及びまち歩きを定期的に行い(ワークショップを計8回実施)コースを確定させることが



実施メンバーの集合写真

できた。また本取組みの地域における認知の向上を図るため、2度のイベント（一般参加者計115名）の実施、講演会の開催、チラシの作成、新聞（西日本新聞平成29年6月8日、佐賀新聞平成29年9月20日）・市報（小城市広報「さくら」9月号（8/18発行））での情報発信などを行った。次年度は住民を中心とした推進団体が立ち上がるなど、地域における機運が徐々に高まりつつある。

成果（学生教育の観点から）：

地域に入り地域住民や行政の方と接することで、多くを学ぶとともに地域に対する関心が深まった。また地域における課題解決やまちづくりの難しさを知ることができた。

唐津市：

■買い物困難者支援対策におけるICT利活用についての調査研究

- ① 7/3 『わくわくインターネットでお買い物体験 inセカンドハウス』
- ② 7/6 『わくわくインターネットでお買い物体験 inセカンドハウス』大雨で中止
- ③ 7/12 『わくわくインターネットでお買い物体験 inセカンドハウス』
- ④10/ 5 「簡単!便利!ネットショッピング体験inまいづる999」
- ⑤10/11 「簡単!便利!ネットショッピング体験inまいづる999」



セカンドハウスでの調査



まいづる999での調査

経済学部 経済学科 羽石ゼミ

①②③経済学部経営学科

・演習4年（2名）

④経済学部経営学科

・演習4年（4名）

⑤経済学部経営学科

・演習4年（2名）

・演習3年（4名）

連携団体:佐賀県高度情報化推進協議会

活動内容:

佐賀県高度情報化推進協議会のICT利活用促進実証事業（買い物）に協力して、調査研究を行った。

①②③は、小規模多機能型居宅介護施設の利用者及び近隣住民の方に、タブレット等のICT機器を利用した買い物体験後アンケートを実施した。④⑤は、スーパーにてネットショッピングの体験後アンケート調査を実施した。

成果（学生教育の観点から）：

実際に活用する現場に赴きユーザーの様子や生の声を聴くことによって、研究室や文献での研究ではわからない部分を実感することができた。また、調査を行う上での準備や協力者への接し方などの苦労から、就職してから活かすことができる社会人基礎力の向上につながった。

佐賀市:

■消費者の交通手段と地域資源（文化創造産業）の嗜好に基づく地域活性化に関する調査研究

- ① 6/13 佐賀市観光振興課と企画案の打ち合わせ (学外授業)
- ② 8/10 佐賀市観光振興課と企画案の打ち合わせ (学外授業)
- ③ 8/30 佐賀市観光振興課と企画案の打ち合わせ (学外授業)
- ④ 9/11 佐賀市観光振興課と共催でフォトレジャーハントイベント実施 (学外授業)
- ⑤ 10/ 5 佐賀市観光振興課と企画案の打ち合わせ (学外授業)
- ⑥ 11/14 佐賀市観光振興課と共催でフォトレジャーハント本イベント実施 (学外授業)
- ⑦ 11/24 外部講師 (香川大学・ミン教授) による講義とディスカッション
- ⑧ 12/22 外部講師 (九州電力・宍道氏) による講義とディスカッション
- ⑨ 2/ 2 外部講師 (北九州市役所・佐伯氏) による講義とディスカッション
- ⑩ 2/20 佐賀市観光振興課で、フォトレジャーハント本イベントの際に実施したアンケート調査に基づく分析結果の報告会・報告書の提出



フォトレジャーハントの実施風景②開催中の風景

経済学部

- ①演習3年 (6名)
- ②演習3年 (1名)
- ③演習3年 (3名)
- ④演習3年・演習4年・基礎演習 (計14名)
- ⑤演習3年 (3名)
- ⑥演習3年・演習4年・基礎演習 (計14名)
- ⑦地域政策 (98名)
- ⑧地域政策 (93名)
- ⑨地域政策 (154名)
- ⑩演習3年・基礎演習 (計8名)

連携団体:

佐賀市観光振興課、香川大学大学院地域マネジメント研究科、九州電力佐賀支社、北九州市港湾空港局クルーズ・交流課

活動内容:

演習 (3年) を軸に、佐賀市観光振興課と共催でイベント「フォトレジャーハント」を開催した。佐賀市と協議しながら、イベントの企画案及びイベント参加者を対象としたアンケート票を作成した。11月14日に本イベントを開催し、終了後、参加者に「観光商品としての本イベントの価値」に関するアンケート調査を行った。アンケートデータから支払意思額などを分析し作成した報告書をもとに、佐賀市観光振興課に結果報告を行い、観光政策について議論した。

地域政策の授業において、外部講師を招聘し、地域マーケティングや企業のCSR活動、インバウンドの動向などの講義を受けるとともに、外部講師と学生 (ゼミ生中心) が意見交換を行った。



フォトレジャーハントの実施風景①開催前の説明

成果（学生教育の観点から）：

フォトレジャーハントの企画・開催を佐賀市観光振興課と共同で行ったことで、社会（仕事）では、費用対効果を含めて、観光商品として価値があるのかどうかということ判断する必要があるということを知ることができた。連絡調整や情報共有を責任もって機敏に行わないといけないことも身をもって体験できた。一方で、フォトレジャーハントのイベント実施の様子が「佐賀新聞」で取り上げられたため、イベントの企画・実施を担ってきた学生には大きな励みとなった。

佐賀大学経済学部経営学科、卒業論文
・立山愛梨・山内誠也・丸山耀輝・佐光孝平・井上和紀・花田晃樹「佐賀の街で行うイベントの魅力発見と景観評価に関する調査と研究」

■ III. 授業科目・担当者一覧

■ 関連する主な学部専門科目

経済学部

- ・基礎演習、演習（3年）、演習（4年）（樫澤秀木・亀山嘉大・戸田順一郎・富田義典・畑山敏夫・羽石寛志・山本長次）
- ・地域政策（亀山嘉大）
- ・地域経済と社会Ⅰ（戸田順一郎）

■ IV. 関連する主な教育・研究・社会貢献業績

< 教員 >

（講演等）

- ・羽石寛志「ICT利活用促進実証事業（買い物）中間報告」佐賀県高度情報化推進協議会幹事会, 9月28日
- ・戸田順一郎「フットパスと観光まちづくりー小城におけるフットパス導入に向けてー」小城商工会議所小城の歴史とまちづくり交流会（平成29年7月14日）
- ・戸田順一郎「佐賀県におけるシビックプライド教育実践の事例」平成29年度熊大政創研政策フォーラム（平成29年9月9日）

< 学生 >

- ・阿南佑甫・森野郁也：「買物困難者支援としてのネットスーパーに関する実証研究」、平成29年度

離島・山間地域における保健医療と QOL向上のための人材育成プロジェクト



実習参加者の集合写真（夏期地域医療実習）

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:

医学部地域医療支援学講座（寄付講座）

■連携部局:農学部生物環境科学科地域社会
開発コース、全学教育機構インターフェース
「地域・佐賀学コース」



実施代表者
杉岡 隆
(医学部・教授)

■取り組む地域課題:

- ・「地域医療を担える」医療人材の育成
- ・離島や山間地域の保健医療とQOLの向上

■連携プロジェクト:A

■連携自治体等:

佐賀県、佐賀市、唐津市、佐賀県医療センター好生館、佐賀市富士大和温泉病院、佐賀市立国民健康保険三瀬診療所、唐津赤十字病院、七山診療所、唐津市小川島診療所、唐津市加唐島診療所、唐津市馬渡島診療所

■教育カリキュラム:

地域枠入学生特別プログラム

- ・「夏期地域医療実習（自治医科大学・佐賀大学・長崎大学合同夏期実習）」
 - ・「佐賀県内基幹病院・中核病院実習」
 - ・「地域医療セミナー」
- インターフェース
- ・「地域・佐賀学コース」：地域創成学プログラム

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ（自治体別）:

佐賀県:

- ・佐賀県内の離島および山間部地区における宿泊型の地域医療実習の企画・支援
- ・離島及び山間部における医療対策、必要な資源について講義
- ・佐賀県立医療センター好生館、唐津赤十字病院、サガハイマツト（鳥栖）における実習の企画調整

佐賀市:

- ・富士大和温泉病院、三瀬診療所における山間部地域医療実習の施設提供と講義

唐津市:

- ・小川島、加唐島、馬渡島における離島実習の企画・支援
- ・七山診療所実習の企画調整

■ II.平成29年度の活動

佐賀県:

■地域枠入学生による早期臨床体験実習

9/11～15 地域枠入学生特別プログラム「佐賀県内基幹病院・中核病院実習」

・医学部医学科 地域枠特別入学生および一般枠入学生 (27名)

連携団体:

佐賀県医療センター好生館、NHO佐賀病院、NHO嬉野医療センター、唐津赤十字病院、唐津市民病院きたはた、佐賀市立富士大和温泉病院、町立太良病院、伊万里有田共立病院、小城市民病院、織田病院(鹿島市)、江口病院(小城市)、ひらまつ病院(小城市)、佐賀記念病院(佐賀市)、志田病院(鹿島) 全14施設

活動内容:

佐賀県内の地域基幹病院・中核病院で、1週間の参加型実習を行った。

成果(学生教育の観点から):

医学部医学科1年次の早期に、地域の基幹病院・中核病院で実習を行うことで、地域医療に必要なスキルと地域のニーズに触れることができた。また、地域の医療者や住民からの医学生への期待を感じるにより、今後の学習のモチベーションを向上させ、学習目標を明確に立てることができた。



血圧測定の講義と演習

※患者・学生の個人情報に配慮し、一部を抜粋。

■離島及び山間部における地域医療実習と佐賀県におけるがん診療への取り組み

8/16～18 地域枠入学生特別プログラム「夏期地域医療実習(自治医科大学・佐賀大学・長崎大学合同夏期実習)」

・医学部医学科 地域枠入学生および一般枠入学生 (27名)

連携団体:

佐賀県医務課、唐津市小川島診療所・加唐島診療所・馬渡島診療所、唐津赤十字病院、佐賀県医療センター好生館、佐賀市立富士大和温泉病院、佐賀市立国民健康保険三瀬診療所、佐賀市三瀬保健センター、七山診療所、サガハイマツト(鳥栖)

活動内容:

実習には、自治医科大学学生8名、長崎大学医学部生2名を合わせた計27名が参加した。学生は4班に分かれて、唐津市の離島と佐賀市の山間部におけるへき地医療の現場を2泊3日の行程で見学した。学生は自分たちで協議して作成した医療に関するテーマについて、住民にむけてヘルスプロモーション(健康講話)を行った。また、県内のがん診療の取り組みについて、サガハイマツト(鳥栖)、佐賀県医療センター好生館と唐津赤十字病院で実習を行った。

成果(学生教育の観点から):

将来、佐賀県内の離島や山間部で医療を行うた



離島の診療実習



学生による健康講話



地域医療セミナー講義風景

めに必要な医療者としてのスキルと地域における課題、ニーズを知ることができた。

学生自ら地域住民にヘルスプロモーションを行うことで、医療情報を伝えることの難しさややりがいについて体験することができた。

県内のがん診療の現状について、地域の医療機関をはじめ、化学療法・緩和ケア・担がん患者看護・地域がん診療連携領域など、各地域や部門の第一線で活躍するスタッフからの講義や実習指導を企画に盛り込んだ。医療者や行政関係者の姿勢や環境整備、佐賀県が考えるべき地域課題について具体的に学習できた。

佐賀市:

■地域医療セミナー

地域枠入学生特別プログラム「地域医療セミナー」

以下、各実施日およびテーマ

- ① 4/28 卒業後の医師としてのキャリア
- ② 5/26 社会保障・福祉の機能
- ③ 6/23 差別解消法の理解
- ④ 7/10 医療制度とチーム医療における医療ソーシャルワーカーの役割
- ⑤ 10/12 障害者・高齢者の生活をみんなで理解しよう
- ⑥ 12/4 高齢者地域医療支援チームと医師・看護師

・医学部医学科（地域枠入学生および一般枠入学生）、医学部看護科学生、医学部職員、医学部附属病院研修医（合計70名）

- ① 15名（学生13名、研修医2名）

- ② 11名（学生11名）

- ③ 12名（学生12名）

- ④ 9名（学生7名、職員2名）

- ⑤ 15名（学生13名、職員2名）

- ⑥ 8名（学生6名、職員2名）

連携団体:

佐賀大学医学部附属病院、医療法人かぶとやま会 久留米リハビリテーション病院、一般社団法人 ぐらむ佐賀（佐賀県高次脳機能障害者相談支援センターぐらむ）、社会福祉法人 長興会 長光園障害者支援センター

活動内容:

「卒業後の医師のキャリア」では佐賀大学医学部の卒業生で、現在佐賀県の医療機関に就職し、活躍している医師から、学生へ佐賀で診療に従事する魅力ややりがい、具体的なキャリアプランについて講演を行った。講演後には懇親会を行い、講師と学生が交流することで、学生が先輩医師とのつながりを作り、将来のキャリア形成に役立つよう工夫した。

また、近年、医学部の正規カリキュラムでは福祉領域を学ぶ機会が減りつつあるため、5/26、6/23、7/10、10/12、12/4の5回シリーズとして福祉セミナーを実施した。学内外の福祉領域に関するエキスパートの講演を通して、高齢者や障害者をとりまく福祉や介護の現状と今後の課題について、学び考える機会を作った。講演のなかでは適宜、参加者とのディスカッションも行った。

成果（学生教育の観点から）:

各セミナーは医学科学生・研修医を含め、看護

科学生や多職種スタッフの参加があったため、立場の違う同士でのディスカッションが活発に行われた。将来の佐賀県内での研修や就業について、具体的にイメージができるようになった。福祉セミナーを通して、参加者は福祉のあり方について、深く学び考える機会を得た。

■ III. 授業科目・担当者一覧

■ 関連する基本教養科目

- ・「生命科学の基礎C」(医学看護学研究の勧め)
(杉岡 隆、坂西雄太)

■ 関連する主な学部専門科目

医学部

- ・Phase III「Unit 1(地域医療)」(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
- ・Phase IV・V「地域医療実習」(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
- ・Phase V「地域枠入学生特別プログラム」(杉岡隆、坂西雄太、久田祥雄)
 - ▷佐賀県内基幹病院・中核病院実習(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
 - ▷夏期地域医療実習(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
 - ▷地域医療セミナー(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
- ・Phase V「臨床系選択科目」
 - ▷在宅医療・在宅ケア実習(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
 - ▷地域包括ケア実習(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)
 - ▷地域家庭医療実習(杉岡 隆、坂西雄太、久田祥雄)

■ IV. 関連する主な教育・研究・社会貢献業績

<教員>

(論文等)

- ・Yoshio Hisata, Eisuke Sasaki, Koutaro, Ishimaru

Yousuke, Harada, Hirohumi Nakano, Shinji Naitou, Takashi Sugioka, Do you know otitis media with ANCA-Associated Vasculitis (OMAAV)? Journal of General and Family Medicine. 2017; 00: 1-4.

- ・Hongo Y, Ashida K, Ohe K, Enjoji M, Yamaguchi M, Kurata T, Emoto A, Yamanouchi H, Takagi S, Mori H, Kawata N, Hisata Y, Sakanishi Y, Izumi K, Sugioka T, Anzai K. Change of Oral to Topical Corticosteroid Therapy Exacerbated Glucose Tolerance in Patient with Plaque Psoriasis. American Journal of Case Reports.2017: 18: 1198-1203.
- ・坂西雄太. 意図しない体重減少(翻訳). ハリソン内科学第5版: 56章; 280-282. 2017年3月発行(講演等)
- ・坂西雄太, 久田祥雄, 杉岡隆. 地域医療支援学講座の取り組み. 第7回九州地域医療教育研究会. 2017.4.8. 久留米大学病院本館.
- ・久田祥雄, 堂込明子, 多胡雅毅, 坂西雄太, 佐野雅之, 杉岡隆. アシドーシスを伴わない癒着バンド形成による絞扼性小腸イレウスの一例. 第8回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 2017.5.13-14. サンポートホール高松・高松シンボルタワー・JRホテルクレメント高松.
- ・杉岡隆, 久田祥雄, 一瀬直日, 吉野俊平, 大野每子. 臨床研究にトライ!Part2 身体診察による診断法を評価する 急性虫垂炎/初学者向け.日本プライマリ・ケア連合学会第29回学生・研修医のための家庭医療学夏期セミナー. 2017.8.5-7. 長浜ロイヤルホテル.
- ・久田祥雄, 原田陽介, 中野浩文, 佐々木英祐, 小川徹, 内藤慎二, 杉岡 隆. 救命困難であった抗MDA-5抗体陽性無筋症性皮膚筋炎 (clinically amyopathic dermatomyositis) の1例. 日本内科学会第319回九州地方会. 2017.10.29. 福岡大学8号館.
- ・杉岡隆, 片岡裕貴, 高田俊彦, 高橋世, 西脇宏樹,

添野祥子, 加藤大佑, 草野越夫, 山本舜悟. 臨床研究デザイン道場: 診断の予測指標の作り方を学ぶリターンズ. 第15回日本プライマリ・ケア連合学会秋季生涯教育セミナー 2017.11.11-12. 大阪科学技術センター.

<学生>

- ・牛島宏貴, 小金丸三璃, 木須絵里, 松尾岬, 江頭桃子, 林田寛之, 山本優香. 食中毒の医学. 2017年度夏期地域医療実習(自治医科大学・佐賀大学・長崎大学合同夏期実習) 加唐島診療所学生健康講話. 2017.8.16-18. 加唐島公民館.
- ・渋谷祥太, 小柳貴史, 新藤優里, 大石将平, 古賀千晶, 池田奈瑚, 津本真帆. 熱中症について学ぼう. 2017年度夏期地域医療実習(自治医科大学・佐賀大学・長崎大学合同夏期実習) 馬渡島診療所学生健康講話. 2017.8.16-18. 馬渡島公民館.
- ・中村美結・鷹屋桃子・平川雄大・岩永夏妃・宮崎瑤子・中尾聡志. 「関節痛について」. 2017年度夏期地域医療実習(自治医科大学・佐賀大学・長崎大学合同夏期実習) 小川島学生健康講話. 2017.8.16-18. 小川島公民館.
- ・才田正義, 荒巻芽生, 古川慧月, 小林祐大, 羽生田菜月, はやねはやおき, てあらいうがい. 2017年度夏期地域医療実習(自治医科大学・佐賀大学・長崎大学合同夏期実習) 三瀬保育園学生健康講話. 2017.8.16-18. 三瀬保育園.



環アジア国際セミナーオリエンテーション

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:

工学系研究科(都市工学専攻)

■連携部局:全学教育機構インターフェース

「地域・佐賀学コース」、農学部生物環境科学科地域社会開発学コース、医学部地域医療支援学講座、文化教育学部人間環境課程、全学教育機構・デジタル表現技術者養成プログラム、佐賀大学まちづくりサテライトゆつつら〜と館



実施代表者

三島 伸雄

(工学系研究科・教授)

■取り組む地域課題:

- ・中心市街地の活性化
- ・まちなか再生
- ・歴史的環境の再生と保全

■連携プロジェクト:A、J、L

■連携自治体等:

佐賀市、嬉野市、鹿島市、NPO法人まちづくり機構ユマニテさが、NPO法人肥前浜宿水とまちなみの会、株式会社嬉野創生機構、学生サークル:コミュニティデザインクラブ 等

■教育カリキュラム:

■理工学部都市工学科・都市工学専攻専門教育:

- ・図学
- ・基礎設計製図演習
- ・建築・都市デザイン演習 I
- ・建築・都市デザイン演習 II
- ・都市工学ユニット演習(建築・都市デザイン)
- ・デザイン手法分析
- ・建築都市デザイン特別講義
- ・コース共通特別講義
- ・建築環境設計特別演習

■建築・都市デザイン・プログラムにおけるPBL/SL型フィールドワーク、Community based learning

■インターフェース科目

- ・「地域・佐賀学コース」:地域創成学プログラム

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ(自治体別):

佐賀市:

- ・まちなか居住のための地域空間の読解、空き家利活用に向けた調査・企画・提案・実施
- ・イベント空間の電飾デザイン、まちなか電飾に対する公共空間の制限の理解、企画、提案、実施

鹿島市:

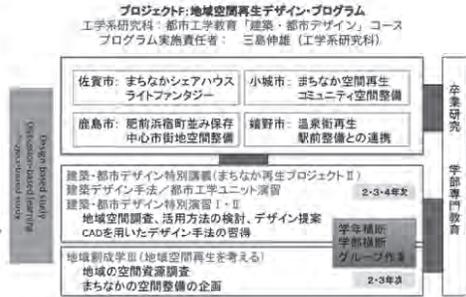
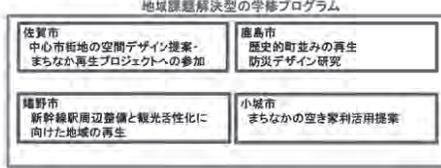
- ・空き家の調査と利活用
- ・歴史的空間の調査、伝統的建造物などの空間利活用の企画・立案、デザイン提案
- ・駅空間の利活用提案

嬉野市:

- ・伝統的建造物の調査
- ・河川空間の調査と利活用提案
- ・茶畑や街中空間の調査と利活用提案

プログラムの目的

「まちなか再生」「地域生豊かな空間創出」に向けて、地域空間再生デザインに資することができる人材を輩出することを目的とします。都市工学科・都市工学専攻の建築・都市デザイン関連科目を軸に、全学教育機構の「地域・佐賀学コース」「異文化理解コース」とも連携しながら、地域空間再生を目指します。



活動報告

平成25年度

試行的取り組みの準備と開始

- ・ライトファンタジーへの初めての参加
- ・コミュニティデザインカフェでのデザイン発表
- ・学生シェアハウス「佐賀よかとこの家」の完成
- ・演習室の整備

平成26年度

地域志向型教育・研究・社会貢献の開始

- インターフェース科目「地域創成学Ⅲ」
- ・小城市の空き家活用提案
- 専門科目「建築・都市デザイン特別講義」
- ・環アジア国際セミナー、まちなか再生プロジェクト等卒業研究「歴史的町並みの空き家活用の組織体制」

平成27年度

地域志向型教育・研究の実践

- 専門科目「図学」: 佐賀の街なか再生を知る(スケッチ)
- 専門科目「建築・都市デザイン演習Ⅱ」
- ・地域課題に即した設計提案(門前に集まって住む)
- 卒業研究「ICT防災デザイン研究」
- 卒業研究「歴史的町並みの空き家活用の組織体制」

平成28年度

地域志向型教育・研究の実践

- インターフェース科目「地域創成学Ⅲ」
- ・小城市の空き家再生に対する学生参加
- 卒業研究「地域のLED電飾への異分野学生参加の効果」
- 卒業研究「茶畑の景観資源としての評価と利活用提案」

平成29年度

地域志向型教育・研究の実践

- インターフェース科目「地域創成学Ⅲ」
- ・嬉野市に対する都市再生提案
- 卒業研究「歴史的町並みの住民防災マップ支援システム」
- 卒業研究「茶畑の景観資源としての評価と利活用提案」

平成30年度

地域志向型教育・研究の発展

地域文化に対する工学的視点からの共同研究の推進

- ・自然景観・歴史的景観を生かすまちづくり
- ・地域の素材を生かす空間デザイン提案
- ・空き家の利活用提案
- ・ICT活用型防災デザイン研究

成果

地域再生に向けた空間提案ができるデザイナー育成

図学、設計演習、卒業研究などでは、佐賀・小城・鹿島・嬉野などでの地域課題に直接接し実感する機会を多く得ました。その中で、様々な空間的提案を行い、住民や専門家からも意見をもらうことができました。国際セミナーも実施し、外国人と宿泊しながら歴史的環境の保存と利活用に向けた提案作業も行いました。



西九州大学との共同授業による双方向交流

サガ・ライトファンタジーへの参加では、試行錯誤をしながら、共同授業に取り組みました。毎年、佐賀の街中の実態を知るために、佐賀市役所から街なか再生プロジェクトの講義や、LEDを用いた街なか電飾に対するルールなどを一緒に学びました。また、平成28年度は、西九州大学で竹狩りを行い、それを生かして電飾作りに取り組みました。これを通して、全く異分野の学生同士ではありますが、共通課題に対する理解や技術の修得などを行い、交流を深めることができました。



様々な地域における空間デザイン提案とその実施

連携自治体の様々な組織と協力しながら地域課題に即した空間デザイン作業を地域志向型研究として実施することができました。肥前浜駅の土産屋の設計、嬉野温泉駅の周辺整備計画、小城市のまちなか施設などは、具体的に学生も一緒になって提案作業に取り組んだものであり、学生提案が生かされて実現した建物や、具体的に実現に向けて動きつつあるものもあります。防災デザイン研究も進みつつあります。



今後の展開

- インターフェース科目「地域創生Ⅲ」における県内市町のまちづくりへの学生参画
- 建築・都市デザインにおける地域素材を活かした空間デザイン提案
- ICT防災デザイン研究など、工学系の多様な研究開発能力を活かした共同研究の推進

■ II.平成29年度の活動

佐賀市:

■サガ・ライトファンタジー

- ① 7/10 オリエンテーション
- ② 7/12 まちなか再生に関わる佐賀市役所の講義
- ③ 7/26 LED電飾デザインの検討
- ④10/ 4 LEDスポット電飾制作
- ⑤10/11 LED電飾の現地制作
- ⑥10/29 LED電飾の現地仕上げ
- ⑦10/31 サガ・ライトファンタジーオープニングセレモニー参加
- ⑧ 1/10 LED電飾の撤去作業

理工学部都市工学科

- ・コース共通特別講義(まちなか再生プロジェクト I) (48名)
- ・コース共通特別講義(まちなか再生プロジェクト II) (30名)
- ・コース共通特別演習(まちなか再生プロジェクト II) (3名)

連携団体:佐賀市商工観光課

活動内容:

- ①佐賀大学まちづくりサテライトゆつつら〜と館において、まちなか再生に関わる佐賀市のプロジェクト「四核構想」について講義を受けた。
- ②LED電飾のデザインイメージについて検討を行った。
- ③LED電飾について、実現性の観点などからチェックした。
- ④656広場において、西九州大学と合わせて竹にLEDを巻きつけて電飾スポットを作成した。



LED電飾デザインの議論



街角広場におけるスポット照明設置

- ⑤スポット照明並びに植栽のLED電飾を現地で行った。
- ⑥スポット電飾並びに植栽電飾の仕上げ作業を行った。
- ⑦サガ・ライトファンタジーのオープニングセレモニーに西九州大学と参加し、パレードを行った。
- ⑧LED電飾の撤去作業を行った。

成果(学生教育の観点から):

LED電飾をまちなかに取り付ける時の注意事項(建築限界への配慮、固定)について学び、竹で作った電飾の可能性を明らかにすることができた。

なお、修士2年増森遥香さんが国際会議ICCUE2017(プラハ)で発表し、International Journal of Engineering and Technologyに掲載され、また、建築学会九州支部研究発表会(鹿児島、平成30年3月)で発表した。

■佐賀よかこの家「まちの間3号」

- ①10/16 まちなか視察とスケッチ
 - ②1/15~2/15 まちの間3号のパス作成
- 理工学部都市工学科
- ・図学(98名)

連携学生サークル:

佐賀よかこの家「まちの間3号」の学生住民

連携団体:

NPO法人まちづくり機構ユマニテさが、佐賀市

活動内容:

- ①佐賀市中心市街地呉服元町に位置する学生シェアハウス佐賀よかこの家「まちの間3号」のス



まちの間3号とスケッチの様子

スケッチを行い、図学で最終目標とするパースと自分の空間感覚とのギャップを認識してもらった。スケッチに先立ち、佐賀中心市街地の実態を知るために、NPO法人まちづくり機構ユマニテさが職員(伊豆氏)に佐賀市における活性化の取り組みについて講義を受けた。また、まちの間3号の内外の視察を行った。

②図学の最終目標として、パースの作成を行った。

成果(学生教育の観点から)：

当初行ったスケッチと比較させて、自分の空間感覚がいかに異なっていたかを実感させることができた。また、佐賀の街中の活性化として何が行われているかを理解させることができた。

■佐賀の集合住宅デザイン「門前に集まって住む」

①8/8 都市工学科の学生による建築デザイン提案の発表

②8/9 作品展示

理工学部都市工学科

・建築都市デザイン演習I(36名)

連携学生サークル:コミュニティデザインクラブ

連携団体:

NPO法人まちづくり機構ユマニテさが、日本建築学会佐賀支所

活動内容:

①呉服元町の「ON THE ROOF」において、佐賀市松原神社の門前の新馬場通り一帯を敷地として、佐賀大学都市工学科3年生(36名)が中低層集合住宅「門前に集まって住む」かたちを「物



フライヤー「門前に集まって住む」

語」のある空間としてデザイン提案し、その成果発表を行った。

②同会場において作品を展示した。

成果(学生教育の観点から)：

佐賀のまちなかの歴史やその空間性を知る力、並びにその地歴に対して集住空間を提案して発表する力を養うことができた。



デザイン提案の発表風景

鹿島市:

■環アジア国際セミナー（建築・都市デザインワークショップ）

- ①4/5 学生への説明会
- ②6/20 学生選抜の説明
- ③7/15 オリエンテーション、交流会
- ④7/16～21 鹿島市肥前浜宿でのワークショップ
- ⑤7/22 佐賀の建築視察

理工学部都市工学科、芸術地域デザイン学部

・建築都市デザイン特別講義（環アジア国際セミナー）（12名）

佐賀大学大学院生

・Intensive Internship（6名）

・TA（6名）

短期留学生 計36名

・タマサート大学（タイ）（8名）

・チェンマイ大学（タイ）（8名）

・カザフ建築土木高等アカデミー（カザフスタン）（7名）

・タンリン工科大学（ミャンマー）（6名）

・ウィーン工科大学（オーストリア）（7名）

連携団体:

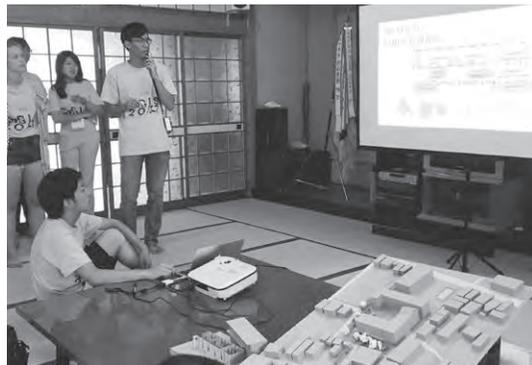
鹿島市、NPO法人肥前浜宿水とまちなみの会、浜町振興会、浜RUN舎、浜区長会、浜町婦人会、佐賀大学国際課

活動内容:

- ①タイ、カザフスタン、ミャンマー、オーストリアから到着した教員・学生を迎えて、オリエンテーション並びに交流会を実施した。
- ②鹿島市肥前浜宿において、ワークショップを実施



浜小学校児童との交流



学生の成果発表

した。初日は、現地オリエンテーションと住民主催の歓迎会があり、2日目から4日目は午前中に講義、午後に現地調査や提案物作成作業を行った。5日目に発表会及び成果発表会を行った。

③浜小学校の子どもたちとの交流会を実施した。

④嬉野市立塩田中学校、佐賀県立博物館などの建築視察を行った。

成果（学生教育の観点から）:

建築都市デザインに関わる地域空間再生デザイナーを目指す学生の国際感覚を育てることができた。地方の歴史的町並みの空間実態やまちづくりの状況を理解させることができた。外国人学生と共同で建築都市デザインの作品を作ることができた。

■歴史的町並みにおける空き家等の利活用に関する調査

9/12～15 鹿島市祐徳稲荷神社門前町の調査
理工学部都市工学科

・卒業研究（延べ12名）



地域住民との議論

連携団体:鹿島市、祐徳稲荷神社門前商店街

活動内容:

鹿島市祐徳稲荷神社門前町を対象として、空き家等の利活用と観光動態に関する調査を行った。また、鹿島市祐徳稲荷神社門前町の住民、建築士会、鹿島市担当課とともに、将来像について議論した。

成果 (学生教育の観点から):

歴史的町並みにおける歴史的商店街の有する課題、建物の実態、今後の利活用のあり方について議論し知識を得ることができた。

嬉野市:

■嬉野温泉駅周辺まちづくりに伴うまちづくりデザイン調査

①5/20~21 現地調査

②7/23 嬉野温泉街にて調査・研究結果の発表
全学教育機構インターフェース科目
・地域創成学Ⅲ (37名)

連携団体:嬉野市、株式会社嬉野創生機構

活動内容:

- ①嬉野温泉駅周辺まちづくりに伴う地域活性化のため、調査研究を行った。
- ②嬉野温泉街において調査研究成果の発表を行った。

成果 (学生教育の観点から):

嬉野における様々な地域資源を学生が知ることができた。また、地域資源の調査手法・提案方法・提案のポイントの置き方などを勉強することができた。



嬉野調査



嬉野における研究成果の発表

■嬉野のまちづくりデザイン調査

①9/30~11/30 調査

②2/24 嬉野まちづくり研究発表+シンポジウム
佐賀大学工学部4年
・卒業研究他 (2名)
芸術地域デザイン学部2年 (4名)

連携団体:嬉野市、株式会社嬉野創生機構

活動内容:

- ①嬉野の資源である茶畑の利活用に向けた調査と提案作成、ならびに今後進むと考えられる嬉野川周辺の土地利用に関する歴史的調査を行った。
- ②調査研究成果を取りまとめて、嬉野温泉街で発表を行った。

成果 (学生教育の観点から):

嬉野における様々な地域資源について詳細な調査を行うことができ、その利活用提案をするための知識と技術を学習することができた。また、その成果を発表することにより、自分の取り組みに対する課題を知ることができた。



嬉野における調査

■ III. 授業科目・担当者一覧

■ 関連する主な学部専門科目

理工学部

- ・図学(三島・洲上)
- ・基礎設計製図演習(後藤・洲上)
- ・建築・都市デザイン演習I(後藤・宮原・洲上・高木)
- ・建築・都市デザイン演習II(平瀬・洲上)
- ・都市工学ユニット演習(建築・都市デザイン)(三島・中大窪)
- ・デザイン手法分析(平瀬), 建築都市デザイン特別講義(三島・平瀬)
- ・コース共通特別講義(三島)
- ・建築環境設計特別演習(小島・中大窪)

■ IV. 関連する主な教育・研究・社会貢献業績

<教員>

- (論文等)
- ・西村幸夫・野澤康編、三島伸雄他17名著: まちを読み解く、朝倉書店、2017
 - ・Makoto Taniguchi, Nobuo Mishima, and Takayuki Fuchigami: Distribution of American houses around the USA air force soon after the second world war in Fukuoka, Japan. International Journal of Engineering and Technology (IJET), Vol.10, No.2, 121-126, April 2018
 - ・Yumi Sumida, Nobuo Mishima: A Study on System for Reuse of Vacant Houses of a Historic Town by an Intermediate Organization viewing from Habitants' perception. International Journal of Engineering and Technology, Vol.10, No.2, 132-139, April 2018
 - ・Hiroshi Wakuya, Ryoki Nishimura, Hideaki Itoh, Nobuo Mishima, Sang-Hoon Oh and Yong-Sun Oh: N APPLICATION OF GENETIC ALGORITHM TO EVACUATION ROUTE PLANNING FOR ICT-BASED DISASTER PREVENTION DESIGN AIMING AT REAL-WORLD

IMPLEMENTATION. ICIC Express Letters, Part B: Applications, Vol. 8(12), Dec. 2017, ISSN 2185-2766

- ・Haruka Masamori, Nobuo Mishima, Tomoyuki Koga: Development of LED Illumination Work at a Town Center in Collaboration of Students from Different Fields. International Journal of Engineering and Technology, Vol. 9(6), 461-467, 2017. ISSN 1793-8236
- ・ukuo Hayashida, Keiko Kidou, Nobuo Mishima, Keiko Kitagawa, Yong-sun Oh, Jaesoo Yoo: Development of Evacuee Support Using Heart Rate Variability. International Journal of Contents, Vol.13, No2, pp1-5, Jun. 2017.
- ・廣橋碧、三島伸雄: 地目・等級からみた開墾会社永沢社の入植地整備の特質 - 「明治三十二年 土地臺帳 印旛郡八街村八街」を資料として-、都市計画論文集 Vol.52, No.1, pp.1-9, 2017, ISSN1348-284X.
- ・Kazuaki Nakaohkubo: Shape optimization of louver by numerical analysis of solar radiation, PLEA2017, proceedings, volume pp.2108-2115, Scotland, 2017.
- ・中大窪千晶、浅輪貴史、深澤朋美: 「アンケートの収集・可視化を目指したアプリ「アンケートマップ」その1 携帯端末とWebGISを用いたシステムの開発」, 日本ヒートアイランド学会第12回全国大会, p190, 東京, 2017.7

<学生>

理工学部

- ・衛藤 幸己: 「佐賀市の降雨特性の変化に関する研究」、平成29年度佐賀大学理工学部都市工学科(卒業)論文
- ・嘉村 圭祐有: 「有明海内地震津波の沿岸低平地への影響に関する研究」、同 論文
- ・辻 信吾: 「佐賀市南部・西部のクリークにおけるリン蓄積速度に関する研究」、同 論文
- ・福吉 晴生・西村 知夏: 「佐賀市下水浄化セン

- ター放流水による受水域の流況、水質変化」、同論文
- ・河口 美芳・林 明日香:「佐賀平野のクリークの水環境変遷に関する基礎的研究」、同論文
 - ・河原 幸有美:「絶景茶房ツーリズム ～茶畑から湾を望み、茶を味わう～」、同制作
 - ・江口 倅代:「糸里のまちの異世代シェアハウジング」、同制作
 - ・増田 雄大:「有明粘土と蓮池粘土の地盤工学的性質に関する統計学的検討」、同論文
 - ・永野 智己:「嘉瀬川ダム水質管理のための鉛直一次元モデル」、同論文
 - ・諸石 直人:「有限容積モデルを用いた有明海の内部生産特性に関する解析」、同論文
 - ・阿萬 涼音:「地方小市街地における空き家・空き店舗の多様性について—小城市牛津中心部を対象として—」、同論文
 - ・江口 賢祐:「住宅地形成からみた地方小市街地郊外の実態—小城市牛津町を対象として—」、同論文
 - ・北島 遥:「製磁町有田における建物の空間的特質—昭和初期から現代の住まい方調査をもとに—」、同論文
 - ・品川 悠平:「嬉野市塩田町における草葺き民家の現況と存続可能性」、同論文
 - ・古川 湧:「有明海沿岸干拓地の散居集落「社擲」の空間システム」、同論文
 - ・中野 みなみ:「高齢者の移手段に対する意向調査から見た徒歩及び自転車利用促進に関する研究 ～佐賀市の市街地をケーススタディとして～」、同論文
 - ・後水流 皓貴:「土地・建物の変遷からみた祐徳稲荷神社門前町の空間構成について」、同論文
 - ・松本 啓志:「伝承芸能「浮立・獅子舞」からみる佐賀県鹿島市の歴史的風致」、同論文
 - ・花元 康平:「土地所有の変化からみた嬉野温泉街河川沿い空間実態」、同論文
 - ・峰 雄大:「歴史的低平地都市における避難所キャパシティを考慮した高台避難の検証」、同

論文

- ・松本 美里:「夏季における佐賀城濠の水温上昇に関する実証研究」、同論文
 - ・馬場 隆成:「嘉瀬川におけるダムによる今後の治水適応策の検討」、同論文
 - ・斎藤 晋:「嘉瀬川ダム貯水池の3次元流動・水質シミュレーションによる副ダムの効果に関する検討」、同論文
 - ・佐藤 修:「GISを用いた平成29年7月九州北部豪雨における土砂・流木発生量に対する影響因子の検討」、同論文
 - ・辻 響:「分布型流出モデルを用いた九州北部豪雨における筑後川中流右岸域の氾濫シミュレーション」、同論文
 - ・竹下 あかり:「陶磁器破砕片と廃石膏による藻礁の作製とモニタリング」、同論文
 - ・田村 嘉彬:「陶磁器作製時に発生する廃素焼き片のろ過材としての機能について」、同論文
- 工学系研究科
- ・岩男 眞太郎:「当初設計図の三樓門からみる武雄温泉の幾何学的配置」、佐賀大学大学院工学系研究科都市工学専攻(修士)論文
 - ・住田 裕美:「まちの軒合い—歴史的町並みの人の活動を誘発する装置としての提案—」、同制作
 - ・遠山 貴史:「第一種低層住居専用地域における世帯の多様性と都市形態要素によるタイプ分類—佐賀県下を対象として—」、同論文
 - ・朴宰燁:「移住者に着目した中山間地域の空き家活用と地域活性化に関する研究」、同論文
 - ・増森 遥香:「電飾評定からみた市民参加型屋外スポットイルミネーションの評価」、同論文
 - ・安武 佑馬:「協働型設計施工による建物内空きスペースの利活用に関する研究—シェアハウス・アトリエ「コネル」を対象として—」、同論文

アグリ資源の多様性を活用したアグリ医療 及び機能性食品の開発プロジェクト



茶に関する学会・研究会の開催

■ I.プログラムの概要

■事業実施主体:

アグリ創生教育研究センター、医学部

■連携部局:文化教育学部教育実践総合センター、農学部応用生物科学科生物資源開発学コース

■取り組む地域課題:

- ・アグリ医療やセラピー教育の開拓と普及
- ・機能性食品の開発とそれに関わる人材の育成

■連携プロジェクト:H、K

■連携自治体等:

佐賀市、佐賀市手をつなぐ育成会 笑育舎、佐賀大学茶の文化と科学研究所、佐賀・茶学会、一般社団法人CLUB RIO、佐賀・福岡地域機能性農産物推進協議会、武雄市健康課、副島整形外科病院（武雄市）

■教育カリキュラム:

- ・遺伝資源フィールド科学実習
- ・インターフェース
- 「医療福祉と社会コース」-「障がい者就労支援」プログラム
- ・全学教育機構 基本教育科目
- 高齢者・障がい者の生活・就労支援概論

■主なPBL・SL型教育の地域とテーマ(自治体別):

佐賀市:

- ・アグリ資源の新しい活用を図るための人材育成教育プログラム作成
- ・圃場のユビキタス化による、障がい者、家畜、支援者等の行動の遠隔追跡、モニタリング等の科学的実施
- ・機能性食品開発に係る産学官連携事業の実施



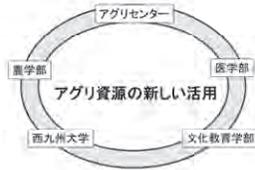
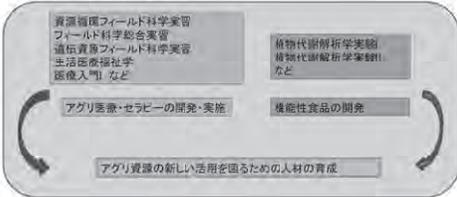
実施代表者

上埜 喜八

(農学部・准教授)

プログラムの目的

家畜と農産物を用い、アグリ医療や機能性食品の研究開発をおこなう。アグリ資源の新しい活用を図るための人材を育成する。



活動報告

平成25年度

- ヒトとの触れ合いによる家畜の身体的変化の調査
- 家畜の心拍数、血圧の測定
- 家畜の扱い方の教育

平成26年度

- 園芸セラピー活動の実施
- ヒトと家畜の友好関係構築に関する要因の解析
- 文化教育学部、医学部との連携によるアグリ医療の開発
- 食品機能性成分の分析技術の教育
- 機能性食品開発企業との共同研究推進

平成27年度

- 家畜のストレス評価法の開発
- スマイルルームフィールド遠足の実施
- フィールドにおけるヒューマンケアの開発・検証
- 機能性食品開発に係る行政・地域生産者・企業との連携

平成28年度

- アグリ医療の開発
- 機能性食品に関する研究発表
- 機能性食品の開発とそれに関わる人材の育成
- 茶に関する研究発表会の開催

平成29年度

- 作業療法学専攻学生の現場視察と研修の実施
- 発達障害児支援プログラム開発
- 機能性食品開発に向けたPR活動
- キクイモの調理法や成分の分析・試食販売・開発メニュー
- の提供

平成30年度

- キクイモのPR活動
- 企業と連携し全国販売できる商品を開発

成果

発達障がい児支援プログラムの開発

特別支援学校の生徒を対象に、動物（家畜）とのふれあい体験や野菜の収穫体験を実施し、発達障がい児支援のための新たな学習題材の選定や支援プログラム開発を行っています。ダウン症候群患者に対する動物介入の効果検証試験を行い、様々な評価法による効果の判定を行っています。



アグリセラピー開発における教育・実習への応用



佐賀大学の障がい者就労支援コーディネーター養成プログラムの中で講義を行っています。他大学の作業療法学専攻の学生に対する現場講義と研修に活用しています。

産学官連携による機能性農産物キクイモの普及と商品開発

機能性農産物キクイモを原料としたメニューを開発し、スーパー店舗やCOC+さがを創る交流会において試食提供、ブース展示を行いました。農学部と共同でCOCセミナーを開催し、関連企業等に向けた学生による講演を実施しました。これらの取り組みにより新たな連携が生まれ、実際の商品開発が行われました。



地域農産資源である茶を活用した機能性食品開発と人材育成

佐賀大学茶の文化と科学研究所及び佐賀・茶学会と連携し、茶に関するシンポジウム、講演会、研究発表会を毎年2回開催しました。学生は、機能性食品開発の実際を学ぶとともに、研究に携わる企業情報を収集し、さらに、参加企業や佐賀県庁職員等との情報交換により、地元就職に関する貴重な情報を得ています。



今後の展開

- 障がい者支援プログラムの開発と実証的な検証
- 地域企業、自治体との連携を活かし、学生の意見も取り入れた商品開発・普及を進める
- 茶に関する文化と科学の啓発活動の継続
- 新しい機能性食品である微生物発酵茶の開発

■ II.平成29年度の活動

佐賀市:

■高齢者・障がい者の生活就労支援に関する学際的講義の実施

4月から7月までの各週計15回の講義

全学教育機構 基本教育科目

- ・高齢者・障がい者の生活・就労支援概論(同期型遠隔授業)

(本庄キャンパス155名、鍋島キャンパス35名)

活動内容:

基本教養科目である「高齢者・障がい者の生活・就労支援概論」のなかで、生活の基盤となる「生活支援」と収入や社会的参加のベースとなる「就労支援」について医療・工学などの分野を中心に各領域からの講義を行った。

成果(学生教育の観点から):

全学部対象の広義の生活就労支援に関する基礎的教育を行う講義において、今日のアグリ医療開発のなかで、高齢者や障がい者の支援に農業の現場を活用する新たな取り組みがあることについて理解を深めることができた。これにより、将来、高齢者や障がい者の就労を支援するために必要な知識を身に付けることができた。

■機能性食品に関する研究発表

6/3、10/28 茶に関する学会・研究会の開催

農学部 応用生物科学科

- ・植物代謝解析学実験I(5名)
- ・植物代謝解析学実験II(5名)

インターフェース科目

- ・食料と生活IV(40名)

連携団体:

佐賀大学茶の文化と科学研究所、佐賀・茶学会

活動内容:

佐賀県茶業試験場の研究者、茶企業の経営者、茶業関係者や一般人が参加する茶に関する研究発表会を6月と10月に佐賀大学農学部で開催した。



茶に関する研究発表会(学生の発表、質疑応答)

成果(学生教育の観点から):

農学部植物代謝解析学研究室と全学教育機構インターフェース科目「食料と生活IV」の受講生が、学会ならびに研究発表会に参加した。研究会では農学部の4年生(松田美紀)が口頭発表を行なった。学生は、一般の参加者、また佐賀県内試験場関係者や農業関係者と交流することで、食と健康への興味を深めるとともに、県内食品関連企業の現状と動向に関する最新情報を得ることができた。また、参加企業や佐賀県庁職員等との情報交換により、地元就職に関する貴重な情報を得ることができた。

■高次脳機能障害に関する講演会開催

6/22、6/29 アグリ医療に関する講義

- ・佐賀大学の学生及び、地域住民(約60名)

講演会ポスター

活動内容:

高次脳機能障害の支援を実践する専門家の講演を、同障害の患者の会である「ぷらむ佐賀」の活動を支援し、医学部において講演会を開催した。市民公開講座として約60名の参加者を得た。

成果 (学生教育の観点から) :

医学部と農学部が連携して行っているアグリ医療開発のなかで、高齢者や障がい者の支援に農業の現場を活用する新たな取り組みがあることについて、理解を深めることができた。これにより、将来、高齢者や障がい者の就労を支援するために必要な知識を身に付けることができた。

■アグリ医療開発の実践①

8/31、9/19、9/25、10/3、11/14、11/20、11/27、12/4、12/11、12/18、12/25、1/9、1/15、1/23、1/24

農場資源を活用したケアプログラムの検討
農学部生物環境科学科資源循環生産学コース

- ・卒業論文 (1名)
- ・資源循環フィールド科学演習 I・II (3名)

連携団体:佐賀市手をつなぐ育成会 笑育舎

活動内容:

ダウン症候群の患者に対する、家畜(ヤギ)を利用した動物介在介入及びフラワーアレンジメントによる園芸療法を体験し、様々な評価法による効果の判定を行った。

成果 (学生教育の観点から) :

アグリ医療に関する取り組みについて、実際の療法と検証実験を体験することができた。



ダウン症候群患者における検証実験(ヤギの餌やり体験)

■アグリ医療開発の実践②

10/24、10/26、11/2、11/22、12/13、12/14、12/20、12/21、1/17、1/24、2/8

セラピー活動に参加する動物のケアに関する検討
農学部生物環境科学科資源循環生産学コース

- ・卒業論文 (1名)
- ・資源循環フィールド科学演習 I・II (3名)

連携団体:

一般社団法人 CLUB RIO (佐賀県杵島郡江北町)

活動内容:

乗馬セラピーや触れ合い活動で活躍する馬を対象として、活動中の自律神経機能の変化を調査し、動物が受ける影響の判定を行った。

成果 (学生教育の観点から) :

アグリ医療に関する取り組みの中で、対象となる人だけでなく、その中で活躍する動物側の配慮の必要性について、深く学ぶことができた。



乗馬時における馬の心拍数測定

■農作物の収穫体験を基にした情操教育プログラム

10月~11月(全7回) アグリ創生教育研究センターにおけるイモ掘り体験

農学部生物環境科学科

- ・資源循環フィールド科学実習 (14名)

活動内容:

農学部附属アグリ創生教育研究センターにおいて、イモ掘り体験を行い、園児や父兄、引率者など延べ682名が参加した。

成果 (学生教育の観点から) :

農作物の収穫体験を通じて、学生と地域住民との交流が深まるとともに、農業のアグリ医療へと発展した取り組みを学ぶことができた。

■一般市民向け公開講座の実施

10/29 公開講座「安心・安全なサツマイモを収穫してみよう!」

農学部生物環境科学科

・資源循環フィールド科学実習(13名)

連携団体:

佐賀・福岡地域機能性農産物推進協議会

活動内容:

一般向け公開講座の一環として、アグリ創生教育研究センターの圃場において、サツマイモの収穫及びキクイモの紹介を行い、栽培・収穫技術から調理法・機能性などに関する内容を学習した。

成果(学生教育の観点から):

サツマイモやキクイモの収穫体験だけでなく、機能性・栄養面まで紹介することによって、食と健康の関わりについて深く学ぶことができた。また、学生と公開講座受講生との交流は、食育の観点からも良い体験となった。

■機能性農産物生産に係る行政・地域生産者・企業との連携

11/1 キクイモ展示圃検討会

農学部 生物環境科学科資源循環生産学コース

・資源循環フィールド科学演習II(4名)

連携団体:

佐賀・福岡地域機能性農産物推進協議会

活動内容:

機能性食品原料としてキクイモの安定生産を進めるため、アグリ創生教育研究センターの圃場において地域生産者や自治体に対して、学生らによる栽培技術や病害対策などの研究成果およびその実証例について説明を行った。



収穫体験の様子



圃場での説明

成果(学生教育の観点から):

生産者や自治体と直接関わることで、それぞれの現場における課題について知ることができ、また、研究成果を現場に反映するといった社会勉強にもなった。

■機能性農産物生産に係る行政・地域生産者・企業との連携

11/1 キクイモ商品開発検討会

農学部 生物環境科学科資源循環生産学コース

・資源循環フィールド科学演習II(4名)

連携団体:

佐賀・福岡地域機能性農産物推進協議会

活動内容:

キクイモを活用した機能性食品の生産拡大を進めるため、アグリ創生教育研究センターにおいて佐賀市内食品会社等との打合せを学生も交えて行った。学生による機能性成分や原料の安定供給に関する説明も行い、大学における成果が企業に取り入れられる見通しとなった。

成果(学生教育の観点から):

企業や生産者と直接関わることで、それぞれの立場からのニーズや認知度などについて知ることができ、商品を普及・PRするといった就職活動等に向けた社会勉強となった。

■収穫物を通じた地域との交流

11/29 アグリ創生教育研究センターにおける収穫感謝祭の実施

農学部生物環境科学科

・資源循環フィールド科学実習(14名)



企業と学生との会議

活動内容:

農学部附属アグリ創生教育研究センターにおいて、収穫感謝祭を開催し、学内外から117名が参加した。

成果 (学生教育の観点から):

収穫物を通して学生と地域との交流を図ることができた。学生は農業を活用した社会貢献イベント開催の可能性を知ることができた。

■地域における運動習慣形成による、健康増進及びフレイル対策の開発

2/8 地域における健康増進活動

- ・吉野ヶ里町社会福祉協議会及び西九州大学共同研究者 (計3名)

活動内容:

地域における運動習慣形成による、健康増進及びフレイル対策として開発した「またぎマス」運動の開発について協議した。

成果 (学生教育の観点から):

地域住民に運動習慣の形成を促進するための運動法について協議し、地域ニーズについて理解を深めた。

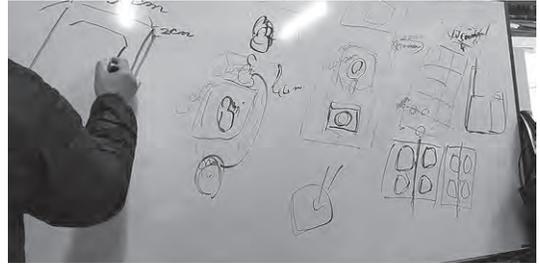
■地域における運動習慣形成による健康増進及びフレイル対策の開発

2/15 武雄市福祉部健康課と地域の健康増進プログラムに関する協議

- ・医学系研究科修士課程医科学専攻 (1名)
- ※他、関係者4名

連携団体:

武雄市健康課、副島整形外科病院 (武雄市)



またぎマス開発協議

活動内容:

武雄市健康課、副島整形外科病院 (武雄市)、及び佐賀大学医学部が連携し、地域における健康増進プログラムの実施に向けての計画立案を行った。歩行を習慣づけるために歩数計を用いた数量化を中心とした地域における運動習慣形成の事業を行うモデル地区や、対象者の人数、ファシリテータ養成、結果報告などについて具体的協議を行った。

成果 (学生教育の観点から):

学生の積極的な起案によって行政との共同作業が可能になったこと、そして地域医療への具体的な計画立案と実践の機会を得るなど、先進的であると共に地域貢献の優れた例となった。

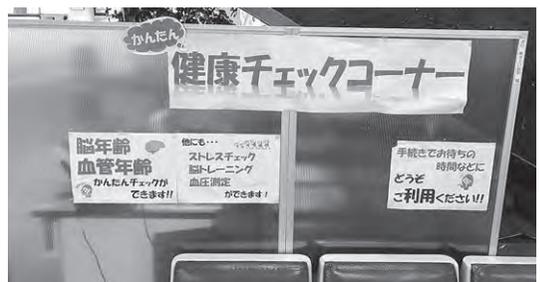
■高次脳機能障害患者会による講演と質疑応答

11/22、12/20 地域の患者会による講義の実施
インターフェース科目 (同期型遠隔授業)

- ・子どもの発達支援 (鍋島30名、本庄102名)
- ・障がい者の就労支援 (本庄50名)

活動内容:

高次脳機能障がい者相談支援センターらむ佐賀の犬丸様と患者家族会の方に講義でお話いただき、質疑応答の時間を設けた。当事者及び家族の



武雄市における健康増進活動

日常生活においての多くの支援が必要な事柄や、行政サービスのあり方、社会の対応や認識に関わる問題について理解することができた。

成果（学生教育の観点から）：

高次脳機能障害の家族の方のお話を聞くことで理解を深めることができ、また、一方的に聴講する講義ではなく、質疑応答の時間を設け、学生との活発な意見交換ができた。

■ III. 授業科目・担当者一覧

■ 関連する主なインターフェース科目

「医療福祉と社会コース」-「障がい者就労支援」プログラム

- ・障がい者就労支援Ⅰ：堀川 悦夫(医学部)、園田 貴章(非常勤講師)、松山 郁夫(学校教育学研究科)、中島 範子(教育学部)
- ・障がい者就労支援Ⅳ：堀川 悦夫(医学部)

■ 関連する主な基本教養科目

全学教育機構

- ・高齢者・障がい者の生活・就労支援概論：堀川 悦夫(医学部)、井手 将文(非常勤講師)、福嶋 利浩(非常勤講師)

■ 関連する主な学部専門科目

農学部

- ・資源循環生産学概説（江原史雄・上埜喜八・福田伸二・松本雄一他）
- ・科学英語（江原史雄・上埜喜八・福田伸二・松本雄一他）
- ・資源循環フィールド科学演習Ⅰ（江原史雄・上埜喜八・福田伸二・松本雄一）
- ・資源循環フィールド科学演習Ⅱ（江原史雄・上埜喜八・福田伸二・松本雄一）
- ・植物代謝解析学実験Ⅰ・Ⅱ（石丸幹二）
- ・卒業研究（石丸幹二・江原史雄・上埜喜八・福田伸二・松本雄一他）

医学部

- ・医療心理学（堀川悦夫 ほか）
- ・生活医療福祉学（堀川悦夫 ほか）

■ IV. 関連する主な教育・研究・社会貢献業績

<教員>

（論文等）

- ・Matsuda Y, Ikeda S, Mitsutake T, Nakahara M, Nagai R, Ikeda T, Horikawa E Factors influencing executive function by physical activity level among young adults: a near-infrared spectroscopy study, Journal of Physical Therapy Science, 29:470-475, 2017
- ・Saigo Baba, Toru Takashima, Miki Hirota, M Ichihiro Kawashima, Etsuo Horikawa, Relationship between pulmonary function and elevated glycated hemoglobin levels in health check-ups: A cross-sectional observational study in Japanese participants, Journal of Epidemiology, 2017, <http://dx.doi.org/10.1016/j.je.201610.008>, 2017
- ・Tsubasa Mitsutake, Maiko Sakamoto, Kozo Ueta, Etsuo Horikawa Effects of vestibular rehabilitation on gait performance in poststroke patients: a pilot randomized controlled trial International Journal of Rehabilitation Research, 40(3):240-245, 2017
- ・Tsubasa Mitsutake, Maiko Sakamoto, Kozo Ueta, Etsuo Horikawa Poor gait performance is influenced with decreased vestibulo-ocular reflex in poststroke patients NeuroReport, 28(12):745-748, 2017
- ・Nagae, Masumi, Sakamoto, Maiko, Horikawa Etsuo, Work-sharing and male employees' mental health during economic recession Occupational Medicine, DOI: 10.1093/ occmed/ kqx135, 2017
- ・堀川悦夫 1 運転可否判断と運転技能の評価法日本臨床、増刊号、実施診療のための最新認知症学, 287-293, 2017
- ・堀川悦夫 1 堀川悦夫, 疾患と運転可否判断の指標に関する検討, モダンフィジシャン, 2017、特集自動車運転を考える

- ・Eby D, Molnar L, Horikawa E3高齢運転者の現状:交通事故の特徴、免許制度、医療諮問委員会の観点から、(Older Drivers in the United States: Crash Trends, Licensing, and Medical Advisory Boards) モダンフィジシャン, 2017、特集自動車運転を考える
- ・Monlar L, Eby D, Horikawa E3米国における高齢者の運転中止と移動行動支援、(Driving Cessation and Mobility Support among Older Adults in the United States), モダンフィジシャン, 2017、特集自動車運転を考える
- ・Yuka Morita, Fumio Ebara, Yoshimitsu Morita & Etsuo Horikawa, Increased activity in the right prefrontal cortex measured using near-infrared spectroscopy during a flower arrangement task, International Journal of Psychiatry in Clinical Practice, DOI: 10.1080/1365 1501.2017.1366527
- ・Yuka Morita, Fumio Ebara, Yoshimitsu Morita & Etsuo Horikawa, Near-infrared spectroscopy can reveal increases in brain activity related to animal-assisted therapy. Journal of Physical Therapy Science, Vol.29, 1429-32, 2017 (講演等)
- ・松本雄一. 機能性食品原料キクイモの生産と普及拡大. 農業農村工学会第51回畑地かんがい研究集会
- ・松本雄一. 機能性食品原料キクイモの生産と普及拡大. 平成29年度全国大学附属農場協議会秋季全国協議会
- ・松本雄一. 菊芋の魅力に迫る!. きやま健康虎の巻秘伝伝授講演会
- ・石丸幹二:「佐賀県の茶文化を知る」、佐賀市肥前通仙亭、2017年8月6日 (社会貢献)
- ・堀川悦夫:佐賀県難病支援ネットワーク理事
- ・堀川悦夫:佐賀中部地区福祉有償運送協議会 会長
- ・堀川悦夫:佐賀県もの忘れネットワーク理事
- ・堀川悦夫:佐賀県高次脳機能障害者支援委員会 委員
- ・堀川悦夫:佐賀県介護福祉士会 顧問

- ・堀川悦夫:佐賀県交通安全推進委員会 委員
- ・堀川悦夫:(全国) 食器アクセシビリティ会議 委員

<学生>

(論文等)

- ・福本有香.キクイモ白絹病の発生に及ぼす硫黄肥料の効果.平成29年度佐賀大学農学部資源循環生産学コース卒業論文
- ・福岡千洋.アサガオ生殖隔離原因遺伝子の解析に向けた素材の作出.平成29年度佐賀大学農学部資源循環生産学コース卒業論文
- ・遠藤成美.乗馬や人との触れ合いが馬の自律神経機能に及ぼす影響.平成29年度佐賀大学農学部資源循環生産学コース卒業論文
- ・吉永雄輝.農場資源を活用したダウン症候群患者に対するケアプログラムの検討.平成29年度佐賀大学農学部資源循環生産学コース卒業論文
- ・松田美紀:「日本産微生物発酵茶の成分」、佐賀茶学会第5回研究発表会、2017年10月28日
- ・臼井彩夏:「ノビル (Allium macrostemon Bunge) の成分解析に関する研究」、平成29年度佐賀大学農学研究科植物代謝解析学分野修士論文
- ・江崎邑奈:「ノビルの新規フェノール成分」、平成29年度佐賀大学農学部植物代謝解析学分野卒業論文
- ・松田美紀:「ノビルの組織培養と成分解析」、平成29年度佐賀大学農学部植物代謝解析学分野卒業論文 (講演等)
- ・丸田沙織, 有馬進, 川口真一, 安田みどり, 長根寿陽, 松本雄一. キクイモにおける収穫時期の違いによる塊茎中イヌリンの変化. 園芸学会平成29年度秋季大会
- ・安田みどり, 斎木まどか, 児島百合子, 丸田沙織, 松本雄一. キクイモのイヌリン含量に及ぼす採取時期と加熱温度の影響. 日本食品保蔵学会第66回大会

■地域志向教育研究経費採択事業一覧

平成29年4月から「地(知)の拠点整備事業 コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト」の一環として地域志向教育研究経費公募型研究を公募し、22件の応募があった。この中から15件が選定され、6月から事業を実施した。

本経費は、地域を志向する教員の教育・研究・社会貢献活動を支援し、大学全体の地域志向型教育研究を活性化させるための経費である。

■各事業の内容と成果

1. ホートン・ステファニー・アン

／芸術地域デザイン学部(A)

「鹿島市の伝統舞踊である面浮立による身体言語を用いた多文化コミュニケーションによる地域活性化 Multicultural communication and regional revitalization using Menburyu Dance」

(目的及び計画)

本プロジェクトでは、面浮立の存在と地域における伝承と歴史に意識を向け、舞踊を用いた多文化コミュニケーションツールとして面浮立を新しい視点でみることで、地域と多文化、伝承者と舞踊家、地域の人々と大学の研究者や学生の間を面浮立でつなぎ、地域活性化の対話のきっかけをつくることを目的としている。最終的には、面浮立を地域における多文化コミュニケーションの教材とした教育方法として発展させる。

(教育・研究・社会貢献における成果)

鹿島市の面浮立を学ぶため、日本人学生、留学生(SPACE-E)、大学院生が参加し、浮立面をつくる彫刻師や面浮立の踊り手を外部講師としたワークショップを開催するなどカリキュラム開発に取り組んだ。また、面浮立を基礎とした新しいダンスフィットネス・プログラムを開発・研究した。この過程で、鹿島市長や地元の小学生から大学生、面浮立関係者等、鹿島市の伝承芸能に関わる多くの住民と連携し、イベント開催による地域振興や観光開発、地域再発見、国際交流、伝承芸能とダンスとの融合を図った。また、伝承芸能が認知症の理解促



鹿島市古枝での面浮立ワークショップ

進及び予防プログラム開発につながるの確信を得た。

(成果物)

【発表】

- ・ホートン・ステファニー・アン「Dance fitness as heritage management/revitalization: An intercultural view」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月21日
 - ・鈴木隆美「History of Saga traditional dance (Menburyu/Furuyu): A literary view」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月21日
 - ・福留健司「Supporting ageing society through dance fitness: A scientific view」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月21日
 - ・ホートン・ステファニー・アン「Menburyu mask dance」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月22日
 - ・Keong Ku「Mask dance in Korea」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月22日
 - ・Bokyong Cha & Hansol Kang「Korean mask dance at elementary school level」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月22日
- #### 【ワークショップ】
- ・ホートン・ステファニー・アン、宮田一輝「Menburyu mask dance (Part 1・Part2)」,第1回国際シンポジウム「芸術を通じた異文化間の対話:地域創り、教育、方針」,佐賀大学,2017年9月23日~24日

【記事掲載】

- ・「鹿島「面浮立」で国際交流」(佐賀新聞 平成29年12月18日)
- ・「面浮立でエアロビ創作 文化、世代超え80人交流」(佐賀新聞 平成30年1月12日)
- ・ホームページ・facebookページの開設と情報公開 (<https://stephhoughton.wixsite.com/mysite-1>, <https://stephhoughton.wixsite.com/mysite-2>, <https://www.facebook.com/StephanieAnnHoughton>)

【講義】

- ・ホートン・ステファニー・アン「Dance and fitness in an ageing society: Heritage management, art generation, intercultural communication and health」,University of East Anglia, イギリス ,2018年3月8日

【プロジェクトレポート】

- ・Houghton, S.A., Rivers, D. & Hashimoto, K. (forthcoming) Beyond Native-Speakerism: Current Explorations and Future Visions (London: Routledge)

【その他】

- ・プロジェクトDVD (プロジェクト概要・学生メッセージ)
- ・"MENBURYU 400: 1 (18)" children's book (英語/日本語, written by my 'Intercultural Communication' students)

2.中山 亜紀子/全学教育機構 (A)

佐賀地域の外国人住民(留学生)の安全への理解を醸成する

(目的及び計画)

佐賀市で増加する留学生の日本での安全・防犯・防災についての知識向上のため、インターフェース科目「異文化交流Ⅲ」において、留学生と日本人学生がともに多言語パンフレットを作成する。これにより、一般学生が佐賀における外国人住民の存在を考え、外国人と共存できるよりよき「市民」としての視点を醸成する。また、本年度は、佐賀県国際交流協会 (SPIRA) 等と連携して講義を実施する。完成した多言語パンフレットは、ウェブ上での公開及び印刷物の配布を行う。

(教育・研究・社会貢献における成果)

インターフェース科目「異文化交流Ⅲ」受講学生のインターアクションを観察し、異文化間コミュニケーションで起こる葛藤事例について収集した。来日したばかりの留学生が安全に佐賀で暮らすための多言語パンフレットを、「地震」「交通事故」「病気」「火事」「不審者」の5つのテーマで作成した。また、マイクロソフトイノベーションセンター佐賀 (MIC) 及びSPIRAの協力を得て、より見やすいパンフレットの作り方や外国人地域住民の視点で防災を考える講義の提供を受けた。完成したパンフレットは、佐賀大学内の新入留学生に配布するほか、SPIRAや佐賀市に配布し、外国人地域住民の日本での生活についての知識向上に貢献した。またウェブ上でも発信した。

(成果物)

- ・多言語パンフレット5種 (インターフェース科目「異文化交流Ⅲ」2017)

3.上野 大介/農学部・生物環境科学科 (B)

「佐賀地域特有のクリークに着目した水環境保全技術の学習」

(目的及び計画)

佐賀市内のクリークに定点を設定し、季節を通じて複数回の生物分析および化学分析の実習を行う。また本学で取り組んでいるクリーク浄化プロジェクトにも積極的に参加し、データを収集する。次年度以降は得られた分析結果を学生自身でまとめ、プレゼンテーションの一般開放を通じて情報



佐賀大学内のクリークでの生物調査



化学分析の実習

を公開していく。佐賀の特徴を学ぶことで地域に愛着をもち、地元定着率を高めることを目指す。

（教育・研究・社会貢献における成果）

佐賀の代表的な水環境であるクリークに着目し、その歴史的背景や技術的な特徴、また季節や人間活動の変化が水質や生物相にあたる影響を学び、生物分析及び化学分析を行った。調査結果は学生自身がまとめ、プレゼンテーション形式で発表するアクティブラーニングによって成果を還元した。結果として、生物種を用いた評価では「中程度の汚染」であることが示唆され、有機汚濁の指標であるCOD濃度、および栄養塩類である硝酸の濃度はおおむね環境基準を下回った。また家庭排水の指標である洗剤成分の濃度も発泡の指針値を下回っており、それら濃度は季節により大きな変動があることが明らかとなった。佐賀のクリークについて学習したことは、シビックプライドの醸成と地元での就職意欲の向上につながった。

（成果物）

- ・ホームページによる結果の公表 (<http://environbio.ag.saga-u.ac.jp/ueno>)
- ・Facebookによる活動の広報 (<https://www.facebook.com/saga.enviro.chem>)

4. 徳田 誠／農学部・応用生物科学科 (B)

「佐賀・有明地域における希少野生生物の生態に配慮した環境保全」

（目的及び計画）

天然記念物であり多良山系に生息するヤマネ、

有明海流入河川にのみ生息するアリアケスジシマドジョウ、有明海の泥干潟を代表する塩生植物シチメンソウなど県内には様々な希少生物が分布している。本課題ではこれらの希少生物を対象とする。農学部応用生物科学科および大学院応用生物科学コースに所属する学生が、これらの生物の自然保護活動に携わる佐賀自然史研究会の会員らとの対話を通じて、共同して野生生物の生態調査を実施し、自然保護と地域の産業活動との両立を可能にする環境保全のあり方を模索する。

（教育・研究・社会貢献における成果）

ヤマネの県内における生息域を明らかにし、論文として発表した。八幡岳において県内で初めて生体が確認されたムササビに関して哺乳類学会誌に論文として報告するとともに、平成29年12月の大学定例記者会見において発表した。また、アリアケスジシマドジョウの生態調査、マツナ属植物の生態調査と関連する昆虫群集の調査を実施した。学部・大学院教育では生態学実験の一環として調査を実施し、授業で研究成果を紹介した。県内におけるムササビの生体確認に関しては、各種報道で取り上げられ、県民の野生生物に対する理解が深まったものと考えられる。また、鹿島市主催の自然観察会や佐賀自然史研究会の観察会などを通じて、希少哺乳類に関して小学生や一般市民に広く普及した。

（成果物）

【論文】

- ・松田浩輝・吉岡裕哉・木下智章・明石夏澄・副島和則・徳田 誠 (2017) 天然記念物ヤマネの佐賀県内における分布状況. 佐賀自然史研究 (22): 44-47.
- ・徳田 誠・吉岡裕哉・安田雅俊・明石夏澄・木下智章・副島和則・松田浩輝・川道武男 (2017) 佐賀県におけるムササビ *Petaurista leucogenys* の生体確認. 哺乳類科学 57(2): 349-353.

【発表】

- ・手塚絢美・安達修平・喜多章仁・徳田 誠 (2017) 塩生植物を寄主とするイソマツヒゲナガアブラムシの生活史と海水耐性. 日本昆虫学会第77回大会
- ・尋木優平・明石夏澄・原本すみれ・松田浩輝・喜多章仁・望岡佑佳里・徳田 誠 (2018) 標識再捕法により

明らかになったアリアケスジシマドジョウの生活史と生息状況.第65回日本生態学会

【記事掲載等】

・徳田 誠・松田浩輝・副島和則 (2017) ムササビ (佐賀県・情報不足種) の生体を県内初確認、九州北西部 (福岡県西部、佐賀県、長崎県) での生息確認は47年ぶり.大学定例記者会見 [2017年12月] (2017年12月25日 NHKニュース, サガテレビニュース; 2017年12月26日 佐賀新聞; 2017年12月27日 朝日新聞; 2017年12月30日 毎日新聞; 2018年1月13日 佐賀新聞 [ニュースこの人] 読売新聞にて報道)



学生講師による講習会の開催

(教育・研究・社会貢献における成果)

平成29年9月に学生の公募を行い、10月に学生10名を対象にスキンケアの方法の講義と演習を行った。平成29年12月に佐賀市内の公民館3か所 (西与賀公民館、西川副公民館、川上コミュニティセンター) とNPO法人ユマニテさがを通して、スキンケア講習会への参加希望の親子の公募を行った。今年度は西川副公民館 (8/18、参加者12組・学生4名) と本庄公民館 (2/22開催予定)、佐賀大学附属病院子どもセンター (9/8、参加者6名、学生5名)、さがんなかまつり (10/1、参加者10名・学生3名) で講習会を開催した。講習会では全体への教育と個別教育を行い、母親や家族のスキンケアに対する認識を変えるきっかけになったものとする。

(成果物)

【発表】

・鈴木智恵子「皮膚清潔ケアを見直してみませんか? part2 -ジグソー学習を通して-」第27回日本小児看護学会・テーマセッション (2017年8月19日-20日)

5.鈴木 智恵子/医学部・看護学科 (C)

「看護学生による小児アトピー性皮膚炎予防のためのスキンケア教育」

(目的及び計画)

小児のアトピー性皮膚炎の有病率は30%に達し、アトピー性皮膚炎があることで、子どもだけでなく母親のQOLも大きく損なわれている。近年生後間もない時期から保湿などの適切なスキンケアを行うことで、発症率を3割にまで低減することができることが明らかになっているが、スキンケアについては根拠のない誤った情報があふれており、正しいスキンケアの方法が浸透していない状況である。そこで、今年度も継続して平成26年度より実施するスキンケア教育の講師としての看護学生の養成と、乳幼児の母親や学童期の子どもへの教育を行う。教育中は保育科学生に子どもと遊ぶボランティアを依頼し、保育科の学生とのスキンケアと遊びの知識共有を行うことで、今後の小児看護の教育にも生かす。



スキンケア教室でのデモンストレーション

6.戸田 順一郎/経済学部 (D)

「地域資源を活用した市民の健康増進と地域活性化のための方策」をテーマとした調査研究

(目的及び計画)

人口減少、少子高齢化を背景に、地域の活力をどのようにして維持していくかが昨今多くの自治体において課題となっている。こうしたなか地域資源を活用し交流人口の拡大と住民参加の促進を図るまちづくりの手法としてフットパスという取り組みが注目されている。本研究は、地域住民、行政 (小城

市役所)、大学の協働のもと、小城市桜岡地区におけるフットパスコースの導入と、フットパスを活かした地域のあり方についての調査研究を課題とする。

(教育・研究・社会貢献における成果)

本年度の活動の目標であった小城市桜岡地区におけるフットパスコースについては、約20名の地域住民と「フットパス」に関する意見交換及びまち歩きを定期的に行い(ワークショップを計8回実施)コースを確定させることができた。また本取組みの地域における認知の向上を図るため、2度のイベント(一般参加者計115名)の実施、講演会の開催、チラシの作成、新聞・市報での情報発信なども行った。次年度には住民を中心とした推進団体が立ち上がるなど、地域における機運も徐々に高まりつつある。

(成果物)

【発表】

- ・「佐賀県におけるシビックプライド教育実践の事例」平成29年度熊大政創研政策フォーラム(平成29年9月9日)
- ・「フットパスと観光まちづくり-小城におけるフットパス導入に向けて-」小城商工会議所小城 歴史とまちづくり交流会(平成29年7月14日)

【記事掲載等】

- ・「小城にフットパス導入」(西日本新聞 平成29年6月8日)
- ・「フットパス楽しもう 学生と住民でコース考案」(佐賀新聞 平成29年9月20日)
- ・「フットパスを体験してみよう!」(小城市「広報さくら」9月号 平成29年8月18日発行)

【報告書】

- ・戸田順一郎「佐賀県におけるシビックプライド教育実践の事例」平成29年度熊大政創研政策フォーラム(平成29年9月9日)『地域・学校・家庭が連携したシビックプライド教育[報告書]』

7.久田 祥雄/医学部・地域医療支援学講座(E)
「**医学科6年次の地域医療機関における臨床実習が地域志向性に与える影響に関する研究**」

(目的及び計画)

わが国では超高齢社会の到来とともに疾患構造が大きく変化し、プライマリ・ケアや予防医学、長期療養型医療や在宅医療など高齢者のQOLの向上を目標とした医療の需要が高まっている。医学部では、このような社会のニーズを把握するために医学科6年次に地域密着型医療機関において臨床実習を行っている。平成27年度より、実習の前後に質問紙調査を開始した。質問紙には、地域医療に対する興味や将来地域医療に従事する意欲についての項目が含まれる。さらに、他大学医学部における地域医療実習での調査項目も参考にして、次年度以降の実習がより効果的になるため研究結果を反映させることを目的とする。

(教育・研究・社会貢献における成果)

実習への介入が強化され、地域医療教育の実施内容を充実することができた。本研究においては、学生の地域医療に対する姿勢に関連する要因を検索するなかで、多様な実習体験の重要性、巡回診療実習の重要性、総合医専門医志向との関連、プライマリ・ケアの理念の学びの頻度などを明らかにした。また、医療の側面のみならず地域志向について、質問紙調査やレポートを用いて分析し、分析で得た知見を、関係の学会で成果として発表報告した。今後、雑誌や論文でも発信していく。

(成果物)

【発表】

- ・久田祥雄「医学生の地域医療実習レポートのテキストマイニングによる解析～医学生は何を印象強く学んでいるか～」第13回日本プライマリ・ケア連合学会九州支部総会・講演会.佐賀大学医学部医学科・看護科講義棟(2018年2月3-4日)
- ・久田祥雄「地域医療実習は医学生の総合医志向を高める」第16回日本病院総合診療医学会学術集会.別府国際コンベンションセンター(2018年3月2-3日)
- ・久田祥雄「医学生の地域医療に対する興味・関心と関連する体験学習の探索的研究～巡回診療・出張診療への積極的参加は、地域医療に対する自信を高める～」第8回九州地域医療教育研究会.鹿児島(2018年4月21日発表予定・抄録未採択)

8.平瀬 有人／工学系研究科都市工学専攻 (F) 「地域の再生に向けた地域拠点施設の計画・デザイン」

(目的及び計画)

鹿島市のJR肥前浜駅周辺を対象とし、地域の再生に向けた地域拠点施設の計画・デザインを検討する。既存公共施設を再利用しながら駅を拠点とした地域施設を再整備することはスマートシユリンクには重要なテーマである。平成22年に公共建築物等木材利用促進法が施行され、公共建築物の木造化・内装木質化が推進されることとなったが、駅施設においても同様である。本課題ではまずは地域の空間資源の把握や木質化先進事例の収集を行い、駅前広場や周辺環境の景観を配慮した計画・デザイン提案を行う。

(教育・研究・社会貢献における成果)

地域特性を活かした駅舎・駅前広場の将来像へ向け、地域拠点施設の計画・デザインの検討の一環で、駅に接続した木質によるカフェ・ショップ計画・デザイン監修に携わった。将来の駅前広場整備とともにデザイン的に統一感のとれた駅前広場となるよう景観を配慮した計画・デザインとしている。学生も実施設計に少なからず携わることで、素材の選定や納まりなど技術的な検討などを含めた実践的な経験をすることができた。

(成果物)

【刊行物】

・平瀬有人：「JR肥前浜駅カフェ・ショップ新築工事デザイン監修」2017.1 私家版

9.和久屋 寛／工学系研究科・電気電子工学専攻 (F) 「続・伝統的建造物群保存地区における人工知能関連技術を用いた避難経路探索の試み」

(目的及び計画)

我が国は自然災害大国であり、近年、その多発傾向から防災・減災に対する住民の危機意識が高まっている。また、歴史的な地方都市では、少子高齢化や過疎化に加え、法的規制によるハード面の整備に困難を伴う場面がある。このような状況下、



研究対象地である鹿島市肥前浜宿の視察

従前から交流実績のある肥前浜宿（鹿島市）を対象地区と定め、我々が得意とする人工知能（AI）関連技術を積極的に活用して、引き続き、避難経路探索などの課題に取り組む。また、この種の技術を有する地元ICT企業との連携も計画中である。

(教育・研究・社会貢献における成果)

前年度に引き続き、重要伝統的建造物群保存地区の肥前浜宿を対象とし、実施者の担当学生とともに、緊急時の避難経路探索課題などに取り組んだ。以前から遺伝的アルゴリズム（GA）と呼ばれる手法を採用しているが、単に移動距離を最小化するだけでなく、道路閉塞確率を考慮して最適な経路選択ができるように検討した。本研究を進めるに当たり、これまでと同様、他専攻の教員・学生と意見交換を行い、地元住民と交流する場を持った。また、地元ICT企業を訪問し、産業界における最先端技術に触れる機会を通して、我々の視野が大いに広がったと感じる。

(成果物)

【査読付学術論文】

・H.Wakuya, R.Nishimura, H.Ito, N.Mishima, S.-H.Oh, and Y.-S.Oh: "An application of genetic algorithm to evacuation route planning for ICT-based disaster prevention design aiming at real-world implementation", ICIC Express Letters, Part B: Applications, Vol.8, pp.1537-1544, 2017.11

【学会発表】

・H.Wakuya, R.Nishimura, H.Ito, N.Mishima, S.-H.Oh, and Y.-S.Oh: "An application of genetic algorithm to evacuation route planning for ICT-

based disaster prevention design aiming at real-world implementation”, 12th International Conference on Innovative Computing, Information and Control, D6-8 (久留米シティプラザ, 2017年8月28日~30日)

・H.Wakuya, Y.Tanaka, H.Itoh, Y.Okazaki, N.Mishima, S.-H.Oh, and Y.-S.Oh: “Information visualization for risk estimation of hazardous locations from the viewpoint of disaster prevention design”, International Conference on Convergence Content 2017 (タイ王国, 2017年12月9日~12日)

・和久屋 寛, 田中裕恒, 伊藤秀昭: “自己組織化マップにおいて着目する項目へ特化した特徴マップの限定的表示法”, 電子情報通信学会ニューロコンピューティング研究会, NC2017-56 (北九州学術研究都市, 2018年1月26日~27日)

・田中裕恒, 和久屋 寛, 伊藤秀昭, 岡崎泰久, 三島伸雄: “危険箇所の分類のための災害種別に着目した自己組織化特徴マップの解析”, 第33回ファジィシステムシンポジウム, TC2-1 (山形大学工学部, 2017年9月13日~15日)

・和久屋 寛, 田中裕恒, 伊藤秀昭: “SOMで獲得した特徴マップを部分空間へ投影する解析法”, 日本神経回路学会第27回全国大会, P-44 (北九州国際会議場, 2017年9月20日~22日)

・Y.Tsuchiya, H.Wakuya, H.Itoh, and N.Mishima: “A trial of evacuation route planning considering risk level by genetic algorithm”, 平成29年度日本知能情報ファジィ学会ECOmp研究部会研究会 (九州工業大学サテライト福岡天神, 2018年2月28日)

【講演】

・和久屋 寛: “ICT防災デザインに取り組んだ6年間 ~ 電気電子工学の立場から~”, 地域防災情報シンポジウム in 佐賀 (佐賀大学, 2018年3月8日)

10.北垣 浩志/農学部生物環境科学科 (G)

「佐賀県太良町の山間地で生産された米を使った甘酒の特産化」

（目的及び計画）

これまでに佐賀大学農学部で創出した甘酒に関する革新的な研究成果をもとにして、佐賀県の太良町の遊休資産を活用し、太良町の特産物であるみかんを使って甘酒を造り、太良町の特産物にす

る。このことで太良町の経済を活性化し、さらに佐賀県、北部九州全体の経済の活性化、太良町のみかんやコメの生産の活性化につなげ、雇用創出を図る。また、ヘスペリジンの多い、生活習慣病予防効果のある甘酒を開発して国民の医療と福祉も向上させる。なお、本件は太良町長より直接の依頼を受け実施する。

（教育・研究・社会貢献における成果）

太良町の特産物を使った甘酒の開発に成功し、関連企業の誘致に成功した。これらの成果は佐賀新聞に掲載された。2018年3月に行われる鹿島市酒蔵ツーリズムにもみかん甘酒を出品する予定である。また、甘酒、みかんの分析を通じて食品企業に就職を希望している学生の食品分析能力を向上させることができた。

（成果物）

【報道】

・「太良ミカン、米を甘酒に 2月に酒造会社設立へ」(佐賀新聞 平成30年1月23日)

11.松本 雄一

／農学部附属アグリ創生教育研究センター (G)

「地域アグリ資源を活用した地域・企業と学生との協働による商品開発を通じた社会連携教育」

（目的及び計画）

地域のアグリ資源となっている機能性野菜の活用を進める生産者や企業、自治体との連携をより深化させ、企業や自治体が行う商品開発・PR活動



JCC 主催の HanaMarche2017 への参加



東京ビッグサイトで開催されたアグリビジネス創出フェアへの出展に学生も参加し地域発の機能性食品・化粧品の開発を協働して行う。地域資源を活用した地域での取り組みについて学ぶ機会とするとともに、学生・大学が関わった商品を開発することで産業振興・大学のPRとして波及が期待される。また、大学発の商標として登録されたブランドキクイモ「サンフラワーポテト®」の活用も図っていく。

(教育・研究・社会貢献における成果)

唐津市で開催されたJCC主催のHanaMarche2017に学生が参加し、地域植物資源ネロリを活用した化粧品の製造したほか、キクイモサンフラワーポテトのPRを行った。東京ビッグサイトで開催されたアグリビジネス創出フェアにも佐賀大学農学部から唯一の出展を行い、佐賀大学商標サンフラワーポテトや研究成果により開発されたお茶加工製品などを学生が全国の企業等に対してPRした。これらの取り組みにおいて西日本新聞、佐賀新聞、文教速報、文教ニュース、雑誌蛭雪時代など多くのメディアに学生の写真やコメントが掲載され、大学自体のPRにもつながった。

(成果物)

【発表】

- ・丸田沙織, 有馬進, 川口真一, 安田みどり, 長根寿陽, 松本雄一. キクイモにおける収穫時期の違いによる塊茎中イヌリンの変化. 園芸学会平成29年度秋季大会
- ・松本雄一. 菊芋(キクイモ)の魅力に迫る!(歴史・栽培方法・レシピについて). 基山健康虎の巻 秘伝伝授講演会
- ・松本雄一. 機能性食品原料キクイモの生産と普及拡大.

農業農村工学会第51回畑地かんがい研究集会

- ・松本雄一. 機能性食品原料キクイモの生産と普及拡大. 平成29年度全国大学附属農場協議会秋季全国協議会
- ・安田みどり, 斎木まどか, 児島百合子, 丸田沙織, 松本雄一. キクイモのイヌリン含量に及ぼす採取時期と加熱温度の影響. 日本食品保蔵学会第66回大会

【記事掲載】

- ・「キクイモ特産化を考察」(佐賀新聞 平成29年3月18日)
- ・「キクイモ生産広がる 産学官で商品開発も」(西日本新聞 平成29年5月11日)
- ・「佐賀大学 健康食品として注目を集めるキクイモを展示会でPR」蛭雪時代2017. p196

12.石井 美恵/芸術地域デザイン学部 (A)

『地域染織芸術の再興「佐賀・鹿島錦、鍋島段通、鍋島更紗」の大学教育プログラムへの導入に関する研究』

(目的及び計画)

佐賀の染織芸術である佐賀・鹿島錦、鍋島段通、鍋島更紗を大学教育プログラムへ導入するための研究が目的である。地域志向教育として伝統的染織技術を大学で教えられるように、また生涯学習として地域で教えられるように、伝統的染織技術の理論的研究と教材作りを地域の伝承者と学生とともに実施する。

(教育・研究・社会貢献における成果)

今年度は「佐賀錦講習会」を佐賀錦振興協議会(佐賀市)と連携して取り組んだ。協議会から講師を派遣してもらい、後期授業の水曜日3-4限目に2コマ連続で8回実施した。佐賀錦はコンパクトな卓上機で比較的安価であること、場所をとらず20



「佐賀錦講習会」での佐賀錦制作

名程度の実習が可能であること、基礎織の段階から色と織のデザインを自ら考え、作品に完成させて成果が得られることなど、学部の地域志向型美術教育に適した工芸であることが分かった。これにより、実習で基礎織りから小作品に仕上げるまでのカリキュラムと教材をつくることができた。さらに講習会の受講は他県の学生にとっても自分の地域の伝統工芸に目を向けるきっかけとなった。伝統工芸の担い手が減少している中で、将来的に大学の科目として認められれば、佐賀錦が大学において教育に値する地域の伝統工芸であるという社会的価値を認めることとなる。また教員が協議会の研修で講演者として招聘され、本学の研究と教育を紹介する機会が得られ、双方向的な社会貢献活動となった。

13. 森田 佐知子／キャリアセンター (H)

「大学生の地域キャリア志向醸成プロセスに関する研究」

(目的及び計画)

現在、キャリアセンターでは、地域志向型キャリア形成支援プログラムの確立に取り組んでいる。本事業の目的は、地域志向型キャリア教育授業を受講した学生の「地域キャリア志向」の変容を、量的・質的に分析・評価することで、大学生の「地域キャリア志向醸成プロセス」を解明し、次年度以降における効果的な地域志向型キャリア教育の実施に繋げることである。

(教育・研究・社会貢献における成果)

本事業による学術的な特徴は、従来キャリアの分野で研究が蓄積されてきた大学生の「地元志向」に加え、地元貢献できる人材になるという「キャリア意識」の醸成も試みた点である。本研究では、地域志向型キャリア教育授業を受講した学生の「地域キャリア志向」の変容を、学生への半構造化インタビューによりモデル化することに成功した。本研究より、不安を抱え大学に入学してきた学生が、授業での知識習得を体験型プログラムへの参加につなげ、地域や地域企業への愛着心だ

けでなく、自らの将来に向けた具体的な行動につなげるまでのプロセスが明らかとなった。こうしたプロセスを授業の中に組み込むことで、学生の「地域キャリア志向」を醸成することができると考えられる。近年の売り手市場を受けて、地域企業における人材不足は深刻である。大学が、地域で就職し、地域のリーダー人材となり得る学生を養成することは、地域企業、地域社会の発展に大きく貢献できると考える。

(成果物)

【発表】

・森田佐知子「大学生の地域キャリア志向醸成プロセスに関する研究-地域企業体験プログラムと連動したキャリア教育授業から-」日本キャリアデザイン学会第14回研究大会,成城大学,2017.09.02

14. 中野 理佳／医学部・看護学科 (H)

「佐賀県の母子保健課題を踏まえた助産師教育方法の開発」

(目的及び計画)

本事業の目的は、助産コースの学生(4年4名、3年4名)が、妊娠期や育児期の親や祖父母などを対象とした健康教育を通して、地域での生活についてより理解を深めること、対象や家庭の状況に応じた介入を考え実践すること、それらを産褥期の退院指導に活かすことである。計画としては、育児期の親や祖父母を対象としたスキンケアに関する健康教育の企画・運営・実施・評価を行い、産後フォーラムの企画・運営への参加、産後の女性や夫のニーズとその支援方法についての学修、妊娠期の方や家族を対象とした沐浴やスキンケアに関する健康教育の企画・運営・実施・評価を行う。

(教育・研究・社会貢献における成果)

平成29年6月3日、「産後の母体のダメージと回復」をメインテーマとし、第3回SUN-GOフォーラムをゆめタウンにて開催した。ブースでは「抱っこ相談」、「最新育児グッズ紹介」、「正しい保湿の仕方」、「握力測定」を担当し、152名の方と関わることができた。また、平成29年6月27日、「夏のスキ

ンケア教室」と題して、母親や祖父母を対象とした健康教育を鍋島公民館にて開催した。12組の母児や祖母に対し、実際に実技を交えた健康教育を行い、ほとんどの方が今後家庭で取り入れられるという回答であった。平成30年3月6日には、妊婦やその家族を対象とした沐浴及びスキンケア教室を開催した。なお、今年度は助産師学生4名中2名が佐賀県に助産師として就職することが内定している。他の2名も地元に戻り、助産師として就職する予定である。

(成果物)

【刊行物】

- ・第3回SUN-GOフォーラムinゆめタウンさが実施報告書(2017)

【記事掲載等】

- ・「ひびの×佐賀大学 夏のスキンケア教室」(佐賀新聞 平成29年6月30日)

地(知)の拠点整備事業(COC)／地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

■COC・COC+シンポジウム2017

地域を志向する教育と地域を担う人材の育成

日 程:

平成29年10月14日(土) 13:00~17:20

場 所:

佐賀大学本庄キャンパス 教養教育大講義室

概 要:

大学COC事業とCOC+事業が共同で実施。「佐賀県におけるCOC・COC+の取り組み」についての趣旨説明及び、岩手大学の取組みを紹介する基調講演、これまでのCOC・COC+の学びの成果をまとめた学生による事例発表が行われた。また、パネルディスカッションでは、大学・企業・NPO等の関係者が登壇し、インターンシップ等を含む職業統合的学習について議論を深めた。当日は115名が参加した。



基調講演を行う岩手大学・船場ひさお氏

内 容:

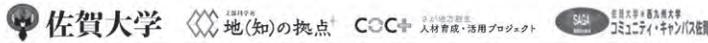
基調講演は、岩手大学COC推進室の船場ひさお氏が「ふるさといわて創造プロジェクトの取組み 一地域のファンを増やす、いわての多様なインターンシッパー」をテーマに講演。岩手県内で実施されているCOC・COC+事業概要と、多様なインターンシップの取組みを紹介した。すでに岩手県内では「東北地域大学間連携インターンシップ(インターンシップin東北)」の仕組みができており、その定着と普及が進んでいるが、地域のファンを増やすためには市町村が一体となりインターンシップを実施すること、そして地域でのインターンシップ受け入れに対応可能なコーディネーター養成が大切であると説明した。

事例報告では、佐賀大学、西九州大学、佐賀女子短期大学、九州龍谷短期大学の学生各1名が、自身のインターンシップ体験について報告。インターンシップを通して何を学んだのか、それによって大学での学びがどのように変化したのかなどを経験を基に話した。

パネルディスカッションは、西九州大学の井本浩之氏が座長となり「職業統合的学習の推進と課題 ～地域に“学び” 地域で“働く”～」をテーマに実施。パネリストとして、佐賀大学の小嶋紀博氏、佐賀県庁の近藤英心氏、南福岡自動車学校の江上喜朗氏、NPO法人succa sencaの稲田諭氏、コメンテーターとして、基調講演講師の船場氏、引き続き、事例発表を行った学生4名にも登壇してもらい、佐賀県のインターンシップの現状や課題、今後の取組みなどについて議論を深めた。



各パネリストの事例報告を踏まえて行われたパネルディスカッション



地（知）の拠点整備事業（COC）/ 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）

COC・COC+シンポジウム 2017

地域を志向する教育と 地域を担う人材の育成

日時 平成29年10月14日（土）13:00～17:20
（受付 12:30～）

会場 佐賀大学本庄キャンパス 教養教育大講義室

平成25年度に佐賀大学と西九州大学が連携して採択された大学COC事業では、地域志向型の教育を実施し、佐賀の地における知の拠点としての機能を強化してきました。平成27年度からは、大学COC事業を発展させたCOC+事業において、大卒・短大卒者における地元就職率の向上と地域産業の振興による雇用の拡大・創出に協働して取り組んでいます。

本シンポジウムでは、岩手大学の大学COC・COC+事業の取り組みを知るとともに、佐賀県における本事業の地域志向型教育を踏まえたインターンシップ等「職業統合的学習（Work Integrated Learning: WIL）」の取り組み事例を紹介し、その推進と課題について議論を深め、佐賀に“学び”佐賀で“働く”につなぐための方法を考えます。

PROGRAM

- 13:00～ 開会挨拶
13:10～ 趣旨説明 五十嵐 勉（佐賀大学 全学教育機構 教授）
13:30～ 基調講演
「ふるさとイワて創造プロジェクトの取組み
- 地域のファンを増やす、いわての多様なインターンシップ -」
講師：船場 ひさお（国立大学法人岩手大学 COC 推進室・特任准教授）
14:40～ 事例発表
「大学COC・COC+事業の学びの成果
～地域志向型教育やインターンシップ等を含めた
職業統合型学習から学んだこと～」
佐賀大学・西九州大学・佐賀女子短期大学・九州龍谷短期大学 学生各1名
15:40～ パネルディスカッション
「職業統合的学習の推進と課題～地域に“学び”地域で“働く”～」
座長：井本 浩之（西九州大学 副学長）
コメンテーター：船場 ひさお（国立大学法人岩手大学 COC 推進室・特任准教授）
パネリスト：近藤 英心（佐賀県総務部人事課企画・人材担当係長）
江上 喜朗（南福岡自動車学校 代表取締役社長）
稲田 諭（特定非営利活動法人 Succa Senca CIO/SAGA 食べる通信 副編集長）
小嶋 紀博（国立大学法人佐賀大学 地域創生推進センター 特任講師）
佐賀大学・西九州大学・佐賀女子短期大学・九州龍谷短期大学 学生各1名
17:20～ 閉会
17:30～ 情報交換会（佐賀大学学生会館1階食堂）

基調講演



ふさば
船場 ひさお

ふるさとイワて創造協議会
若者・女性地域定着プロジェクト担当
ふるさと発見！大交流会 in Iwate
実行委員会 事務局長
岩手大学 COC 推進室特任准教授
博士（芸術工学）

栃木県さくら市出身。九州芸術工科大学芸術工学部芸術設計学科卒業。建築芸術設計事務所などを経て1993年千代田化工建設株式会社入社。若者エンシェアとして各種プロジェクトを担当した後、九州大学大学院博士後期課程で学び、2007年博士（芸術工学）を授与される。経済同友会VBLにてベンチャー企業家のインターンシップ・プログラムの企画・推進などの実績を積み上げ、フェリス学院大学学芸学部専任講師を経て、現在岩手大学 COC 推進室特任准教授。ふるさとイワて創造プロジェクトにおいて若者・女性の地域定着に向け、岩手県内各地でのインターンシップ・プログラムの開発および交流イベントの推進、新しいことにチャレンジする人材を地域に送り出すプロジェクトを担当。

主催：国立大学法人佐賀大学 共催：さが地方創生人材育成・活用推進協議会

シンポジウムチラシ

地(知)の拠点整備事業(COC)／地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

COC・COC+ FD・SD研修会 インターンシップと産学官連携 ～量的拡大・質的充実に向けての可能性～

日 程:

平成30年2月22日(木) 13:30～16:50

場 所:

佐賀大学本庄キャンパス 大学会館2階多目的ホール

概 要:

地域における人材確保の観点から、産学官が連携した正課インターンシップの取り組みの課題と可能性について学ぶ研修会。第1部の基調講演は「産学官連携による正課インターンシップの課題と可能性」をテーマに、一般社団法人福岡中小企業経営者協会常務理事の古賀正博氏が講演した。中小企業等は人材確保が難しい現状であるが、これら企業が地域の人材育成に積極的に関わることが重要で、結果的にはこの活動が人材確保につながると話した。人材育成としての社会連携教育の具体例としては、実践型インターンシップや企業取材PBL(キャリアスコーププロジェクト)、その他のさまざまな社会連携キャリアセミナーを紹介。また、正課インターンシップとしては、大学教員の本気度が重要であることや、インターンシップの研修プログラムは「学内にも学外にもなく共に創る(探す)時代」であり、学生教育に適したプログラムを一緒に創り出す必要があると説明した。

第2部では「正課インターンシップをどう推進していくか ～プログラムを企画・立案してみよう～」をテーマにグループワークを行った。はじめにワークショップの趣旨と目的を説明し、各グループで5日間の正課インターンシッププログラムを作成した。グループワーク後の発表では、各グループから農家との交流を通じた外国人技能実習生と農家の連携の応援や、専門分野に合わせたプログラムの提供など、さまざまなプログラムが提案された。

アンケートでは、参加した企業の方や教職員、学生から「3者(企業・学生・大学)の意見交換ができたことで、それぞれの視点にかなう活動が出来そう」や「受け入れ先企業、学生とプログラムを創ることができたのは良かった。双方の意見を聞くことができる貴重な経験だった」「ここまでインターンシップのことを考えたことがなかったが、企業の方も良く考えて学生に機会をくださっていることがわかって、今からでもインターンシップに行ける所に行きたいと思った」という意見が聞かれ、本研修会への参加が正課インターンシッププログラムに対する理解促進につながった。本研修会は佐賀大学のFD(Faculty Development)・SD(Staff Development)研修会として実施し、71名が参加した。



基調講演を行う古賀氏



グループワークでは活発な意見交換が行われた

文部科学省
地(知)の拠点 COC+ 人材育成・活用プロジェクト SIG 佐賀大学・西九州大学
フミダス・キャリアセンター

地(知)の拠点整備事業(COC)/地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)
COC・COC+ FD・SD 研修会

インターンシップと 産学官連携

要申込み
定員
60名

～量的拡大・質的充実に向けての可能性～

平成25年度に佐賀大学と西九州大学が連携して採択された大学COC事業では、地域志向型の教育を実施し、佐賀の地における知の拠点としての機能を強化してきました。

平成27年度からは、大学COC事業を発展させたCOC+事業において、大卒・短大卒者における地元就職率の向上と地域産業の振興による雇用の拡大・創出に協働して取り組んでいます。

本研修会では、地域における人材確保の観点から、産学官が連携した正課インターンシップの取組みの課題と可能性について議論を深めます。

平成30年

2月22日(木)

13:30～16:50

(13:00 受付開始)

佐賀大学

大学会館2階多目的ホール

13:30 開会

13:40～14:40

第1部 基調講演

「産学官連携による
正課インターンシップの課題と可能性」

講師：古賀 正博 (一般社団法人
福岡中小企業経営者協会常務理事)

15:00～16:30

第2部 グループワーク

「正課インターンシップをどう推進していくか
～プログラムを企画・立案してみよう～」

ファシリテーター：濱本 伸司 (一般社団法人
フミダス代表理事)

16:50 閉会

古賀 正博

一般社団法人
福岡中小企業経営者協会
常務理事



1991年九州松下電器入社 人事部配属。以来、約20年間「Panasonic」グループで人事関連業務を行う。主に組織管理、人事評価、人材採用・教育、M&Aなどを担当。2010年福岡中小企業経営者協会 入会。2013年九州インターンシップ推進協議会 理事・事務局長兼務。2016年1月より現職。地場中小企業の経営支援を行う一方で「地元若者は地域全体で育成しよう」との思いで中学・高校・大学生の育成に企業が積極的に関わる社会連携教育の企画、運営を推進。



濱本 伸司

一般社団法人 フミダス代表理事

2000年、熊本県立大学卒。熊本市長秘書等を経て、2012年から現職。「地域を担う人材を育む」をミッションに、大学・学校教育と連携した実践教育プログラムを実施。熊本地産以降は社会起業家を支える「熊本復興右腕プログラム」、「明日のくまもと塾」なども被災自治体で実施中。

主催：佐賀大学全学教育機構高等教育開発室

共催：佐賀大学地域創生推進センター、佐賀大学キャリアセンター、西九州大学
西九州大学短期大学部、九州龍谷短期大学、佐賀女子短期大学
さが地方創生人材育成・活用推進協議会、大学コンソーシアム佐賀

FSDS 研修会チラシ

文部科学省 地(知)の拠点整備事業 佐賀大学・西九州大学 コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト 外部評価の実施

日 程:

平成30年2月8日(木) 13:00~17:00

場 所:

佐賀大学本庄キャンパス 理工学部8号館1階 社会連携課会議室

概 要:

コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト運営委員会が行った「自己点検評価」の結果について、運営委員会以外の者による外部評価を実施した。外部の有識者を外部評価委員会委員として招聘し、自己点検評価報告書の書面審査、討論による評価を依頼した。外部評価委員会は、評価報告書を運営委員会委員長に提出し、運営委員会が行う事業等の質的向上を図り、その運営全般の改善・改革に資するとともに、ステークホルダーや社会からの負託に応えることを目的とする。

外部評価委員会の委員名簿

吉村 充功	日本文理大学・教授、教育推進センター長、学長室長
渡邊 亮太	福岡工業大学FD推進室・室長
遠藤 彰	佐賀県 政策部 企画課 副課長
伊豆 哲也	特定非営利活動法人まちづくり機構ユマニテさが 常務理事

コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会の出席者名簿

寺本 憲功	コミュニティ・キャンパス佐賀運営委員会委員長 佐賀大学副学長(研究・社会貢献担当)
井本 浩之	西九州大学COC事業実施責任者・教授 西九州大学副学長(社会貢献担当)
三島 伸雄	佐賀大学COC事業実施責任者・教授 リージョナル・イノベーションセンター 産学地域連携部門長(併任)
五十嵐 勉	佐賀大学COC+事業実施責任者・教授
木塚 徳男	佐賀大学社会連携課・課長
三島 舞	佐賀大学COC事業コーディネーター
横尾 仁美	西九州大学COC事業コーディネーター

(事務補佐業務関係者)

市山 郁生	佐賀大学	学術研究協力部・部長
井上 謙一	佐賀大学	社会連携課・係長
諸永 正	佐賀大学	社会連携課



外部評価委員会の開催

平成29年度 外部評価結果

■項目ごとの評価・評定:

- 項目① 佐賀大学・西九州大学、両大学の連携による運営体制の目標や成果に関する進捗状況について
【評定結果：Ⅳ：順調に進んでいる】
- 項目② 佐賀大学における地域を志向した教育研究、社会貢献の取り組みの目標や成果に関する進捗状況について
【評定結果：Ⅳ：順調に進んでいる】
- 項目③ 西九州大学における地域を志向した教育研究、社会貢献の取り組みの目標や成果に関する進捗状況について
【評定結果：Ⅳ：順調に進んでいる】
- 項目④ 佐賀大学・西九州大学、両大学の連携による地域を志向した教育研究、社会貢献の取り組みの目標や成果に関する進捗状況について
【評定結果：Ⅴ：特筆すべき進捗状況にある】
- 項目⑤ 佐賀大学における自治体・NPO・市民等のステークホルダーとの協働による取り組みの目標や成果に関する進捗状況について
【評定結果：Ⅳ：順調に進んでいる】
- 項目⑥ 西九州大学における自治体・NPO・市民等のステークホルダーとの協働による取り組みの目標や成果に関する進捗状況について
【評定結果：Ⅴ：特筆すべき進捗状況にある】
- 項目⑦ 事業の内容についての両大学による社会への発信・情報公開について
【評定結果：Ⅳ：順調に進んでいる】
- 項目⑧ 佐賀大学における補助金の執行状況について
【評定結果：Ⅲ：適正に執行されている】
- 項目⑨ 西九州大学における補助金の執行状況について
【評定結果：Ⅲ：適正に執行されている】

■総合評価:

【評定結果：Ⅳ：順調に進んでいる】（総評・総括）

本事業の事業最終年度の総評として、国立大学である佐賀大学、私立大学である西九州大学のそれぞれの特性を踏まえ、共通するミッションである地域社会への貢献の実現に向けて、相互の強みを活かした連携体制及び地域を志向した教育研究、社会貢献の取り組みが計画に基づき着実に実行されており、各大学の取り組みは順調に進んでいると判定した。また、両大学の連携は当初の想定を超える連携の成果を生み出しており、特筆すべき進捗状況にあると判定した。事業全体としても、一部には当初の想定を上回る特筆すべき成果が達成できていると判定した。

昨年度からの改善点として、地域志向教育の充実はもちろんのこと、地域住民アンケートを実施し高い満足度と必要性を得るなどの事業の波及効果のエビデンスを得ることも出来ている。一方で、学生の地域課題の発見・解決についての主体的に学ぶ学修時間の増加など、本事業で掲げた目的・目標に対して、エビデンスが不十分なものも見受けられる。

以上のことから、①～⑨までの外部評価結果を踏まえ、本事業の総合評価は「Ⅳ：順調に進んでいる」と判定する。

しかしながら、2大学の連携事業として両大学の連携による取り組みが「Ⅴ：特筆すべき進捗状況にある」レベルまで達したことは、本事業がこれからの地域における大学連携のあり方として、他の地域のモデルになるものである。その点から、事業に取り組んだ両大学の関係者、ステークホルダーの関係者には最大限の賛辞を送りたい。また、各大学の取り組みについては、報告書に記されたエビデンス等に基づき、概ね「Ⅳ：順調に進んでいる」との判定を行ったが、全般的な印象としては、本事業を通じて、各大学が地域の大学として地域に信頼される存在として浸透しつつあると認識することが出来た。今後も継続的に取り組みを進めつつ、その成果をエビデンスとして示すことが、各大学にとって共通課題と思われる。

なお、本事業は文部科学省の補助事業としては本年度で終了し、一つの区切りとなるが、佐賀における地（知）の拠点としての存在意義を本事業を通じて高められたことから、事業終了後も効果的な取り組みを引き続き実施することを強く望みたい。そのためには、補助事業が終了する今後はコスト面が問題になるが、ステークホルダーである自治体や住民・NPO等と適切にコストシェアを図ることが大切である。これまでが大学が補助事業を通じて、教育の一環として地域課題を解決することを主な目的に行ってきたが、今後は大学と地域との関わりが、ステークホルダーそれぞれの課題を解決する有効な手段となり、コストシェアを含め、相互に協働できる持続的な体制が実現されることを期待する。

■アリアケスジシマドジョウの生態調査や人工繁殖を実施

【地域志向教育研究経費事業関連】

平成29年4月13日(木) 西日本新聞



アリアケスジシマドジョウの繁殖
調査の生体調査の成果を
15年ぶりに発表

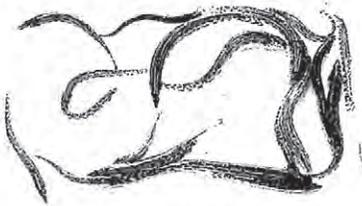
佐賀西高サイエンス部

佐賀市の佐賀西高サイエンス部の生徒が、有明海への流入河川に生息する絶滅危惧種「アリアケスジシマドジョウ」の人工繁殖を試みている。主要な生息域となつている阿蘇川が、河川改修工事の影響を受けていることや、河川周辺の農地整備事業が進んでいることもあり、生徒たちは希少な個体を守るため、生態調査や繁殖実験に力を注いでいる。

アリアケスジシマドジョウ
「希少種 私たちが守る」

(熊本県)

佐賀西高の生徒が、アリアケスジシマドジョウを飼育し、成長させたアリアケスジシマドジョウ



佐賀市阿蘇町阿蘇川の農地整備で新たに作られた水溜



佐賀大農学部の中野准教授が生態を調べるために印を付けたアリアケスジシマドジョウ

生態調査や人工繁殖

佐賀西高サイエンス部は、14年度に始まった阿蘇地区の農地整備がアリアケスジシマドジョウの生息域に与える影響を調べるため、生態調査や人工繁殖に力を入れている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

生息地の農地整備事業機に

佐賀西高は今年1月、福岡市で開かれた「九州高校生態理科研究発表大会」で実験成果を発表、九州・沖縄の各校が出席した生物部門で最優秀賞を受けた。生徒たちは阿蘇地区の3カ所で、体長と生息域、性別の調査を行った。

佐賀大農学部の中野准教授(生態学)は、生徒らの活動について、「アリアケスジシマドジョウの人工繁殖を研究する機関は聞いたことがなく、調査もある」と評価する。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。阿蘇地区の農地整備は、農地の生産性を高めるために行われており、農地の生産性を高めるために行われている。

■キクイモ研究・PR活動・商品開発の取り組み紹介

【プロジェクトG関連】

平成29年5月11日(木) 西日本新聞



北米原産の「キクイモ」の生産や商品開発が県内で広がっている。シヨウガのような形をした芋、血糖値の上昇を抑えたり、腸を整えたりする効果が目玉を集めているという。栽培にはほとんど手間がかからず簡単に収穫できるとあって、耕作放棄地対策にも「投資しているキクイモ。栽培や研究の現場を訪ねた。(山下穂)

キクイモ生産 広がる



4月末、島田市神辺町にある小森さん(70)の山間部の畑で収穫されたキクイモ。今年からは産地も基山町で採れたキクイモを同町3店まで仰ぐという。自身畑や周りの耕作放棄地へ、肥液や化学肥料を使わず「自然栽培」に取り組む小森さんは、サトウキビやウコギは約20年前からキクイモを栽培し始めた。現在は町の農家も増えている。現在町の農家も増えている。現在町の農家も増えている。現在町の農家も増えている。

が咲き、11月、初産3月が収穫期。見目はシヨウガに似ているが、風味は「ホクホク」している。小森さんは「食品やシニアヘルスの切り込みにして、先ず掛ける。『オイス・タカハシ』は半量(福岡市)を昨年、産官連携でキクイモの加工品を作った。クイモの加工品を作った。

産学官で商品開発も

血糖値の上昇抑制、栽培簡単

日本では江戸時代から産している。これまでに「ポテトチップス」など商品化。今年からは産地も基山町で採れたキクイモを同町3店まで仰ぐという。自身畑や周りの耕作放棄地へ、肥液や化学肥料を使わず「自然栽培」に取り組む小森さんは、サトウキビやウコギは約20年前からキクイモを栽培し始めた。現在は町の農家も増えている。現在町の農家も増えている。現在町の農家も増えている。現在町の農家も増えている。



オイス・タカハシが開発したキクイモの加工品。

広報関係

■神埼市城原地区の地域住民と佐賀大学・西九州大学の学生が集う「きばる塾」開催

【プロジェクトA関連】

平成29年5月30日(火) 佐賀新聞

イノシシ捕獲倍増、被害減る



「きばる塾」でイノシシ対策について学ぶ地域住民と学生たち

ICT活用で効率化図る
 神埼市神埼町城原地区でイノシシ対策に取り組む捕獲隊が設立して1年がたった。イノシシの年間捕獲数は設立前に比べ倍増、その効率も大幅に向上した。ICT活用を推進するため、最先端のICT技術を用いて対策を学ぶ機会も出始めた。22日にはしし肉料理を家庭へ普及させる「地産地消」につなげるため、地域住民を招いた試食会が開かれた。

しし肉料理PR 地産地消に期待 住民招き試食会も

一般市民向けにイノシシの試食は、農産物にはなっていないが、地産地消に生かすことで、約8割が自給。車と移動の回数が減ると、昨、年、組織が発足して住民22人、分々の地産地消を担う補助員も増えた。22日は1人で月に新たに狩猟免許を取得した住民が発表された。区長は中山間地域を支援する助成金を活用し、試験に先立ち、なにかが家庭ではなにかい、しし肉料理の普及に期待を込めて、地産地消に期待を込めて、イノシシに結びつける。

中島幸敏

城原地区「捕獲隊」発足1周年

神埼市の城原地区住民、退職を覚えた住民たちが22日、地域の活性化を目的に、1月1日の地産地消を立ち上げた。佐賀大学や西九州大学の学生も加わり、地域の活性化を目的に、1月1日の地産地消を立ち上げた。佐賀大学はまっくらの観点から課題解決の学びにつなげる。

城原地区住民、大学と協働



「きばる塾」でイノシシ対策について学ぶ地域住民と学生たち

22日は佐賀大学やシニアクラブ、農会、社会福祉協議会、行政委員会、農会、農協、ローソンやエディオン、スーパーなどの最先端技術で、イノシシの生肉や新メニューを企画。佐賀大学は、研究員と連携して、地産地消を推進する。22日の試食会では、しし肉料理を家庭へ普及させる「地産地消」につなげるため、地域住民を招いた試食会が開かれた。

中島幸敏

地域活性化へ「きばる塾」

城原地区住民、大学と協働。地産地消を目的に、1月1日の地産地消を立ち上げた。佐賀大学や西九州大学の学生も加わり、地域の活性化を目的に、1月1日の地産地消を立ち上げた。佐賀大学はまっくらの観点から課題解決の学びにつなげる。

■唐津市の蕨野の棚田で企業と連携した地域活性化及び環境保全活動を実施

【プロジェクトA/B関連】

平成29年6月5日(月) 佐賀新聞

150人 蕨野の棚田で田植え フォーク

唐津市相知町の風物教授59が指導し、機1列、1時間、稲を植え、昼食は棚田米のおにぎりや豚汁を味わった。1時間、稲を植え、昼食は棚田米のおにぎりや豚汁を味わった。



唐津市相知町の蕨野の棚田で田植え活動に参加した学生と地域住民たち

唐津市 相知

唐津市相知町の風物教授59が指導し、機1列、1時間、稲を植え、昼食は棚田米のおにぎりや豚汁を味わった。1時間、稲を植え、昼食は棚田米のおにぎりや豚汁を味わった。



唐津市相知町の蕨野の棚田で田植え活動に参加した学生と地域住民たち

■「フットパス」コースづくりのためのまち歩き

【プロジェクトD関連】

平成29年6月8日(木) 西日本新聞

小城市でフットパスコースを作っている佐賀大戸田ゼミの学生と住民



仲間たち

小城にフットパス導入

佐賀大経済学部戸田ゼミ(佐賀市)

3日、佐賀大経済学部の戸田順一郎准教授(41)は経済地理学IIのゼミ生と住民有志ら約20人が、小城市小城町の市街地を歩いた。

目的は「フットパス」のコース作り。フットパスはありのままの田園や街並みを散策し、地域の魅力を再発見する英国発祥の余暇活動で、名所旧跡を巡る観光ウォーキングとは一線を画す。戸田ゼミでは2015年から市や住民と協力し、取り組んできた。

当初は天山山系中腹の石体集落を巡るコースを試みたが、世帯数が少ないこともあり、街中を先行させた。昨年から月1回のペースで打ち合わせや街歩きを続けている。

「この木の実は食べられるのよ。今の時期はホタルが飛びます」。参加者は3グループに分かれて、中世の山城の千葉城跡や須賀神社沿いの5〜6キロを歩いた。

(20)は「2年のときから10回ほど来ました。歩いてみると、小城は水がきれい。道端の草花に心引かれます」。住民の福島是幸さん(78)は「小城に住んで45年。なかなか地域活動ができなかったけど、小城の歴史を知る良い機会になっていく」と楽しそうに話した。今後はコースの詳細を話めて、9月30日に昼食付きの有料ミニツアーを催すという。

(本山友彦)

■鍋島公民館でスキンケア教室開催

【地域志向教育研究経費事業関連】

平成29年6月30日(金) 佐賀新聞



夏のスキンケア教室

助産師を目指す佐賀大医学部看護学科の4年生が27日、佐賀市の鍋島公民館で赤ちゃんのスキンケア教室を開いた。12組の親子が参加し、デリケートな赤ちゃんの肌への正しい保湿の仕方、あせもや日焼け対策などを学んだ。

保湿剤使用のポイントとして、赤ちゃんの皮膚に適量のをせて優しく塗り広げるようアドバイス。液、クリームともに「皮膚が少しべたべたするくらいが目安」と助言した。日焼け止めは、SP

F(紫外線を防ぐ効果指標)の数値が生後6カ月から1歳までは10~20、1歳以上は20~30のものを選び、レジャーの際は30以上のものを使用



するよう説明した。

参加した佐賀市の瀬口鈴香さん(39)は「分かりやすい説明で堅苦しくなく、質問しやすかった。今使っている日焼け止めを見直したい」と話した。

教室は、子育てに必要な知識を父母らに身に付けてもらいながら、学生の教育技術の向上を図るのが目的で、今回で2回目。講師役を務めた牧本佳保里さんは「前回と比べると、お母さんたちの聞きたいことに寄り添った内容でアドバイスができた」と充実した様子で振り返った。(中島佑子)

学生たちから保湿クリームの塗り方を教えてもらいながら実践する参加者。佐賀市の鍋島公民館

■嬉野市のまちづくりを学生が提案

【プロジェクトF関連】

平成29年7月28日(金) 佐賀新聞

嬉野のまちづくり施策提案

佐大生60人アイデア続々

嬉野市
佐賀大生が嬉野市のまちづくりについて研究・考案した成果の発表会が23日、同市の和多屋別荘「ザ・コトクラブ」であった。都市工学専攻の三島伸雄教授が指導する学生約60人が、グループごとに考えた地域活性化に向けた企画6案と、整備が進む新幹線新駅周辺の建築デザイン4案を提示した。

市長ら審査 最優秀賞



模型を示しながら駅前に整備する新たな施設の案を説明する佐賀大大学院のグループ
「嬉野市の和多屋別荘ザコトクラブ」

轟の滝 季節限定レストラン 自転車とバス 駅前デザイン

発表したのは、三島教授が担当する科目「地域創成学Ⅲ」を履修する学部3年の37人と、大学院工学研究科の「都市デザイン論」を受講する修士1年の22人。5月に市内各所を訪問し、温泉街が抱える課題や茶業など基幹産業の現状を採ったほか、駅周辺開発で既に決まっている計画についても職員から説明を受けた。それを基として班ごとにアイデアをまとめた。

3年のグループからは、嬉野温泉が昨年、シニアに人気の温泉地第1位に選ばれたことを踏まえ、母の日限定の格安宿泊プランを作る案や、動画投稿サイト「YouTube」(ユーチューブ)で活躍する配信者につれしの茶を宣伝してもらうためスポンサーを募るなどの提案が上がった。

また修士1年の班からは、若年層の観光客を呼ぶため、市内の写真スポットに案内する施設を駅前に造る案などが出された。

各発表は谷口太一(市長)のほか、まちづくり会社「嬉野創生機構」の古田清悟社長、まちづくりコンサルタント会社「アンソル」(東京)の近藤才氏が審査。その結果、轟の滝に季節限定のレストランを開く案を提案した3年の班と、観光バスとレンタサイクルで市内外の観光地を結び、観光客が旅行内容を組み組みを整える案と、それに見合った駅前の建築を総合的にデザインした修士1年の班がそれぞれ最優秀に輝いた。

受賞案かどうかにかかわらず、市では実現可能性を検討した上で今後のまちづくりの参考にす。また本年度のみならず、今後も共同研究を続けていく予定だという。(志垣直哉)

広報関係

唐津市及び中山間地域における医学部合同夏期実習実施

【プロジェクトE関連】

平成29年8月19日(土) 佐賀新聞

医学生へき地で実習

25人、地域支える役割実感

佐賀県出身の医学生が18日までの3日間、夏休みを利用して県内のへき地医療の現場で実習をした。山間部や離島の診療所で働く医師の姿に接し、高齢化した地域の暮らしを支える役割

の大きさを実感した。

自治医大と佐賀大、長崎大の25人が、唐津市の離島や佐賀市三瀬村などで実習をした。学生の大半は、地方の医師不足解消のために設けられた制度を使って入学しており、卒業後の数年

間は佐賀県内で勤務する。「山間部班」の5人は18日、三瀬診療所で実際の診療を見学した。在勤9年目の西智子医師は学生に「村

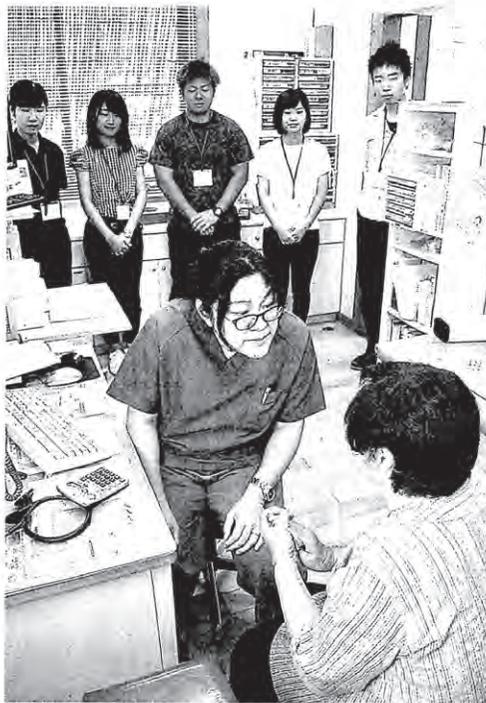
では3人に1人が高齢者だけの世帯で暮らしている。本人も気付いていない体調や生活の変化を、ここで敏感にキャッチすることが大切になる」と説明した。診察を受けていた患者の

女性は「西先生は問診でじ

っくり話を聞いてくれるので、とても助かる。皆さんも先生のようになって」とアドバイスをした。

佐賀大4年の荒巻芽生さん(22)は「へき地の医師は住民の健康だけでなく、暮らし全体を支える存在だということに改めて分かった」と話した。

実習は県と佐賀大が2011年から毎年実施している。(青木宏文)



三瀬診療所で診察の様子を見学する医学生(奥)
＝佐賀市三瀬村

嬉野温泉街を調査しリノベーション案を発表

【プロジェクトF 関連】

平成29年9月9日(土) 佐賀新聞



嬉野温泉商店街を舞台にした空き物件のリノベーション案を発表する学生(嬉野市公産)

建築学会セミナー

嬉野市

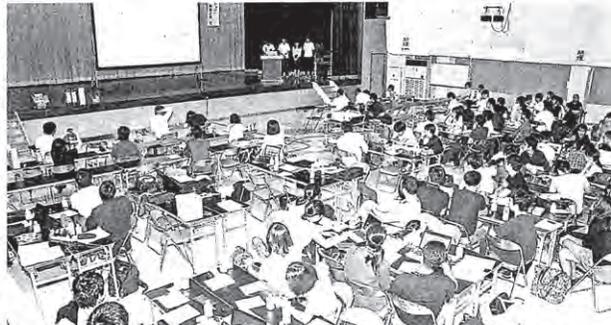
日本建築学会九州支部の夏季セミナーが6、7日、嬉野市であった。九州を中心とした7大学で建築や都市計画を学ぶ学生ら88人が、16組に分かれて嬉野温泉の商店街を現地調査し、空き家や空き店舗、空き地のリノベーション(改築)案を発表した。

16組がリノベ案発表 嬉野温泉街を調査

ゲストハウスやカフェ、ギャラリー

裏通り活用 新回遊も

参加したのは九州、熊本、エリヤン案を発表した。「エリヤン」は、大分、佐賀、九州産業、近畿の7大学。初日に現地調査し、2日目にその結果から考えたリノベーションの改築を中心に考えた



7大学から88人の学生が参加した日本建築学会九州支部の夏季セミナー(嬉野市公産)

つ、まち全体にどんな影響を与えられるかに至るまで案を練った。

2日目の発表で学生らは、旅行客に商店街を歩いてもらおうと、安価で宿泊できるゲストハウスや、本通りの裏道や近くを流れる塩田川(通称・嬉野川)沿いの雰囲気を生かした案などを発表。九州大のある班は、湯宿広場近くの長細い空き物件をゲストハウスやカフェ、ギャラリーなどに改修する案を発表。物件が裏通りにも通じることから、シーボルトの湯駐車場から湯宿広場に至る「新しい回遊ネットワーク」が生まれること効果を語っていた。

発表会は同市公会堂であり、谷口太一郎市長も審査員として参加。市職員や議員らも傍聴した。

(志垣直哉)

■小城市でのフットパスモニターツアー開催案内

【プロジェクトD関連】

平成29年9月20日(水) 佐賀新聞

30日、小城市

学生と住民でコース考案

小城市

まちの風景や
地元住民との交
渉を楽しむ「フットパスモニ
ターツアー」が30日、小城市
小城市で開かれる。コースは
大学生や地元住民が協力して
考案、映画のロケ地にもなっ
た須賀神社や村岡総本舗羊羹
資料館などを巡る。
ツアーは小城市と佐賀大学
経済学部の戸田順一郎ゼミが
主催。同日9時半から同町の
ゆめふらっと小城南口駐車場
で受け付ける。参加費は千円
6115へ。

まの風景や
地元住民との交
渉を楽しむ「フットパスモニ
ターツアー」が30日、小城市
小城市で開かれる。コースは
大学生や地元住民が協力して
考案、映画のロケ地にもなっ
た須賀神社や村岡総本舗羊羹
資料館などを巡る。
ツアーは小城市と佐賀大学
経済学部の戸田順一郎ゼミが
主催。同日9時半から同町の
ゆめふらっと小城南口駐車場
で受け付ける。参加費は千円
6115へ。

フットパス楽しもう

伊万里市

地元住民が手
づくりした散策

コースを楽しみながら歩くフ
ットパス体験会が10月1日、
伊万里市山代町の城・峰地区
で開かれる。

午前9時半に城公民館で受
け付ける。コースは2時間程
度で、伊万里湾を一望する棚
田の小道を行きながら、枝ぶ

縁側カフェでもてなし

来月1日、伊万里市

りがハート型のムクノキや洞
門などのビュースポットを訪
れる。途中に参加者をもてな
す「縁側カフェ」もある。
参加費は千円(保険料込
み)。飲み物や雨具は各自で
持参する。問い合わせは伊万
里フットパス研究会野崎さ
ん、電話090(5296)
3777へ。

■COC・COC+合同シンポジウム開催

【全体事業関連】

平成29年10月16日(月) 佐賀新聞

暮らし体験で若者定着狙う 地域担う人材育成でシンポ

地域を担う
人材の育成や

教育をテーマにしたシンポジウムが14日、佐賀大本庄キャンパスであった。岩手大の船場ひさお特任准教授が、地域での暮らしを体験

岩手大特任准教授 船場さん講演

するインターンシップを通じて、若者の地元定着につなげた取り組みを紹介。大学・短大生の地元就職率を高めるには、地域ぐるみで学生を受け入れることが大事と呼び掛けた。



地域を担う人材の育成に向け多様なインターンシップの事例を紹介する岩手大の船場ひさお特任准教授
|| 佐賀大本庄キャンパス

船場准教授は基調講演で、東日本大震災以降、地元に戻りたいと思う学生が増えている現状を示し、「岩手は中小企業が多く、アピールが不足している。首都圏の企業と人材を取り合ったら負けてしまう」と指摘した。その上で「インターンシップの対象者を3年生から1、2年生に早めてはどうか。職場体験だけ

多様なインターンシップ制紹介

でなく、地域主体で学生を受け入れる機会を設けることが大切」と訴えた。

船場准教授は具体例として、学生がインターンシップで岩泉町の農家と交流して、道の駅で販売する商品のポップ広告を作った事例を紹介。「町の産業全体を体験することで、町のファウンタリーにつながった。若者がそこで暮らすことを考えてみる機会にもなった」と話した。課題にも触れ「細やかな受け入れ態勢が必要で、いかに地元のコーディネートーターを育成していくかが大事」と指摘した。

シンポジウムには、地元企業や就職活動を控えた大学生ら約100人が出席した。
(尼寺宏輔)

■キクイモの栽培方法や調理法を紹介

【プロジェクトG関連】

平成29年11月25日(土) 西日本新聞

キクイモで健康づくり

九大農学研究院の清水さんら基山町で講演
スポーツとの相乗効果も解説



キクイモの効能などについて講演する清水邦義さん

九州大農学研究院の清水邦義さんは「キクイモを用いた新たな取り組み」と題して話し、キクイモに含まれるイヌリンが中性脂肪や血糖値を抑える働きがあると説明。「産地や収穫時期を工夫すれば、より健康にいいキクイモを開発でき、ブランド化や特色を出すことができ」と訴えた。同町ではスロージョギングの普及に力を入れており、清

「ぎやま健康虎の巻」と題し、地元で特産化を目指すキクイモの健康効果などを学ぶ講演会が18日、基山町民会館であり、町民約100人が聞き入った。

水さんはキクイモとの相乗効果で肥満抑制につながるかどうかも研究中で、ブランド化には「科学的根拠を確立することが鍵だ」と強調した。

その後、佐賀大農学部付属アグリ創生教育研究センター講師の松本雄一さんと、佐賀・福岡地域機能性農産物推進協議会の長根寿陽さんが「キクイモの魅力に迫る」をテーマに栽培方

法や調理法を紹介。日本スロージョギング協会認定指導員の佐藤紀子さんも「スロージョギングをもっと知ろう」と題して話した。

来場者にはキクイモのフレゼントあり、会場からは「糖尿病になった人が食べても大丈夫か」など活発な質問が出た。(須崎滝彦)

■佐賀市中心市街地を自転車で散策 ゲーム感覚の地域活性化イベント開催

【プロジェクトD関連】

平成29年11月22日(水) 佐賀新聞



課題の撮影スポットを見つけて写真を撮る吉田麗央さん(前)と牛嶋航太郎さん(後) 佐賀市松原周辺

同ミニゲームを中心とした約3^分四方の地域に、45カ所の撮影「賣っばい写真」「楽しそうな写真」スポットを設定。スポットを見つけ、SNSに投稿すると、難易度のアンケート機能で多くの票を集

【佐賀市】佐賀大学経済学部亀山嘉大教授のゼミ生13人が19日、佐賀市松原のバルーンミニゲーム周辺で佐賀の魅力SNSで発信してもらうイベント「フォトレジャーハント2017」を開いた。福岡や佐賀の学生や中国ペトナムの留学生など17人が自転車で街を巡り、主催側から指定された撮影スポットや「佐賀っばい写真」などのテーマに応じた写真約200点をインターネットに投稿し、秋のサイクリングを楽しんだ。

佐賀の魅力 SNSで発信



参加者がSNSに投稿した「佐賀っばい写真」

「佐賀は自転車道が整備されていて、安全に自転車イベントができる。佐賀の良さを発見して発信してもらいたい」と話す。参加者からのアンケート調査や原簿計算

めたチームにも点数が入る。居場所が分かるGPSアプリ、事務局側と連絡を取る無線アプリをスマホにインストールしたスタッフが同行し、17人の参加者は8チームに分かれて変わった建物や看板、銅像などを探して自転車を走らせた。

ゼミ生3年の立山愛梨さん(21)

17留學生ら 自転車探索、写真投稿

などを基に、このイベントを商業化する場合、参加費はいくらが妥当かなども調査する。

参加した同大理工学部3年の吉田麗央さん(21)は「周辺はよく知っていると思っていたが、改めて巡ると知らないものがたくさんあった」と話し、同3年の牛嶋航太郎さん(22)は「知っていた以上にえびす像がたくさんあった」と驚いていた。参加者の写真はツイッター、インスタグラムのハッシュタグ(検索用語)「#hotarea sure-saga」で検索できる。

(花木美美)



参加者がSNSに投稿した「楽しそうな写真」

佐賀大亀山ゼミが企画

「知っていた以上にえびす像がたくさんあった」と驚いていた。参加者の写真はツイッター、インスタグラムのハッシュタグ(検索用語)「#hotarea sure-saga」で検索できる。

鹿島市に伝わる伝承芸能「面浮立」体験

【地域志向教育研究経費事業関連】

平成29年12月18日(月) 佐賀新聞

鹿島「面浮立」で国際交流

佐賀市

面浮立の動きを取り入れた創作ダンス作りに向けた異文化交流授業がこのほど、佐賀市本庄町の佐賀大学であった。中国やカナダ、インドネシアからの留学生や日本人学生約30人が参加し、面浮立の概要や基本の動作を学んだ。

450年の歴史を持つ鹿島市の「母ヶ浦面浮立」を受け継ぐ、松本靖治さん(55)ら3人が講師に招かれた。松本さんは昭和初期に作られた最も古い面や、9月第

佐賀大 創作ダンス作り授業



鹿島市の「母ヶ浦面浮立」の説明を聞く留学生と日本人学生—佐賀市本庄町の佐賀大学

2日曜日の本番で着る衣装を紹介。佐賀大学芸術地域デザイン学部のステファニー・アン・ホートン准教授(異文化コミュニケーション)が撮影した映像なども交えながら、面浮立の動きを教えた。授業の狙いは世代間交流や伝承芸能を踏まえた新たなダンスづくり。1月8日にはこの日学んだ基本動作をベースに、鹿島市で留学生と日本人学生約50人が創作ダンス作りに取り組む。

インドネシアから来たウイディア・セプティヤティさん(21)らは「難しかったけど、動きがキョートだった」と感想を話した。

(川崎久美子)

■47年ぶりにムササビの生息を確認

【地域志向教育研究経費事業関連】

平成29年12月26日(火) 佐賀新聞

ムササビ県内初確認

唐津・八幡岳で佐大チーム

佐賀大学は25日、生きて
いるムササビを佐賀県内で

初めて確認したと発表し
た。研究チームが2015
年4月から8月にかけて八
幡岳(唐津市)に自動カメ



佐賀県内で初めて確認されたムササビ(赤い丸の中)。左はアライグマ=唐津市の八幡岳(佐賀大提供)



ラを設置し、動画の撮影に
成功した。福岡県西部や長
崎県を含む九州北西部で、
生息地が特定できる形でム
ササビが確認されたのは、
1968年に長崎県で見つ
かって以来47年ぶり。研究
チームは「佐賀では絶滅の
可能性も指摘されていた。
保護につながるように調査
を継続したい」と話す。

ムササビはリスの仲間
で体長約40センチ、尻尾が約30センチ。
本州や四国、九州に分布す
る日本固有種で、夜行性で
木の上などに生息する。

農学部の徳田誠准教授
(42)「システム生態学Ⅱ」
の研究室や佐賀自然史研究
会などが共同で、八幡岳の
標高450メートル付近に四つ
の巣箱とカメラを設置し

た。
15年8月14日午前4時40
分ごろ、アライグマが木に
よじ登る姿と、それに驚い
たのか、ムササビが落ちて
飛び跳ねるようにして逃げ
る様子を捉えた。大きさや
ムササビの特徴である前足
と後足の間の皮膜などから
特定した。

狩猟統計では1923年、
93年度に県内の猟師が9頭
を捕獲した記録があるが、
捕獲地は県外である可能性
が含まれていた。

12月末に発行される学術
誌に発表する。徳田准教授
は「個体群をどのように維
持しているのかや、特定外
来種のアライグマが在来の
生態系に及ぼす影響の把握
を今後の課題にしたい」と
述べた。(川崎久美子)

鹿島市で面浮立インスパイアードダンスフィットネスイベント開催

【地域志向教育研究経費事業関連】

平成30年1月12日（金） 佐賀新聞



面浮立でエアロビ創作 文化、世代超え80人交流

鹿島市

鹿島市の伝承などとしてフィットネスのリズムに合わせてアレンジを加え、ダンス作品を仕上げた。発起人の佐賀大芸術地域デザイン学部のステファニー・アン・ホートン准教授は「面浮立は装飾品が素晴らしく、振り付けも力がこもっていて魅了された。伝統の継承や発信に協力できれば」と意欲を語る。

佐賀大3年の尾方良輔さん（21）は「地域に根付く伝統について知ることができ、子どもたちと触れ合うこともできた。揺れる稲穂のような動きや農作業の様子を表現する」と感想を話した。

（中島幸毅）

■ムササビを県内で初確認 佐賀大学農学部 徳田 誠 准教授インタビュー

【地域志向教育研究経費事業関連】

平成30年1月13日(土) 佐賀新聞

生態系の課題 考える指標に

「生きているムササビを佐賀県内で初めて確認した。唐津市の八幡岳で2015年、佐賀自然史研究会と共同で取り組んだ撮影はもとも、国の天然記念物ヤマネが生息しているかどうかを調べる目的だった。」

「藤津郡太良町と鹿島市に広がる多良山系で前年にヤマネの生息を確認した。ほ乳類では県内唯一の天然記念物が県内の別の場所にも分布しているのか、八幡岳の樹木に巣箱と自動カメラを設置したけれど、映ったのはもっぱらネズミ。そこにムササビが映り込んだ。」

「専門は「システム生態学」。研究室の2代前の教員が名付けた学問で、生態系全体を俯瞰して考える。」

「生き物の数がどのような要因で制御され、生態系とそのバランスがどんな仕組みで成り立っているのかを研究している。今回の調査では、ムササビが」



九州北西部で生き延び、低い密度でも集団が維持されてきたことが分かった。九州山地など他の地域と生態を比較することで、密度が低い原因を明らかにできる。生態系が直面している課題を考えるための指標にもなる。」

「映像は、特定外来生物のアライグマがムササビを狙う様子も捉えていた。」

「アライグマは、ベットとして飼育されていた個体が逃げたり捨てられたりして日本に定着してしまっただ。在来種のタヌキやイノシシと異なり、木登りが得意。柵を使ったこれまでの獣害対策では対処できない面もあり、果樹など農作物の被害が深刻化してきている。」

「もともと日本にいた生物の個体数を減らす要因になっている可能性もある。実際にヤマネやムササビの調査時、アライグマが木に登ってきて巣箱に前足を突っ込む姿も見られた。」

「イノシシによる農作物被害が深刻化したり、県内にはいないといわれた2ホンジカが伊万里の採石場付近で確認されたり。里山で何が起きているだろう。」

「数の問題でいえば、新しく生まれる個体数よりも、死にすぎた方が少ない状態が続いている。木々を戻して活用していた生活様式の衰退や植林、間伐」

ムササビを県内で初確認した佐賀大農学部准教授

徳田 誠さん (42)



とくだ・まこと 1975年、島根県浜田市生まれ。2003年3月、九州大学大学院生物資源環境科学府博士課程修了。産業技術総合研究所や理化学研究所などの研究員を歴任。九州大学高等教育開発推進センター助教を経て、11年10月から佐賀大学農学部准教授。植物に「虫こぶ」を作る昆虫が元々の専門だが、佐賀ではほ乳類や魚類、鳥類の研究にも携わっている。



「未実施などで生態可能な環境は拡大している。一方で、食文化の変化で捕食される機会が減っている。温暖化で冬に死にすぎた割合も減少している。こうした複数の要因が絡んでいるのだろう。」

「経済活動や物流の拡大で、海の間こころからは強毒のヒアリが侵入してきた。侵入や定着した場所では、おとり餌と薬剤による防除が有効とされる。ただ、侵入前に薬剤をまくと、在来種が駆逐されてしまう恐れがある。アライバルがない状態になり、逆に外来種が定着しやすくなるから慎重な対策が必要だ。」

「生物多様性や生態系の保全は、在来種や希少生物のためだけに保つめるわけではないと考えている。」

「生態系サービス」という概念がある。自然界からの恩恵をサービスに例えた考え方で、その価値は人類の総生産の2倍に当たるという試算もある。生態系の保全は、私たちの豊かな生活を守ることもつながる。」

(聞き手 報道部デスク・井上恵)





地(知)の拠点整備事業 コミュニティ・キャンパス佐賀 アクティベーション・プロジェクト 5年間のあゆみ

平成25年度に地(知)の拠点整備事業の採択を受けてから、佐賀県、佐賀市、唐津市、小城市、嬉野市、鹿島市、吉野ヶ里町の1県6市1町と連携し、佐賀大学は7つ、西九州大学は5つのプロジェクトを推進してきました。これらの合計12事業プロジェクトのうち7事業は相互に連携して地域活動に取り組みました。

ここでは両大学が実施した5年間の活動の成果を振り返り紹介します。

地（知）の拠点整備事業

コミュニティ・キャンパス佐賀 アクティベーション・プロジェクトとは

文部科学省による「地（知）の拠点整備事業（COC:Center of Community事業）（以下、大学COC事業と略称）」は、大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としています。

この大学COC事業は、平成24年6月に策定された「大学改革実行プラン」における大学の機能強化—地域再生の核となる大学づくり:COC (Center of Community) 構想の推進—に取り組む大学を支援する事業で、平成25年度から開始されました。

大学COC事業は、これまでの大学における社会貢献の実績を踏まえ、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を推進するもので、特に、全ての学生が地域を志向する授業科目を履修することを条件とし、自治体等との連携による地域課題解決型の教育改革を推進することを重視しています。

佐賀大学と西九州大学は、平成25年度に「コミュ

ニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト」として、この大学COC事業に共同申請し採択されました。平成25年度は申請319件・採択52件、平成26年度は申請237件・採択25件で、計77件が採択されています。

申請・採択の多くが単独申請によるものですが、共同申請のなかでも国立大学法人と私立大学による共同申請は、本事業のみであり、全国的にも注目される事業としてスタートしました。なお、この大学COC事業は、平成27年度から佐賀大学が佐賀女子短期大学及び九州龍谷短期大学と連携して採択を受けた「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（以下、COC+と略称）」と連動して発展的に展開してきました。COC+事業は、平成28年度から西九州大学が参加校、西九州大学短期大学部が協力校として、平成29年度からは西九州大学短期大学部が参加校となり、佐賀県内の全大学及び短期大学と連携して事業の推進にあたっている。このCOC+は平成27年度に申請56件中42件が採択されています。



佐賀市でのまちなか
エクスカージョン



佐賀市東よか干潟での小学生
対象の環境教室



佐賀大学で開催する健康教室



小城市牛津小学校と連携した
フットバス事業



唐津市離島での合同夏期実習



鹿島市での環アジア国際
セミナー発表会



アグリセンターで実施した
動物介在療法



各地区公民館等で実施する
心身機能調査



神埼市内保育園における
食育指導



小城本町シャンシャン祭りに参加



機能性食品の開発における
試作実施



佐賀市でのバリアフリーマップ
作成のための現地調査

地(知)の拠点整備事業

コミュニティ・キャンパス佐賀 アクティベーションプロジェクトの目的

両大学は大学の重要なミッションに地域社会への貢献を掲げ、佐賀大学においては総合大学としての「佐賀の大学宣言」、西九州大学においては生活支援を科学し実践する大学としての「地域大学宣言」に基づく教育・研究・社会貢献を推進しています。本事業は、これらの両大学のシーズを活かし、佐賀県における多様な地域課題の解決に連携して取り組んできたものです。

佐賀大学と西九州大学の共同申請事業「コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト」における共通の目的・目標は、下記の通りです。

佐賀大学と西九州大学は、佐賀県全域をキャンパスと位置づけ、学生・教職員による実践的な教育・研究を通して、地(佐賀県域)と知(教育研究)のアクティベーション(活性化)を進めることで、佐賀の地における知の拠点としての機能を強化する。この目的を実現するため、両大学の教育・研究シーズを集約し、佐賀県域が抱える地域課題としての中心市街地・離島・山間地域の活性化、地域産業の振興とコミュニティの再生、地域医療・保健・福祉の向上、子どもの教育支援、高齢者の健康改善および地域環境の保全等の解決に向けた12の教育研究プロジェクトを推進する。これらのプロジェクトは、佐賀県、佐賀市、神崎市、唐津市、小城市、嬉野市、鹿島市、吉野ヶ里町の1県6市1町と連携・協力のうえ実施する。両大学とも地域での学修機会を増加させる教育カリキュラムの改革を行い、事業の実効性と持続性のある全学的なプロジェクトとする。

【出典:平成29年度 文部科学省提出「計画調書」(両大学共通)】

両大学における事業は、佐賀大学の7プロジェクト、西九州大学の5プロジェクトの合計12事業からなり、そのうち7事業が相互に連携して行う事業です。これらの事業は、佐賀県、佐賀市、唐津市、小城市、嬉野市、鹿島市、吉野ヶ里町の1県6市1町と連携して推進してきました。

5年間の活動の結果、佐賀大学においては「シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示している授業科目」が平成28年度末時点で188科目と増加し、西九州大学においては「シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示しているフィールド学修時間」の総時間数が目標を大きく上回る47,214時間となるなど、両大学共に大きな成果をあげることができました。さらに、平成25年度から平成30年1月までに実施した大学間連携事業は7事業となり、連携事業における活動延べ日数は124日、参加人数は2,639人となりました。両大学の異なる学部・学科が連携して地域課題に取り組むことで、農産物の生産から6次産業化までの支援や誰もが楽しめるライトアップイベントデザインなど、単独では難しい複合的な課題解決に寄与することができました。

本事業終了後も、引き続き地域での活動は推進していきます。



平成 27 年度九州・沖縄
シンポジウム IN 佐賀 2015



九州・沖縄COCインカレ
キャンプ

プロジェクト

A

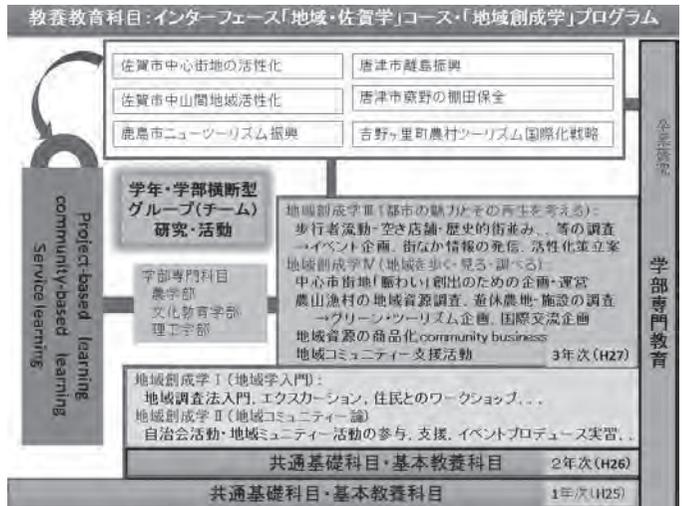
全学教育機構における教養教育インターフェース領域—地域創成学プログラム(4科目8単位)—を軸として、「地域の再生や活性化」に関わる地域課題解決型の教育プログラムを実施。学部専門教育への接続と社会人基礎力の養成による社会との接続を目指す。

学生参画による調査・交流・活動を通じた地域創成プログラム

■事業実施主体:全学教育機構

■実施責任者:実施代表者 五十嵐 勉(全学教育機構・教授)

■連携自治体:佐賀市、唐津市、鹿島市、嬉野市、神崎市、吉野ヶ里町



5年間のまとめ

学生参画による調査・交流・活動を通じた地域創成学プログラムは、教養教育のインターフェース「地域創成学Ⅰ・Ⅱ(2年次)、Ⅲ・Ⅳ(3年次)」から成る2年間のプログラムであるため、Ⅰ・Ⅱでの調査・交流(サービ斯拉ーニングを含む)から、Ⅲ・Ⅳでの企画の実戦(活動)までの一貫したPBL型授業の展開を実施してきた。これまで受講生40名で、街中の活性化、農村・離島の活性化、特産品開発支援、企業と大学のマッチングなどのプロジェクトをグループワークとして推進してきた。

佐賀市では、呉服元町のまちづくりサテライト「ゆつつら〜と館」を拠点に、街中の活性化事業として、高齢者の居場所づくりや街中の賑わい創出のイベントプロデュースなどに取り組んだ。中山間地域の活性化では、三瀬村・富士町の山間集落で

の遊休農地の活用、都市農村交流イベントの企画と実践に取り組んだ。唐津市では、相知町葦野集落での援農活動及びライトアップコンサート・都市農村交流を含むイベントプロデュース。また、肥前町向島では離島振興のための住民との交流、地域資源の調査研究等を2泊3日での宿泊型で実施した。鹿島市では、鹿島市ニューツーリズム推進協議会によるツーリズム振興である民泊型ツーリズムについての調査・モニターツアー等の企画を実施した。嬉野市では塩田町の豊ふあー夢の施設を活用した交流事業の企画およびエゴマの特産化を支援した。吉野ヶ里町では、竹林整備を含む都市農村交流を実施。また、今年度からは神崎市において、歴史的資源を活用した地域づくりに取り組むなど、県内の多くの地域で様々な取り組みを行った。



相知町葦野集落での援農活動



豊ふあー夢でのエゴマの特産化支援



唐津市肥前町向島での合宿演習

■5年間の成果と課題

本プログラムは、2年間の教養教育プログラム及び関連する学部専門教育を通して、学生の専門性と当事者意識を段階的に向上にさせることで、学生の学びと成長（社会人基礎力）と地域への貢献を促進することを目的としている（図1参照）。

NPOを含む多様なステークホルダーと連携し、2年次は学生が地域を理解し、地域住民（行政・NPOを含む）が学生を理解するための課題発見・共有のためのサービスマーケティングを重視し、3年次に課題解決のためのPBL型実習・演習を重視したプログラムを実施してきた。



【図1】



NPOと連携した世代間交流の場・ユニバーサルファームづくり



ゆっつら〜と館を拠点とした学生主催のワークショップ開催

その結果、学生は佐賀大学学士力に掲げる社会への参画力・問題解決能力などの向上に繋がり（科目のGPA、Progテストでのジェネリックスキル、ルーブリックのレベル4等の結果）、地域では地元住民やNPO等による自律的な事業の推進に必要な人材の育成に貢献している（住民アンケート結果等）。

このような学生参画による「調査―交流―活動」の一貫したプログラムは、本学におけるインターフェース「地域創成学」プログラムにおける地域志向教育として、今後も対象地域や地域課題を拡大しながら継続していく。

🗣️ 学生の声

私は、地域創成学の受講を通して、棚田の保全活動支援、農業特産品開発、町づくり、農家民宿の活性化などに2年間、関わってきました。これらは全てグループワークによるもの



佐賀大学農学部3年 山田 侑果

で、メンバー同士の協力や地域の皆さんとの連携など、多くの困難を経験しましたが、地域の住民やNPOの方々に、「佐大生が関わってくれてありがたい」と、よく言われたことが一番嬉しかったことです。私自身の成長につながっていることは自覚できますが、地域への貢献がどこまで果たせたのかは自信がありません。プロジェクトは、後輩たちが引き続いて行う予定なので、継続的に地域と関わることで、それなりの成果が見えるのではないかと期待しています。機会があれば、私もメンターとして後輩のグループワークを支援したいと思います。



期待しています。機会があれば、私もメンターとして後輩のグループワークを支援したいと思います。

🗣️ 地域の声

佐大生の皆さんには、いつもお世話になっています。棚田の実習田での援農活動に加え、COC事業ではアクアソーシャルフェスのイベント、棚田コンサートの企画と運営など、高齢化が進んでいる蕨野の村には、



NPO法人 蕨野の棚田を守ろう会 理事長 川原 増雄

大変、ありがたいことです。特に、棚田コンサートは村人はもちろん、多くの市民が毎年、楽しみにしているイベントで、竹灯籠の舞台作り、演者との交渉、当日の運営など、NPO事業の大事なイベントは、佐賀大あつてのもので、今後の活動の継続にもご支援を頂きたいと思っています。村の公民館での学生さんとの交流も楽しいことです。村の活性化に学生さんと、もっと相談したりする機会を増やしな



がら、今後も継続的な支援をお願いします。

プロジェクト

B

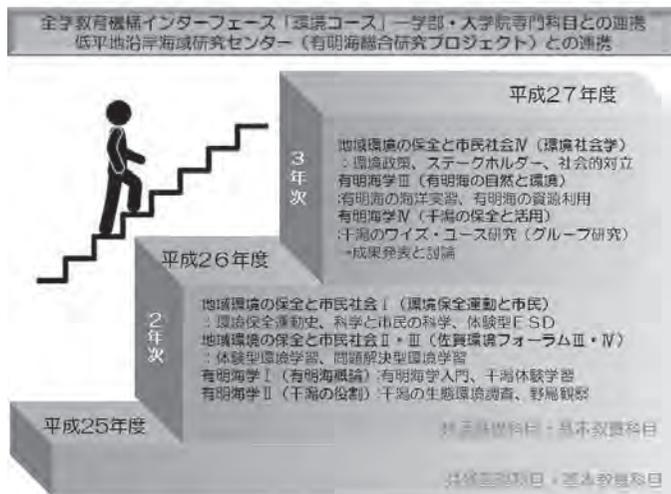
「地域資源の保全と活用」「有明海の環境保全と活用」を目的に、全学教育機構における教養教育のインターフェース科目「有明海学」プログラム、及び「地域環境の保全と市民社会」プログラムを軸とした、主体的な環境学習プログラムを実施・構築する。

学生参画による調査・対話・活動を通じた環境保全プログラム

■事業実施主体:全学教育機構

■実施責任者:実施代表者 郡山 益実(全学教育機構・准教授)

■連携自治体:佐賀県、佐賀市、鹿島市



■5年間のまとめ

インターフェース科目「有明海学」プログラムと「地域環境の保全と市民社会」プログラムを中心に、地域志向型教育を実践した。「有明海学」プログラムでは、有明海・干潟の体験学習、フィールド実習、観察会、グループ研究を行い、地域の環境保全とワイスユースについて学生の主体的学びを促す体系的なカリキュラムを実践した。また、「地域環境の保全と市民社会」プログラムでは、AQUA SOCIAL FES!! など地域や企業と連携した環境保全イベントへの参加や、金立公園活用提案プロジェクトなど、地域資源の保全と活用について実践的な教育を実施した。

社会貢献は、主に地元小中学生の干潟観察会の現地指導、東よか干潟ラムサールクラブの活動の補助、東よか干潟と鹿島干潟におけるイベントのボランティアやスタッフとして多数の学生が参加した。さ

らに、社会貢献活動の一環として、有明海や干潟の環境と生態系に関する講演及び養成講座を実施し、地域住民の環境保全に関する理解と関心を深める環境啓発を行った。

調査研究に関しては、有明海奥部の底質調査や東よか干潟のマクロベントス群集の広域調査など地域課題に密着した研究を実施した。それらの研究結果は、関連学会及び国際シンポジウムへの発表、卒業論文及び修士論文、論文などに取りまとめると同時に、佐賀市の東よか干潟環境保全及びワイスユース計画(仮称)の策定に大きく寄与した。また、平成29年度には佐賀市と連携した干潟の保全事業への取り組みとして、年間を通じたシチメンソウの植生環境モニタリングと東よか干潟の広域的なベントス調査を実施した。



平成26年度AQUA SOCIAL FES.開催風景



東よか干潟における観察会



有明海での海洋実習

■5年間の成果と課題

本事業において、「有明海学」プログラムと「地域環境の保全と市民社会」プログラムは2期生を輩出した（有明海学74名、地域環境の保全と市民社会32名）。プロジェクトBの中核である「有明海学」プログラムでは、有明海学概説（有明海学Ⅰ）、干潟と有明海の環境に関する座学とフィールド実習（有明海学Ⅱ・Ⅲ）、グループ研究（有明海学Ⅳ）を体系的・順次的に行うことにより、地域資源の環境保全と活用に関する主体的な学生の学びと実践的な環境教育を図った。本プログラムを通して、2期生共に有明海学Ⅰから有明海学Ⅳにおいて科目GPAの上昇が見られた（1期生：有明海学Ⅰの科目GPA3.1→、有明海学Ⅳの科目GPA4.7、2期生：有明海学Ⅰの科目GPA2.1→、有明海学Ⅳの科目GPA3.1）。このことから、学生の地域環境に対して主体的に取り組むことができる知識と応用力の修得に一定の成果が得られたと考えられる。

社会貢献活動の一環で学生の実践的な環境学習の場として、地元小中学生の干潟観察会や地域イベントのスタッフ補助に延べ141名の学生が参加した。本事業の初年度は、地域ニーズの把握や汲み上げに注力していたため、参加学生数は5名と少なかったが、最終年度では、佐賀市との連携が計られ、参加学生数は延べ40名に増加した。このことから、地域と連携した環境教育への学生参画については一定の成果が得ら

れたと考えられる。しかし、本事業で地域の環境学習に参加した学生の6割は、農学部ゼミ生である。これは、小中学生の環境学習は通常平日に行われるため、ゼミ生以外の学生の講義日程を調整することが非常に困難なためである。今後、継続的な学生による地域貢献活動の確保と、より多様な学生参画の裾野を広げるには、大学—地域間で活動時間のマネジメントをするサポート組織が必要であろう。

地域志向型研究として、有明海奥部の底質調査、東よか干潟のマクロベントス群集の広域調査、シチメンソウの植生環境モニタリングなどを実施した。それらの研究成果は、関連学会の発表（9件）、国際シンポジウムの発表（2件）、卒業研究（10件）及び修士研究（1件）、論文（13編）に取りまとめ、関連学会（農業農村工学会）の発表では、学生が優秀ポスター賞を3件、卒業研究発表ではプレゼンテーション賞（農学部生物環境科学科生物環境保全学コース対象）を1件受賞するなど、高い評価を受けた。また、上述した研究成果は、佐賀市の東よか干潟環境保全及びワイスユース計画（仮称）を策定する上で非常に有益な知見となり、今後の東よか干潟の環境保全事業に展開される予定である。これらのことから、地域課題に密着した研究の推進は十分達成したと考えられる。

🗣️ 学生の声

私は、地元の小中学生への干潟の環境学習やラムサール登録1周年記念式典などのイベントに参加しました。干潟の環境学習では、小中学生のベントス調査の手伝いや干潟の泥環境について話をしました。記念式典では、ブース内容の企画・立案、当日のブース運営を研究室全員で取り組み、有明海や干潟の環境を一般の方に分かりやすいように、クイズ形式でポスターにまとめました。また、修士論文でも“東よか干潟のマクロベントス群集とその生息環境について” 東よか干潟をフィールドに、佐賀市と連携した調査研究を行っています。



佐賀大学農学研究科1年
前崎 桜樹

干潟の環境学習などの参加を通して、地域の方や



子どもたちに干潟のことを分かりやすく伝えようと工夫したことにより、自分自身の研究テーマの理解も深まりました。

🗣️ 地域の声

「東よか干潟」での東与賀小・中学校の自然観察会では、多くの大学生が参加していただいたため、子どもたちは有明海の環境のすばらしさや生きものの生活の様子を詳しく識（し）ったり、大学生の生きものに接する態度にふれ知的好奇心を高めることができ、「ムツゴロウの巣もたくさんありました。クロツラヘラサギとかダイシャクシギは、くちばしがすごく長くてくちばしを干潟につっこんでカニや餌をとって食べることも知りました。ほかにもいろいろな種類が知れてすごくよかったです。」などと感想文を書いています。



佐賀自然史研究会
副島 和則

東よか干潟の養成ガイド講座では地域住民（町づく



り協議会の人たち）は、有明海や干潟の生物（シチメンソウの生育状況など）について詳しく知る（識る）ことができました。

プロジェクト

C

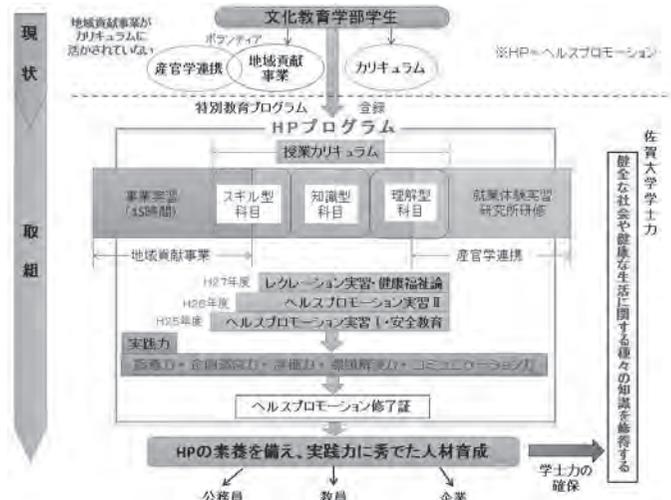
「地域の高齢者の健康増進と子どもの体力向上」を目的に、文化教育学部における実践力育成プロジェクトとして実施。地域の高齢者や子供との関わりを通して、学生の「指導力」「企画運営力」「課題解決力」「コミュニケーション力」の育成を目指す。

地域の高齢者及び子どものヘルスプロモーション促進に向けた学生の実践力育成プロジェクト

■事業実施主体:文化教育学部

■実施責任者:実施代表者 井上伸一(教育学部・教授)

■連携自治体:連携自治体 佐賀県、佐賀市、嬉野市、鹿島市



■5年間のまとめ

当該プロジェクトは、健康教室を佐賀市、鹿島市、嬉野市で開催し、中高齢者の健康支援に貢献する事業を展開している。佐賀市の教室では300名を超える地域の方々が、また嬉野市、鹿島市でも80名、130名程度の方が年間を通して教室に参加し、5年間では相当数の中高齢者が参加する大規模な地域貢献事業に発展した。教室では健康チェック、ストレッチ、筋カトレーニング、リズムダンス、エクササイズウォーキング、ミニ講義等、さまざまな身体トレーニングとともに、健康や生活に関する知識を提供。また、3ヶ月毎に筋力、柔軟性、バランス能力等の体力測定や、骨密度や体脂肪率等の体組成測定を実施し、教室の効果を検証している。

発達障害児を対象とした運動教室では、20名程度の子どもたちが月に2回の教室に参加している。ボランティアの学生とともにドッジボールやバドミントン、ニュースポーツなどいろいろなスポーツに取り組み、楽しみながら運動能力の発達を促し、コミュニケーション能力を身につけることを目的として活動している。



佐賀大学健康教室全体写真



学生がストレッチを指導している様子



参加者さんと学生との交流の様子

■5年間の成果と課題

地域貢献事業としての成果と課題

中高齢者を対象とした健康教室では、3つの事業を合わせると年間600名の方が週1回の教室に参加された。5年間では3,000名近い方が参加した大規模な地域貢献事業となった。大学の専門家による運動指導が受けられること、高度な測定機器を用いた種々の測定が受けられることなどが好評いただいた理由に挙げられるが、どの教室でも「学生との交流が非常に楽しかった」という評価を得ていて、そのことが非常に多くの方々に参加いただいた理由だと感じている。普段交流する機会のない世代の学生たちからトレーニングを指導してもらったり、一緒にレクリエーションをする機会を得ることができたことが、地域の方がこの教室へ足を運ばせる最も大きな魅力であったことが、アンケート調査から明らかとなっている。同様のアンケートから、「体育館が狭くてきたない」「駐車場の料金をなぜ徴収するようになったのか」等の施設面に対する苦情も多く寄せられてい

る。施設がもっと充実すれば、さらに事業を拡大することも可能であるため、スポーツ施設の整備が今後の課題として挙げられる。

学生教育としての成果と課題

佐賀大学の健康教室では1班10名程度のグループを2、3名の学生で担当して、健康チェック、問診をおこなった後、ストレッチ、筋力トレーニング、レクリエーションを学生指導の下、実施した。学生への事前指導で、それらの指導方法については周知していたが、実際指導する場面ではかなり緊張してうまく指導できない場面もしばしば見受けられた。しかし回を重ねるごとにコミュニケーションもうまく取れるようになり、学生自身が教室に参加することを楽しめるほど、成長していった。そういう雰囲気教室が包まれていたことが、当該事業が成功した最大の理由であると思われる。学生にとっても座学では学ぶことのできない社会人としての力を身につけることのできる貴重な経験を積むことができたのではないかなと思う。

🗣️ 学生の声

ヘルスプロモーション実習では、強化班を担当しました。強化班の皆さんが強度の高い筋力トレーニングを妥協することなくこなしていく姿をみてたいへん驚き感動しました。また皆さん普段から運動を継続していらして、健康に対する意識の高さを実感しました。この授業を通してストレッチや筋力トレーニングのメニューだけでなく、高齢者の方との接し方や指導の仕方も実践的に学ぶことができました。この貴重な経験を今後の生活で活かしていくとともに、私自身も健康に対して高い意識を持とうと思います。



佐賀大学
文化教育学部4年
堀口 紗綾



🗣️ 地域の声

この教室は学生さんたちがリーダーとなり、私たちにストレッチや筋力トレーニングを指導したり、楽しいレクを企画してくれたりしました。また先生によるリズムダンスもとても魅力的なものでした。グループのメンバーや学生さんと食事に行ったりして、友人の輪も拡げることができました。なによりも素晴らしいことは学生さんたちと触れ合う中で彼らから多くのエネルギーをもらっていること、人生経験豊富な私たちから、学生さんはたくさんの知恵をもらったことと思います。若い人たちと高齢者といっしょに汗を流せることが、佐賀大学健康教室の最高の魅力だと私は思っています。



佐賀大学健康教室受講生
中島 雅博



プロジェクト
D

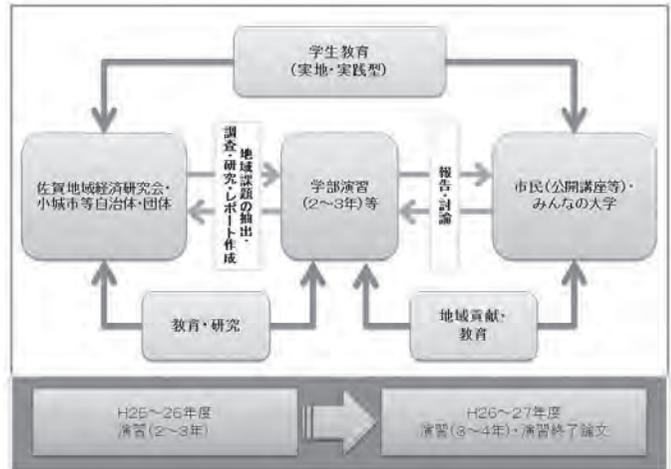
学生自身が、地域の経済問題を調査して課題を発見し、対策の検討とまとめを行います。地域が抱える課題への対策は、佐賀県下の市部における地域経済政策立案主体からなる「佐賀地域経済研究会」の協力を得ながら行い、その成果は大学の公開講座等で発表して地域に還元します。

地域との連携による地域経済政策に関わる 学生主体の調査研究と成果の地域社会への還元

■事業実施主体:経済学部

■実施責任者:実施代表者 戸田 順一郎(経済学部・准教授)

■連携自治体:佐賀県(佐賀地域経済研究会)、小城市、唐津市、佐賀市



■5年間のまとめ

本プロジェクトでは、小城市、唐津市、佐賀市との連携のもと、経済学部の各ゼミを中心に地域の抱える課題をテーマとした調査研究を実施してきた。調査研究は、地域住民、関係企業・団体、行政機関の協力のもと、フィールドとなる各地域に何度も足を運び行ってきた。これまでに取り組んできたテーマは以下の通りである。

- 「地域防災と自治体」に関する調査研究(防災計画とまちづくり)[平成26-28年度](唐津市、富田ゼミ)
- 防災計画および災害避難計画の現状と課題に関する調査研究[平成26-27年度](唐津市、榎澤ゼミ)
- ICT非利用者をターゲットとした実態把握と改善

策の検討[平成27-28年度](唐津市、羽石ゼミ)

- 買い物困難者支援対策におけるICT利活用についての調査研究[平成29年度](唐津市、羽石ゼミ)
- 消費者の交通手段と地域資源(文化創造産業)の嗜好に基づく地域活性化に関する調査研究[平成27-29年度](佐賀市、亀山ゼミ)
- 地域公共交通に関する調査研究[平成25年度](小城市、戸田ゼミ)
- 合併自治体における公共施設の利活用と地域活性化に関する調査研究[平成26年度](小城市、戸田ゼミ)
- 地域資源を活用した市民の健康増進と地域活性化のための方策に関する調査研究[平成27-29年度](小城市、戸田ゼミ)



「地域防災と自治体」に関する調査研究



消費者の交通手段と地域資源(文化創造産業)の嗜好に基づく地域活性化に関する調査研究



買い物困難者支援対策におけるICT利活用についての調査研究

■5年間の成果と課題

本プロジェクトでは、経済学部各ゼミを中心に、地域との連携による地域経済政策に関わる学生主体の調査研究を実施してきた。それらを通じて得られた教育上の成果として以下の3つを挙げる。

第1は、現場で学ぶことによる教育上の成果である。課題が生じている現場に足を運び、自らの目で状況を捉え、自らの頭で考えることは、大学の中ではできない貴重な学びの機会となった。買い物困難者支援に関する調査では、現場でユーザーの様子を観察し、直接生の声を聴くことにより、研究室や文献研究ではわからないことを実感できた。地域防災に関する調査では、当該自治体が抱えている問題について話を聞くことに加え、宮城・福島両県を訪ね、被災者の生活の聞き取り調査を行うことで深い理解を得ることができた。またフットパスコースづくりの取り組みでは、住民・企業・団体、行政との協働により進める過程において地域の方々からも多くのことを教えていただいた。

第2は、生の素材をテーマにしたことによる教育上の成果である。本プロジェクトでは、協力自治体や関係企業・団体の担当者等との協議により、地域が抱えている課題、生じている問題などを反映したテーマ設定を行った。これにより学生は興味をもって調査研究を遂行することができ、またこうした取り組みを通じて学生の地域、社会への関心が高まることにもつながった。その一方、地域政策の現場

にたずさわるなかで、地域が抱える問題の複雑さを理解し、現実の課題を解決させることの難しさ、まちづくりをすすめることの困難さも学ぶこともできた。こうした経験をしたことは、学生が将来、地域、社会における課題解決に自ら携わる人材となることに繋がるのではないかと期待する。

第3は、様々な経験を通じた教育上の成果である。地域での聞き取り調査やアンケート調査を対象者や協力者への接し方に苦労しながらも遂行できたこと、地域において実際の活動の運営に、企画の立案、交渉・調整、宣伝・広報など様々な段階で携わることができたこと、まちづくりの現場に入り、異なる世代や立場の人たちとのコミュニケーションを図りながらすすめる大切さを学んだこと、地域住民、関係企業や自治体職員、他大学の学生といった人々を前にプレゼンテーションやディスカッションを行ったことなどの様々な経験をできたことは、社会に出てから必要とされる重要な能力を養う機会となった。

これまで取り組みは、学生が地域の課題解決に関わるという点では、直接的な成果は十分ではなかったかもしれない。しかしながら地域が学生の教育、成長に関わるという点では、学生は地域から多くを学ばせていただき大きな成果をあげたと評価できる。このような地域での学びの機会は引き続き大切にしていきたい。

◎学生の声

フットパスでは、ワークショップの計画や住民への連絡、昼食の手配等を行いました。また、ワークショップ中での住民とのコミュニケーションや、活動への協力や理解を得るためのプレゼンを行いました。その中で、社会に出たときにも必要なスキルやマナー、また、人前で話すことや初対面の方とでも気兼ねなく話すこと、分かりやすい言葉で伝えることなどの社交性やコミュニケーション力を身につけることができました。



佐賀大学経済学部3年
安部 太貴



フットパスはこれからも続けていくので、培ってきたスキルをさらに磨きあげながら活用していきたいと思います。

◎地域の声

「フットパスを簡単に言えば『ぶら散歩』です」と戸田ゼミは、小城市、商工会議所、観光ボランティア、区長会、羊羹会社社長、住民など様々な方に説明・許可・協力依頼を繰り返してきました。授業の一環であり



小城市企画政策課
今村 真悟

ながら土日と返上した毎月1回の住民との意見交換会では、ゼミで話し合った結果を住民に伝えることで熱量が伝わり、自発的に取り組む住民意識の変化につながりました。地域に大学生が入り、フットパスを行うことは、地域に



長年住んでいる住民が発見できない気づきを促し、地域（行政・住民）と大学の双方の成長を実感しました。

プロジェクト
E

離島や山間部で行う地域医療実習や佐賀県内の基幹病院実習を基盤として、地域医療に関する教育プログラムを充実させ、地域の文化や伝統に直に触れる機会を持つことによる学生の地域貢献意欲の涵養等を行い、地域での保健医療充実のための人材を育成する。

離島・山間地域における保健医療とQOL向上のための人材育成プロジェクト

■事業実施主体:医学部地域医療支援学講座(寄付講座)、医学部社会医学講座予防医学分野

■実施責任者:実施代表者 杉岡 隆(医学部・教授)

■連携自治体:佐賀県、佐賀市、唐津市



■5年間のまとめ

夏期地域医療実習では、佐賀大学医学部の地域枠・一般入学生と、自治医科大学および長崎大学医学部の佐賀県枠入学生と合同で実習に参加することで、将来ともに佐賀県の医療を担う学生同士の交流が深まった。

当初、本実習は離島医療が中心だったが、参加学生の希望を取り入れ、県内の山間部過疎地域での実習や、佐賀県における救急災害医療、がん診療など県全体の医療も学べるよう毎年実習テーマを掲げ、関連のある第一線の施設での実習を行うなど内容の拡充をはかった。また本実習では、学生たちが自身で企画・作成し地域住民に向けて開催する健康講話を実施し、医療者として住民に健康についての情報をわかりやすく伝えるための工夫や、大学で学んだ医学知識に加え、必要な情報を適切に収

集できるようにするよう教員でサポートをした。

医学科1年生の地域枠入学生を対象にした佐賀県内基幹病院・中核病院実習では、臨床現場を早期に体験する機会をつくった。地域で必要とされている医療スキルやニーズを体感するとともに各医療機関の指導医とのつながりも形成することができた。

地域医療セミナーでは、佐賀県で行う医療や将来佐賀で働く際のキャリア形成について、また、健康教育・介護・福祉など様々な問題について、特に学生を中心に共有する機会を設けた。

医学科6年生を対象とした地域医療実習では、実習先の手配や日程調整を行い、準備実習前のオリエンテーションと振り返りで学生と関わり実習の充実をはかった。学生は地域のプライマリ・ケアの現場で必要とされるニーズを体感することができた。



夏期地域実習の集合写真



診察室の風景



健康講話の様子

■5年間の成果と課題

夏期地域医療実習では、将来佐賀県内の離島や山間部で医療を行うために必要な医療者としてのスキルと地域における課題、ニーズを知ることができた。学生自ら地域住民にヘルスプロモーション(健康講話)を行うことで、医療情報を伝えることの難しさとやりがいについて体験することができた。また、県内の救急災害医療・母子周産期医療・がん診療の現状について学び、佐賀県内の医療資源を把握し、医療者や行政関係者の姿勢や環境整備、佐賀県内の地域課題について具体的に学習できた。

医学科1年生対象の佐賀県内基幹病院・中核病院実習では、早期に地域医療に必要なスキルと地域のニーズに触れ、地域の医療者や住民からの医学生への期待を感じるにより、今後の学習のモチベーションを向上させ、学習目標を明確に立てることができた。

地域医療セミナーでは、佐賀県で行う医療や将来佐賀で働く際のキャリア形成、また健康教育・介護・福祉など様々な問題について、講義と講師と学生のディスカッションを通して、学生自らで考えることができる力を養うことができた。

医学生の学びの成果を明らかにするため、夏期実習に参加した同一医学生に対し、低学年時と高学年時に提出した自由記載のレポートを対象とし、テ

キストマイニングの手法を用いて分析した。形態素解析でレポートに使用された頻出語をリストアップし、地域医療実習の学びに関する語について、低・高学年時で差がみられた語に注目し、類義語はまとめながら、集計した。さらに、ワードクラウド(出現した品詞の頻度が大きいほど、字が大きく中心に来るよう設定し、ランダムに配置し記載することで、形態素解析の結果を視覚的に外観する手法)による学びの可視化を試みた。低学年時には、感想にとどまる記載が多く、自己に関する表現が多いことや地域に関する記載が漠然としていることが、マイニングできた。高学年になると、理解の表現や意欲・意思の記載がみられるようになり、地域の問題を具体的に言及し、使用する医学用語は増え、地域の表現についてもより詳細な記載が増えていることがマイニングできた。

以上より、実習参加を通して学年が上がるにつれ、地域医療に対する理解・学びが深まっていることが明らかになった。

また、医学生の性別・志向や実習の内容(実習先・期間・体験の有無など)により、学び得るものは少しずつ異なることがわかった。今後さらに解析を進め、新たな知見について、情報発信していく予定である。

🗣️ 学生の声

私は3回にわたり夏期実習に参加しました。地域医療実習では、島民に信頼され、健康状態・家族背景・生活環境を考慮し、内地の病院と連携し診療する医師の姿と、へき地でも良い



佐賀大学医学部4年
小金丸 三璃

医療を提供しようとする医師の想いに感銘し、地域住民との関わり方や島民の健康を見守る姿勢を学びました。テーマ別実習では、各地域の医療機関がそれぞれ異なる役割を担っていると知りました。自治医大・長崎大の学生さんとも出会い、将来佐賀の医療を担う仲間ができてよかったです。多くの先生・地域の皆さんの協力で勉強できていると感じました。実習に関わる全ての方に心より感謝申し上げます。



🗣️ 地域の声

地域医療では、患者さんの疾患だけでなく、人としての全体を捉える「全人的医療」が求められます。へき地は、医療と地域の関連性が強く、よりその傾向が強いと言えるでしょう。へき地医療に携わると、患者さんをはじめとした、地域との交流と通じて、医師としてだけでなく人としても成長できます。今回の実習で得た経験は、きっと将来役立つと思います。



唐津市加唐島診療所
所長 大林 航

島には医療を必要とする高齢者が多いです。地域の健康を守る存在として、診療所がいかに頼りにされているかよく分かってもらえたと思います。



加唐島区長
徳村 敏勇樹

プロジェクト

F

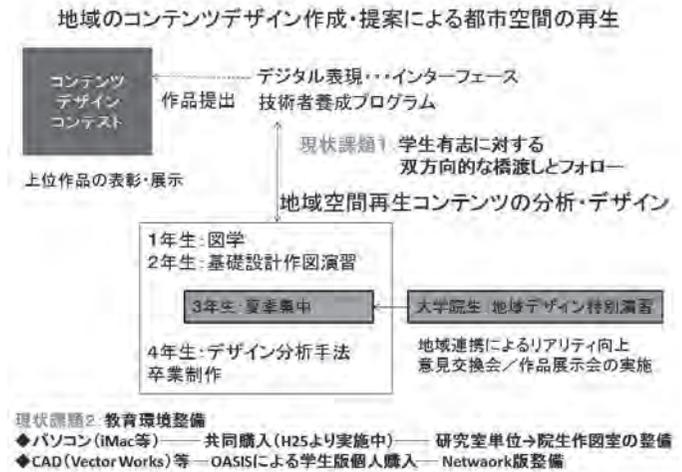
「まちなか再生」「地域性豊かな空間創出」に向けて、地域空間再生デザインに資することができる人材輩出が目的。都市工学科の建築・都市デザイン関連科目を軸に、対象地の空間的特質や課題を捉えた計画設計、及びデジタルデザインへの展開ができる人材を育成している。

地域空間再生デザイン・プログラム

■事業実施主体:工学系研究科

■実施責任者:実施代表者 三島 伸雄(工学系研究科・教授)

■連携自治体:佐賀市、唐津市、嬉野市、鹿島市、小城市



■5年間のまとめ

都市工学の建築・都市デザインを学ぶ学生を中心に、地域課題を直視した計画・設計に関わる教育を展開した。

図学では、都市工学科の1年生全員を対象に、佐賀市職員から佐賀市街中再生の講義を受けた後、シェアハウス「まちの間」をスケッチし、建築・都市デザインの基礎知識・技術の習得を図った。2、3年生が対象の授業では、建築都市デザインの講義と演習において地域を対象とする計画・設計課題に取り組んだ。特に3年前学期は、「門前に住む」をテーマに佐賀市佐賀神社前の集合住宅を提案し、地域の人たちへの発表会を行ない意見交換した。3年生後学期のユニット演習においても、地域に根ざす小学校の設計提案に取り組み、公開での発表会を行なった。その際、世界的に活躍する建築家から、地域に根ざすことの意義や建築のあ

り方について講義を受けた。さらに4年生を対象に、環アジア国際セミナーを開催し、タイや韓国など5か国の学生を受け入れて、県内の歴史的町並み(鹿島市肥前浜宿)に宿泊しながら、その地域の調査研究・設計提案を行った。また、卒業研究では、鹿島市、嬉野市、小城市、唐津市などを対象に、地域の詳細な分析や制作提案に取り組んだ。

地域創成学Ⅲでは、全学の3年生を対象に、小城市や嬉野市の調査分析、それを踏まえた企画提案を行い、地域住民との交流も行った。また、西九州大学との連携授業として、特別講義(まちなか再生プロジェクト)を立ち上げ、サガ・ライトファンタジーに参加しながら、地域課題の学習並びにLED設置に関わるルール(道路法)や技術について学び、実践した。



環アジア国際セミナー:提案に向けた議論



図学:まちなかでのスケッチ



地域創成学Ⅲ:嬉野の再生に向けた調査

■5年間の成果と課題

建築・都市デザインの専門分野の学生については、地域課題に関心を持つよう、1年生から地域での学習機会を設けたため、地域課題を踏まえた提案に関しての関心度合いが増した。

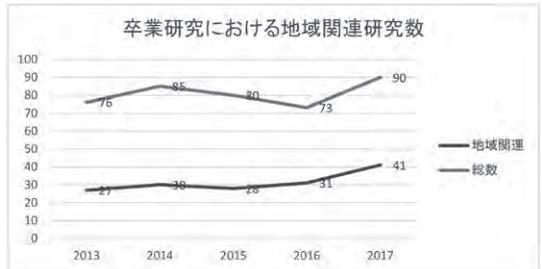
1年生の図学では、佐賀市の街中再生事業の取り組みを知ることができ、都市工学を学ぶ初学者として、良い学習機会になっている。また、ここで街中のスケッチに取り組み、注視してものを見る機会を与えることが、その後の地域への関心を持つ動機になっている。設計演習では、学内での発表後に地域での発表会を行なうため、制作物の質の向上や、外部の方にも伝わるようなわかりやすく質の高いプレゼンテーションを行う能力の養成につながっていると考えられる。

このように地域課題に対する学習機会が多いためか、特に卒業研究や卒業制作では、地域に関する研究が大幅に増えつつある。最終年度では、異分野学生による地域課題学習に関する研究、歴史的町並み保存に関する研究、ICTなども活用した地域防災研究、有明海の軟弱地盤などの地域的特質に着目した研究などが増えた。また、国内外で研究論文を発表する学生も徐々に増え、修士に進学した学生は、国際会議論文、ジャーナル論文で成果を広く公開するとともに、Best presentation賞や学長賞などを受賞した。

地域創生学Ⅲでは、小城市および嬉野市で実際に進んでいるまちづくりプロジェクトに学生を参加させた。

学生はプロジェクトのプロモートのためのイベントアイデア考案、チラシ制作を行い、地域で発表した。実施はできなかったが、学生は地域住民やプロのプロモーターと意見交換などから、まちづくりを行う際に何を考えなければならないかを知ることができた。

コース共通特別講義等におけるサガ・ライトファンタジーへの参加は、西九州大学とコラボレーションすることができた。佐賀で取り組んでいるイベントの実態を知ることができ、さらに双方の授業プログラムや学生評価の仕組みなどについて意見交換する機会にもなり、学生間でも異分野での取り組みの中で交流を持つことができた。また、イベントへの参加によって、公共空間の中で仮設物の設置の条件などを理解することができた。しかしながら、今後の継続については、都市工学としての専門性が弱いため、専門教育として実施する必要性の有無が問われるなど課題が浮き彫りになった。



地域課題に関する卒業研究数の変化

🗣️ 学生の声

環アジア国際セミナーには、タイや韓国、カザフスタン等からの多数の外国人学生や教員が参加します。このセミナーに参加して、多国籍のグループのなかで、同じ目的をもって作業することでコミュニケーション能力の重要性を感じるとともに、自分の英語力のなさを実感することもありました。しかし、グループ活動を進めていくと、「交流したい」という気持ちが大切だということがわかりました。外国人学生と自分たちの能力の差を感じ、良い刺激にもなりました。現地に宿泊したので、地域住民の意見が聴きやすく、地域住民の人たちと一緒にまちづくりのプランを作るような感じでよかったです。



佐賀大学工学部4年
花元 康平



🗣️ 地域の声

鹿島市肥前浜宿で実施される環アジア国際セミナーは、若い学生が浜宿を知ることができて良いセミナーであると感じています。日本人学生を含め、海外からの参加学生や教職員が、伝統建築の良さを体験し、将来の顧客としてや口コミの発信源となることも期待しています。本セミナーは、毎年の行事として定着してきています。学生の活気により地元の士気が上がっていることも感じられ、まちづくりや地元活性のフレッシュなアイデアが共有できるのも大きな魅力です。



所属NPO法人
水とまちなみの会
中村 雄一郎



プロジェクト
G

平成24年度に農学部到新設された附属アグリ創生教育研究センターと医学部、西九州大のプロジェクトH・Kが連携して実施。農の多面的機能に着目して、アグリ医療や総合的食農教育モデルの開発・実践、機能性食品の開発等を企画・推進する。

アグリ資源の多様性を活用したアグリ医療及び機能性食品の開発プロジェクト

■事業実施主体:アグリ創生教育研究センター、医学部

■実施責任者:実施代表者 上埜 喜八(農学部・准教授)

■連携自治体:佐賀市



■5年間のまとめ

大学農場の資源(ウシ、イネ、水田、果樹園、農道、加工施設など)を活用した動物介在療法及び園芸療法の構築と機能性食品の開発を行った。西九州大学作業療法学専攻学生の現場視察・研修(西九州大学プロジェクト連携事業)、発達障がい児の農業体験・動物とのふれあい体験、園芸療法の効果検証実験、医療心理学・生活と支援技術合同実習などのプログラムなどにより動植物とのふれあいや作業体験による医療的なりハビリテーションの可能性について検討した。また、本プロジェクトでは家畜側の人との触れ合いによるストレスや疲労についても評価をし、安全で質の高いセラピー活動のあり方を探った。

機能性食品の開発においては、キクイモに主眼を置き取り組んだ。キクイモは低カロリーで血糖値の上昇を抑える「イヌリン」の含量が多い注目すべき機

能性食品の原料として位置づけられ、産業界でも注目を集めている。しかし、認知度が低く、消費量も少ないため栽培も普及していない。そこで、栽培法確立のための調査研究、PR活動、商品の開発を行った。機能性食品開発に係る行政・地域生産者・企業と連携し、キクイモを活用した商品の開発にむけ、実施体制の整備や今後の方針に関する打合せ、原料のPR計画などを検討した。茶については、「佐賀大学茶の文化と科学研究所」及び「佐賀・茶学会」と連携し、茶の発酵とポリフェノール成分やお茶リキュールなどの研究を通し、商品開発のための基礎的知見を得た。また、社会貢献の取り組みとして、毎年「手打ち蕎麦が出来るまで～種まきから蕎麦打ちまで～」(平成28年度)など、佐賀市民を対象とした公開講座を実施し、総合的食農教育モデルの開発を行った。



動物(家畜)とのふれあい体験



茶を用いた機能性食品開発に関する学生の発表



スーパー店舗でのキクイモ商品の試食提供

■5年間の成果と課題

農場のアグリ資源を活用した新たな教育・研究・地域連携の取り組みを行った。アグリ医療においては特別支援学校の生徒を対象とした動物（家畜）とのふれあい体験や野菜の収穫体験を実施した。また、発達障がい児支援のための学習題材の選定や支援プログラム開発、ダウン症候群患者に対する動物介在介入の効果検証試験を行った。アグリセンターでのアグリ医療推進のためにWiFi環境を整備し、位置計測、移動状態の把握がアグリセラピーの基盤技術として使用できるようにした。さらにバリアフリーの専門家（医学部非常勤講師と理学療法士）がアグリセンター内を調査し、転倒・転落防止などアグリ医療実施のため知見を得た。本プロジェクトを通じ、西九州大学との連携が深まり、同大学の作業療法学専攻の学生の現場講義と研修にアグリ資源を活用する契機となった。また、家畜の人と接することにより発生する疲労やストレスなどについて評価を行った。人と動物にとっての安全で効果の高いアグリ医療プログラムの開発を検討している。以上の成果をもとに実証的な

検証をすることや障がい者支援プログラムの開発が今後の課題となる。

機能性食品の研究開発ではキクイモを原料としたメニューや商品を開発し、交流会での試食提供、ブース展示、さらにCOCセミナーの開催、関連企業等に向けた学生による講演を実施した。「佐賀大学茶の文化と科学研究所及」び「佐賀・茶学会」と連携し、茶に関するシンポジウム、講演会、研究発表会を毎年開催してきた。学生は機能性食品開発の実際を学び、研究に携わる企業情報や地元就職に関する貴重な情報を得る機会となった。今後地域企業、自治体との連携を活かし、学生の意見も取り入れた商品開発・普及を進める予定である。

公開講座や農産物販売など学生と市民参加型の総合的食農教育モデルの開発を行い、地域社会との連携や学生の地域に対する関心を深めた。これらのイベントの参加者は年により変動するものの概ね参加者からは好評である。ただし、リピーターが少なく、メニューの工夫が課題となっている。

◎学生の声

公開講座でさつまいも掘りの手伝いをしました。参加者は家族連れや年配の方々で無我夢中になってさつまいもを掘っていました。その中で印象的だったのは、年配の方が一生懸命掘る姿をかつこよく本人のカメラに撮ってほしいと言われたことです。何をしても年齢というものは関係ないと感じました。小さな子どもたちは1人で掘ることが難しいため、2人くらいで協力し合っていて「かわいいなあ」と思いました。嬉しそうに多くのさつまいもを持って帰る参加者の方々の姿を見て手



佐賀大学農学部3年
山本 和歩

伝った私とても嬉しい気持ちになりました。



◎地域の声

「佐賀・茶学会」の研究発表会では毎年、佐賀大学学生による研究発表があります。近年、健康面から関心が高くなっている茶成分について、大学で実験されている科学的な内容の発表は、茶産地である佐賀の地域市民にとっても茶の不思議を感じさせてくれるものとして興味があり、勉強になりました。



佐賀県職員
松村 司



プロジェクト
H

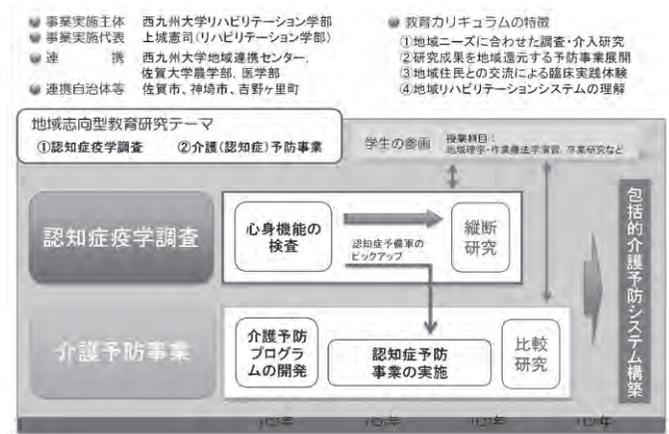
認知症予備軍とされる軽度認知障害(Mild Cognitive Impairment:MCI)に焦点をあてた包括介護予防システムを構築し、地域ニーズに応えられる高度な保健医療福祉専門職の養成を行っている。また、自治体と協力し地域住民を対象とした認知症疫学調査を実施や、介護予防に対する独自のプログラムを立案し、介護予防教室の企画・立案・運営を行う。

介護（認知症）予防事業に着目したリハビリテーション教育プログラム

■事業実施主体:西九州大学リハビリテーション学部、西九州大学グループ地域連携センター、佐賀大学農学部

■実施責任者:上城 憲司(リハビリテーション学部 教授)

■連携自治体:佐賀市、神埼市、吉野ヶ里町、小城市



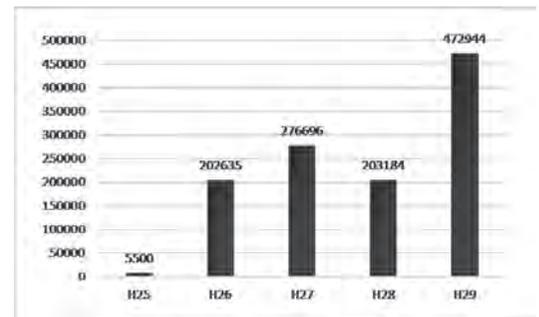
■5年間のまとめ

平成25年から29年度の5年間に、佐賀県佐賀市、神埼市、神埼郡吉野ヶ里町、小城市、伊万里市等にて、延べ4,504名の学生と共に316日、計472,944時間の学外活動を実施した(図1)。当初予定活動時間は、9,822時間であったため、予定を超える活動時間となった。

これらの活動実績については、研究論文109編(うち学生筆頭論文は22編)、学会発表81編(うち学生筆頭発表は32編)、講演・研修会を151回、地域会議等の参画20箇所を行い、教育成果の公表と本事業の成果報告を実施した。

大学COC事業開始当初は、シラバス変更、自治体との調整、学生と教員への説明等に大変苦労した。しかしながら、活動に参加した高齢者の方々が、学生

たちを笑顔で迎え入れてくださり、若者と接することでエネルギーを吸収するかなのような頑張りを見せてくれた。学生たちもまた人の役に立つ体験を経験することで、理学療法士、作業療法士の免許取得に対するモチベーションは非常に高まったと推察する。



【図1】活動時間の推移



心身機能調査の様子



認知症改善体操の実施



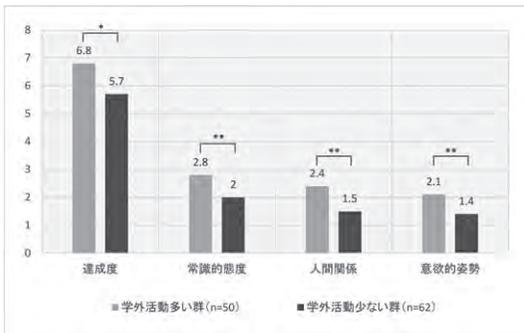
認知症予防サロンにおける創作活動

■5年間の成果と課題

●学生の教育成果

学生に対する教育成果を以下に示す。臨床実習後のアンケートでは、96% (112/117人) の学生が「学外活動が実習に役立った」と答えた。学外活動が多い群 (50名) と少ない群 (62名) を比較した結果、学外活動が多い群は、臨床実習の主観的達成度、臨床実習指導者が評価する常識的態度、人間関係、意欲的姿勢の項において有意に高い値が示された (図2)。

地域活動での調査データを使用した卒業研究数については、大学COC事業開始前 (平成22~24年) と開始後 (平成25~29年) を比較した結果、開始前の38% (160人中63人) から開始後は48% (328人中161人) と卒業研究数が増加した。

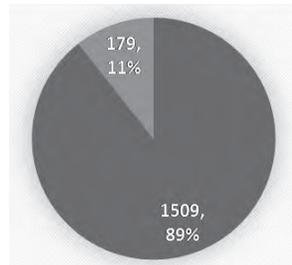


【図2】地域活動で調査した卒業研究数

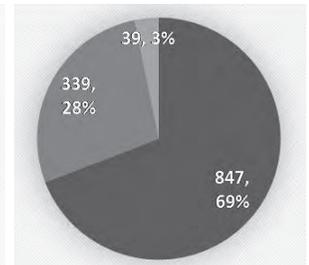
●地域貢献

心身機能検査では、地域在住高齢者1,688名の調査を実施した。調査の結果、もの忘れの検査 (MMSE) にて認知症疑いと判定された人は、179名 (11%) であった (図3)。一方、うつ検査 (GDS) にて、うつ病の注意が必要であると判定された人は、1,205名中うつ傾向339名、うつ状態39名の計378名 (31%) であった (図4)。この判定結果は、自治体から当事者および家族に伝達され、訪問調査 (受診のうながし) 等の初期集中支援が行われた。

介護 (認知症) 予防プログラムは、バランス能力と認知機能の向上を目的に、40cm四方のマットである「またぎマス」をまたぎ越しながら多重課題歩行をする「またぎマス運動」を考案した。「またぎマス運動」を12週間 (週1回、1日50分間)、対象者を介入群 (33名)、対照群 (33名) に振り分けて比較検討した。その結果、注意機能、健康関連QOLに介入効果が認められた。



【図3】MMSE検査結果



【図4】GDS検査結果

①学生の声

地域活動では、地域在住高齢者を対象に認知機能検査等の測定、ハンドアロマや園芸等の予防活動に参加させていただきました。一次・二次予防段階の高齢者の方々と接し、対応の仕方を学ぶことが出来ました。高齢者の方が楽しそうに活動に参加される様子を見ると企画・運営を行ってよかったと思いました。また、認知症カフェにも参加させていただき、家族の悩みなどを知ることで家族のケアも大切だと分かりました。



西九州大学
リハビリテーション学部4年
西村 愛

就職後は、上記のような地域活動で学んだことを患者様や御家族との関わりに活かして行きたいと思っています。

②地域の声

認知症は早期発見・早期治療が必要であり、西九州大学が行う体力測定や認知機能検査では、MCIや認知症疑いの方の把握に繋がっていると思います。また、検査等を学生が中心に行うことで住民の方の検査に対する抵抗や不安が軽減できていると考えられます。



神埼市高齢障がい課
江里口 隼人

認知症低下予防事業では、参加者は体操や作業等の活動を熱心に行い、「楽しい。こういう場があるのは嬉しい。」との声が聞かれています。また、参加者同士が「久しぶりに会ったね」と話されており、地域の集いの場にもなっていると思います。

プロジェクト

I

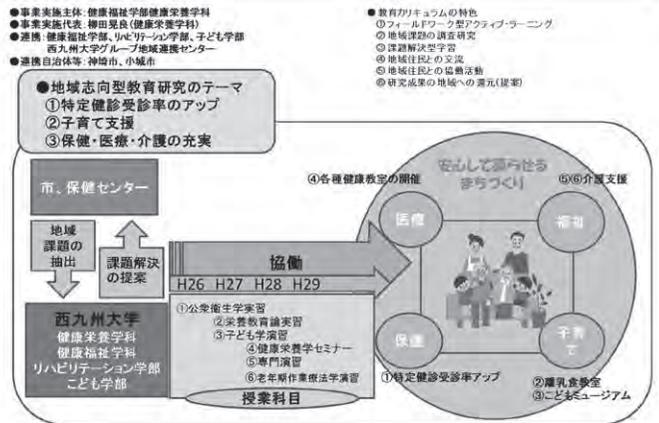
地域連携が抱える諸問題について、学生が問題解決型学習を行うことで、地域の保健・医療・福祉・子育て支援充実を図るプログラムを構築することを目的としている。具体的には、①公衆衛生学実習による特定検診の受診率アップ ②子どもミュージアムの開催や食育支援事業を通じた子育て支援の充実、③生活習慣予防や健康運動についての各種健康教室を行う。

保健・医療・福祉・子育て支援体制の充実プログラム

■事業実施主体:西九州大学健康栄養学部、西九州大学リハビリテーション学部、西九州大学子ども学部、西九州大学グループ地域連携センター

■実施責任者:堀田 徳子(健康栄養学部 准教授)

■連携自治体:佐賀市、神崎市、小城市



■5年間のまとめ

プロジェクトIでは、学生が専門分野を活かし、地域の保健・医療・福祉・子育て支援を図ることを目的として活動した。平成25年から神崎市の食育支援を行った健康栄養学科の「栄養教育論実習I」、佐賀市・小城市で展開した子ども学部の「子どもミュージアム」、平成26年度から神崎市の特定健診受診率アップを目指した健康栄養学科の「公衆衛生学実習」、平成28年度から小城市での健康教室を展開した健康栄養学科の「健康栄養学セミナーII」、スポーツ健康福祉学科の「地域スポーツ実践演習」、平成29年度からは健康栄養学科の「健康栄養学セミナーI」も健康教室に加わった。また、健康栄養学科の「卒業研究・演習」では神崎市の野菜摂取量アップを目的とした「ランチョン

マット大作戦」を展開した。活動は5年間を通じ、学科・科目・参加学生数と増えていった。地域で活動することで、学生自身の専門職としての課題発見やスキルアップを図ることができ、地域の皆様と笑顔で交流することができた。



子どもミュージアムの様子



小城市民を対象とした健康栄養学セミナーの実施



地域住民対象の運動教室。学生が参加者に運動指導を行う。

■5年間の成果と課題

「子どもミュージアム」においては、平成25年から平成29年の5年間の間に佐賀市を中心に65回（うち小城市で3回）開催した。総時間は185時間であった。参加者数は参加家族715組、延べ1,774名である。内子どもは1,064名であった。参加学生の数は延べ512人であった。

これらの活動実績については研究論文4編によってその教育効果の公表と本授業の成果報告を実施した。学生個々の“人間的成長”や“子どもや保護者に対する新たな気づき”を獲得することができ、机上の学問だけでは決して得ることのできない“実践的学び”となった。成果を下図にまとめた。

「公衆栄養学実習」においては、神埼市の特定健診受診率アップを目的に活動した。3年間の継続的な学生の介入は、1年目はモデル地区を対象とした集団健診への参加の呼びかけ、2年目は集団健診



に加えて自己都合に合わせて病院等で受診する個別健診、毎日健診の紹介、3年目は医療機関と自治会掲示板用の広報に特化した活動を行った。その結果、取り組み2年目に受診率が急上昇した地区が複数見られた。しかし、依然として受診率が低い地区があり、学生の広報介入程度で住民の方々の受診率を劇的に変化させることは困難であった。結果は学会等で報告した。

小城における健康教室は、「健康栄養学セミナーI」、「健康栄養学セミナーII」、「地域スポーツ実践演習」で展開した。平成29年度は、合計23講座を開催し、参加者数は延べ282名、参加学生は396名であった。普段、大学の中にいるだけでは見えない地域の方々の現状や課題、ニーズについて知ることができ、異世代の方とのコミュニケーションのとり方についても学ぶことができた。また、専門職としてのあり方や教育力等、自分にとって足りないところを学ぶきっかけとなった。このような体験は、これから学外の実習に出る上での心構えや教育を行う上での計画や準備等、いろんな場面で活かされると考える。

今後の課題として、継続した取り組みと評価、地域の課題やニーズに応じた展開、学年縦断的な取組の検討や工夫が必要であると考えます。

① 学生の声

私は、今回メタボリックシンドローム予防を目的に「ヘルシーでおいしく健康に」というテーマのもと小城市民の方を対象とした健康教室を実施しました。教室では講義やグループ活動、ヘルシーメニューの試食などを行いました。地域住民の方と交流する中で、教えることの楽しさや伝えることの難しさ、住民の方の実際の声を聴くことができ、多くのことを学ぶことができました。今回の健康教室を通して学んだ



西九州大学
健康栄養学部3年
椎葉 菜々

ことを今後の臨地実習や就職後このように健康教室を実施するような機会に活かしていきたいです。



健康栄養学セミナー実施風景

② 地域の声

小城市民の交流と中心市街地の活性化を進める拠点である「ゆめがらっと小城」の中にある、西九州大学サテライトキャンパスにおいて、西九州大学様主催の市民向け講座を多数実施していただきました。平成28年度は65講座に1,009名、平成29年度は54講座（12月末）講座に612名の方々にご参加いただきました。市民の皆様本当に親しまれた講座であり「ゆめがらっと小城」の代表的な交流イベントとなりました。これからも是非、市民講座を継続していただくよう願っています。感謝の気持ちでいっぱいです。



小城市まちなか市民交流プラザ
ゆめがらっと小城
館長 八木 信一郎

5年間のあゆみ

プロジェクト J

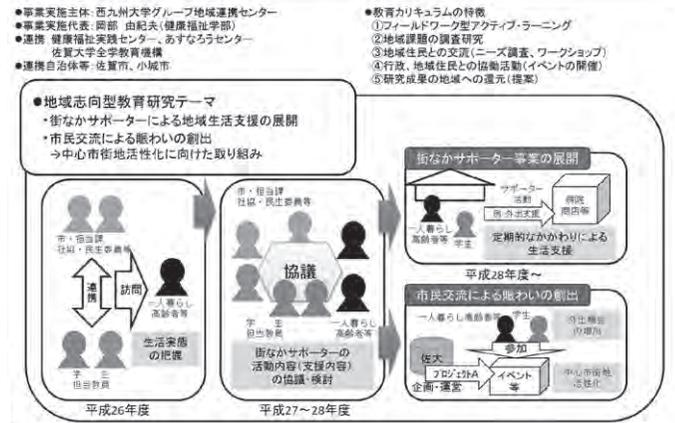
「街なかサポーター」活動として、地域の皆さんと学生が一体となって展開している。「街なかサポーター」とは、健常者のみならず、ご高齢の方や障がいのある方、子どもといった地域で暮らすすべての人がお互いに関わり、見守り・支えあう活動としての「場」や「機会」を創出できる人材である。学生が「街なかサポーター」として、地域で活動する中で、ニーズを発見し、その課題を解決するための方策を地域住民の方と一緒に考え、「見守り」「見守られ」システムの構築を図っていくものである。

「街なかサポーター」活動を通じた安心生活づくり

■事業実施主体:西九州大学健康福祉学部社会福祉学科、西九州大学グループ地域連携センター、あすなろうセンター

■実施責任者:岡部 由紀夫(健康福祉学部 講師)

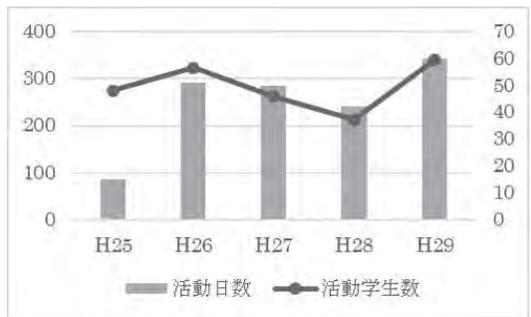
■連携自治体:佐賀市、小城市



■5年間のまとめ

この5年間(平成25年度から平成29年度)の地域活動では、佐賀市を中心に小城市、神埼市にて、延べ1,413名の学生とともに計218日間の取り組みを行った(図1)。当初予定していた「街なかサポーター」としての生活支援への活動までは結び付かなかったが、地域での学生の取り組みは徐々に評価をいただき、地域住民の方へ認知されるようになったと考えられる。

特に市町村が取り組む公民館活動や社会福祉協議会のサロン活動だけにとどまらず、NPO団体や社会福祉法人と連携を図った活動や地域住民の介護予防や生活支援体制の整備にかかる活動へと発展し、学生たちは地域包括ケアシステムの構築、また深化・推進のための理解も深まったことと推察できる。



【図1】活動日数と活動学生数の推移



サロン活動に参加する佐賀市勤興公民館において



地域高齢者の生活実態の調査



「あつまれ水曜」におけるレクリエーションの企画実施

■5年間の成果と課題

●学生の教育効果

学生に対する教育成果として、従前の学内シーズを活用した取り組み（チャレンジ幸齢セミナーやにこにこふれ愛デイ等）とは異なり、地域での「生」の声を聞くことにより、地域での生活課題やニーズについての視点が涵養された。卒業研究として地域課題に焦点を当て、学生自身の実践的な活動から得られた経験値・実践知を分析することで幅広い視野を持つことができ、その成果として平成28年度は11編、平成29年度は7編の実践研究論文を執筆することができた。また、これらは学内だけではなく活動地域で活動成果報告会を開催し、資料は公民館や行政関係者へ提出している。

これらの学生へ教育を支えるシステム作りも成果としてあげることができる。社会福祉学科では、平成25年度の地域大学宣言を受け、教育カリキュラムの見直しを行った。特に卒論ゼミを地域志向科目とし、3年次から継続的な地域活動を実践できる仕組みを検討し、現在は2年次から体験的に取り組むことができるようになっている。

◎学生の声

地域活動の取り組みとして、地域高齢者を対象に行われている高齢者の居場所づくりの活動に参加しています。この活動では月に1回レクリエーションやニュースポーツを通して居場所づくり、外出するきっかけを提供しています。今年度は2回、この活動の企画・運営を担当させていただきました。民生委員や自治会長などの声かけにより来られる方も多く、コミュニケーションの大切さを学びました。次回も来てもらえるように、参加者が何を求めているか傾聴することが大事だと感じました。



西九州大学
健康福祉学部3年
長友 裕紀



今後も地域活動で学んだことを活かして、相手の立場に立ち、一緒になって課題に取り組むソーシャルワーカーになりたいと思っています。

●地域貢献

中心市街地活性化を目的に取り組んだ活動は、特に高齢者や障がい者へ視点を当てた活動へ発展していった。当初、社会福祉協議会等で行う高齢者サロン活動へ参加は、公民館での高齢者居場所づくり事業への参画や地域の夏祭り等のイベントへの参画、また障がい者の社会参加や認知症カフェの活動へと展開した。

その中でも、勤興公民館での活動は、高齢者の居場所づくりとして実施されていた「あつまれ水曜」への参加から、民生委員や自治会の方々を巻き込んだ活動へと発展している。現在のところ、活動の啓発として地域でのポスティングなどを行っているが、今後は民生委員の方と協力をして、一人暮らしの高齢者や引きこもりがちの高齢者へ声かけを行っていく予定である。このように社会福祉を専攻する学生らが地域と関わることにより、新たなマンパワーとして地域からも認知され、継続的な地域連携・貢献として実践できることが認められたと考察できる。

◎地域の声

平成25年度から5年間、勤興校区の「高齢者の暮らしを考える」事業にご協力いただきありがとうございました。当初は参加者がまばらだった「あつまれ水曜（高齢者の居場所）」はみなさんの大学生らしい新しいアイデアにより参加者が増え、勤興校区を代表する事業として定着しました。さらに、今年度は「参加者がいつも同じ顔ぶれ」という慢性的な課題の解決にも取り組んでいただきました。みなさんの課題に対するまっすぐな姿勢が、「勤興校区福祉事業に関する聞き取り調査」という大掛かりな事業に取り組むきっかけになり、一歩踏み出すことができました。その課題はまだ解決には至っておりません。これからも一緒に考え、一緒に取り組んでいただけたらと思います。今後ともよろしくお願いたします。



佐賀市立勤興公民館
主事 福嶋 幸一

プロジェクト
K

地域の農業・食産業が抱える課題に学生が主体的に取り組み、学生の企画力及び実践力を養うとともに、地域活性化につなげることを目的とした取り組みである。学生自らプロデューサーとなり生産者・企業と協働してストーリー性のある新商品の開発を行う。更に健康増進や疾病の予防につながるような科学的根拠のある高付加価値食品とするために用いる素材や開発した食品の機能性を調べる。

産学官連携による機能性食品の開発プロジェクト

■事業実施主体:西九州大学健康栄養学部、西九州大学グループ地域連携センター、佐賀大学農学部

■実施責任者:安田 みどり(健康栄養学部 教授)

■連携自治体:佐賀県、佐賀市、神崎市、小城市、吉野ヶ里町、嬉野市

事業実施主体	事業内容
西九州大学健康福祉学部	■食品開発 大学の学生・教員、地域の生産者、企業等とが連携して、地域活性化に繋がるような新商品の開発を行う。
事業実施代表	■食品の生理機能性に関する研究 大学、企業等とが連携して、地域の食材および開発した食品の生理機能性に関する研究を行う。
安田みどり	
連携する機関	
西九州大学グループ地域連携センター 西九州大学短期大学部 佐賀大学農学部 徐福フロンティアラボ 等	
連携する自治体	
佐賀市 神崎市 小城市 嬉野市 吉野ヶ里町	

■5年間のまとめ

本プロジェクトでは、学生が中心となり、佐賀地域の農作物を使って商品の開発を行うことを目的とした。これまで、神崎市と共同で「ひしほうろ」の開発を行い、地域の活性化に貢献できたことから、この取り組みを学生の教育の中に取り入れ、学生を巻き込んだものにしてほしいと思ったのがきっかけである。

平成25~29年度の5年間の取り組みについて振り返る。1年目は、佐賀県有明海漁業協同組合様から、海苔を使った商品開発のご依頼があったことから、「あすなろう体験Ⅲ」の中で学生3名が取り組んだ。海苔を使ったパスタソース、パン、生キャラメルなど女子学生ならではの発想で高評価であったものの、商品化に至らなかった。2年目は、19人が「あすなろう体験Ⅲ」を受講し、6つのチー

ムでそれぞれ商品開発を行った。年度内には商品化ができなかったが、次年度にかけて商品化が実現した。3年目は、「地域の食産業」という科目がスタートし、40名が受講した。この講義は、食品開発について専門家(ゲストスピーカー)がアクティブラーニング形式で行い、学生からは高い授業評価を得た。商品開発も、6チームで行った。4年目は、「食品の創製ゼミナール」が開講し、今後、商品開発はこの講義の中で行った。この年度は、4チームで商品開発を行い、商品化に成功したものもあった。5年目は、5チームで行い、そのほとんどが商品化に至った。機能性の研究は、卒業論文・演習の中で5年間を通して取り組んだ。



キクイモ畑の前で学長とともに



試作を通してブラッシュアップを行う



キクイモを使った開発商品をみやき町長に報告

■5年間の成果と課題

●学生の教育効果

近年、食品関連企業における商品開発を志望する学生が増えており、このニーズに応じた授業として、「地域の食産業」や「食品の創製ゼミナール」を開講した。「地域の食産業」は、ゲストスピーカー、例えば、地元企業の経営者、食品関連企業で商品開発を行っている卒業生、地元のいちご農家で6次化に挑戦されている女性など多彩なゲストによるアクティブラーニング形式の講義で、学生の目が生き活きとなるのが分かった。この講義は2年次対象で、ここで食品開発の基礎を学び、3年次の「食品の創製ゼミナール」で実際に商品開発に携わるという流れである。しかし、「食品の創製ゼミナール」は商品化を最終目標としているため、学生には負担がかかるようで受講者が少なかったのが残念である。5年間で21チーム、延べ人数60名が商品開発に取り組んだ。生産者や企業との企画会議、試行錯誤の試作、数回の発表会、中にはマスコミ向けの商品のお披露目を体験した学生もいた。学生は、忙しいスケジュールの中で時間や労力のやりくりを行ったため、商品化に成功した学生は大きな達成感を得たようである。一方で、一生懸命に商品開発に取り組んだにもかかわらず、協力企業が見つからず、商品化に至らなかったケースもあり、我々の力不足を痛感した。しかし、受講した学生は、企画力、実践力、協調性、プレゼンテーション力が身に付いたと話し、中にはこれらの力を得て、希望の食品企業に就職できた学生もいる

ほどであった。将来、地域の食を担う人材の育成のためにも効果的な取組となったといえる。

●地域貢献

今回の取り組みでは、佐賀地域の特産品を用いて商品開発を行った。地域別にまとめると、佐賀県:アスパラガス、佐賀市:海苔、キクイモ、ハーブ、もち麦、五穀、神崎市:ヒシ、桑の葉、小城市:白インゲン豆、ぶどう、梅、嬉野市:エキナセア、唐津市:天山草(アイSprant)、吉野ヶ里町:ジャンボニンニク、栄西茶、みやき町:キクイモであった。これらの特産品を用いて商品化に成功したのは、佐賀県:SAGA Vege Soup、さがグリーンアスパラソース、佐賀市:キクイモご膳、ローズマリーのレアチーズケーキ、ローズマリーのパウンドケーキ、もち麦クッキー、徐福の種、小城市:ぶどう大福、梅プリン、梅カツサンド、嬉野市:エキナセアティー、えごまのかりかり棒、えごまのチーズスティック、唐津市:天山草クッキー、天山草チーズ、吉野ヶ里町:ジャンボニンニククッキー、栄西茶クッキー、栄西茶パウンドケーキ、栄西茶ブラウニー、みやき町:みやきドーナツ(キクイモ)、キクイモフロランタンの合計21商品となった。現在、商品化の準備に入っているものもあり、今後ますます増えることが予想される。その他、各地域での講演会、講座、イベントも多数行った。以上のように、本取組は、大学と地域との連携を図り、新たな食品ビジネスの創造と地域の活性化に貢献できたのではないかと考えている。

①学生の声

商品開発を通して、様々な方との出会いや今までにない経験などとても有意義な活動ができました。初めはチーム内で初対面の人もいてお互い意見を言い合うことができませんでした。試作を重ねるうちに遠慮なく意見交換ができるようになりました。



西九州大学
健康栄養学部3学
池田 蒼人

初めの試作会では決して美味しいと思えるものができずこのままで本当に商品化できるのだろうかと思いましたが、山田ひまわり園での試作販売の際、初めて包装されている商品を見てやっと完成したんだと実感し、おいしいと食べてくださるお客様の声がとても嬉しかったです。今回経験した、試行錯誤のプロセスは社会人になったときに生かせると思っています。

①地域の声

健康長寿のまち宣言をしているみやき町では、血糖値の上昇を抑えるといわれているキクイモの栽培を始めたところでした。そこで、キクイモに詳しく6次化商品の開発経験も豊富な安田教授に相談し、学生さんとともに地元のキクイモを使ったお土産の開発をして頂くことになりました。当初は、地元のキクイモのみを用いたお土産の開発を進めていましたが、学生さんが「みやき町は秋に咲くひまわりが有名なのでひまわりの種も使ってみよう」と試行錯誤し、キクイモとひまわりの種を使ったフロランタンとドーナツが完成しました。



みやき町企画調整課
大塚 勝也

山田ひまわり園や地元菓子店で販売する定番のお土産が完成しただけでなく、学生の皆さんが、菓子店と生産者の間に入って様々な商品を提案してくれた今回のケースは、6次化のモデルケースとして大いに参考になりました。

プロジェクト L

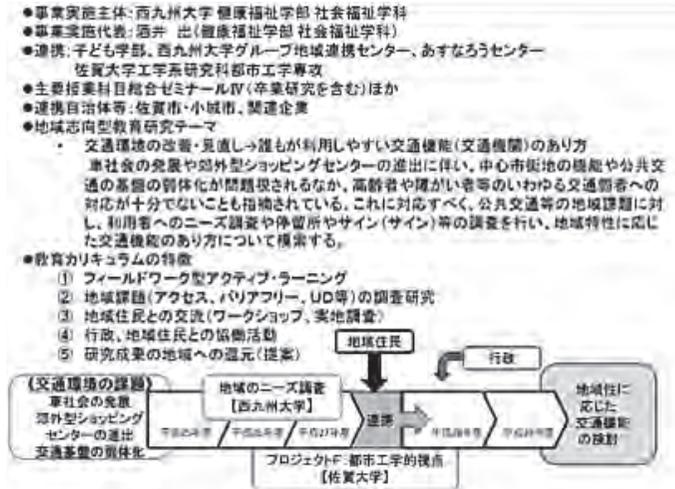
健康福祉学部等で開講されている「社会調査の基礎」等を受講した学生らによる公共交通機関（市営バスなど）の利用ニーズ調査や停留所、サイン（表示）の調査を通して当該市における地域課題を明らかにする活動を行っている。また、フィールド活動で得られた調査結果を基に、地域住民や関連機関・企業と意見交換を行い、地域住民が活用できる形に転換していく中で、地域生活に密着した市民サービスの在り方を考える機会をつくる。

地域住民と連携した交通UDプロジェクト

■事業実施主体：西九州大学健康福祉学部社会福祉学科、西九州大学グループ地域連携センター、佐賀大学農学部

■実施責任者：酒井 出（健康福祉学部 教授）

■連携自治体：佐賀市、小城市、神崎市



■5年間のまとめ

この5年間（平成25年度から平成29年度）の地域活動では、佐賀市と神崎市を中心に1,296名の学生とともに計139日間の取り組みを行った（図1）。当初予定していた「交通UD」に直接的に関わる活動以外にも、神崎市の景勝地である「九年庵」での活動などにおいて、地域住民や関連機関・企業との意見交換を積極的に行い、広義でのユニバーサルデザインに関連した取り組みができたことと評価できる。

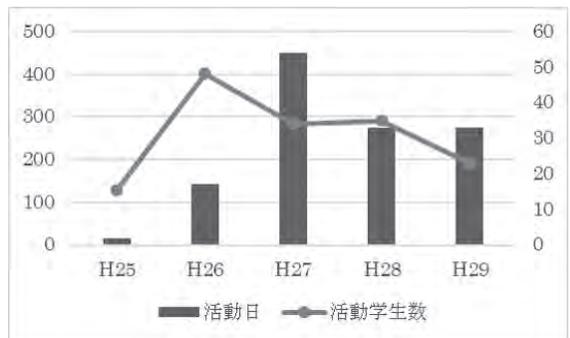
特に平成28年度から取り組んだ障がい者団体とのバリアフリーマップ活動では、佐賀市内の飲食店を中心に10店舗程度を車いすユーザーと一緒に

調査を行い、店舗へのバリアフリーやユニバーサルデザインについて考えるきっかけづくりができたと考えられる。

また、神崎市における九年庵での活動では、社会福祉学科の交換留学生も交え、景勝地での言語の垣根を超えた関わりを通して、情報や文化のバリアフリーやユニバーサルデザインについて検討がすることができたと推察できる。この取り組みにおいては、神崎市観光協会やCSO神崎からも高い評価を頂いた。



バリアフリーマップ活動



【図1】

■5年間の成果と課題

●学生の教育効果

学生に対する教育成果として、地域での実際の場面に遭遇することにより、地域での生活課題やニーズについての視点が涵養された。卒業研究として、バリアフリーやユニバーサルデザイン等に焦点を当て、学生自身の実践的な活動から得られた経験値・実践知を分析することで幅広い視野を持つことができ、その成果として平成29年度に5編の実践研究論文を執筆することができた。また、これらは学内だけではなく活動地域で活動成果報告会を開催した。

これらの学生へ教育を支えるシステム作りも成果としてあげることができる。社会福祉学科では、平成25年度の地域大学宣言を受け、教育カリキュラムの見直しを行った。従来のあるさなる体験Ⅰ～Ⅲでの学外活動に加え、卒論ゼミを地域志向科目とし、3年次から継続的な地域活動を実践できる仕組みを検討し、現在は2年次から体験的に取り組むことができるようにすることで、大学生生活4年間で総合的な地域実践活動ができる体制整備が行えた。

例えば、サガ・ライトファンタジーの活動を講義体系に当てはめると、モチベーション喚起型(あるさなる体験Ⅰ)からサービスラーニング型(あるさなる体験Ⅱ・Ⅲ)へ、また課題解決型学習(発展ゼミナールⅡ・Ⅲ)へと発展することができたと考えられる。

◎学生の声

地域活動では、佐賀ライトファンタジーでの唐人茶屋横の広場を飾り付ける活動に参加させていただきました。市役所の方や佐賀大学の方と連携を取ることで、コミュニケーションの大切さを学びました。ライト



西九州大学
健康福祉学部3年
下村 昌也



サガ・ライトファンタジーの
電飾設置

アップされたイルミネーションを見ると、この活動に参加して良かったなと感じました。地域活動を通して、人と人との繋がりの重要性や自分から行動を起こす積極性が大事であることを学びました。就職後は、上記の活動で学んだことを様々な場面で活かしていきたいと思います。

●地域貢献

先述した通り、本プロジェクトでの活動では、神埼市観光協会やCSO神埼から高い評価を頂いている。また、佐賀市で取り組んだサガ・ライトファンタジーでの活動は、佐賀大学のプロジェクトFとの連携を図り、都市デザインやその観光客の動線の検討を行うに至った。これらは佐賀市との連携もあり、今後の佐賀市中心市街地の発展や賑わいの創出という他プロジェクトとの関連も深まり、継続して取り組んでいく必要のある取り組みとなっている。

その中で、バリアフリーマップづくりの活動についても、現在も障がい者団体と連携の下、調査店舗を拡大し、取り組みを続けている。車いすユーザーの使い勝手や店舗への障がい者の方々への配慮等の啓発は十分に貢献できたと考えられる。これに加え、平成29年度からは佐賀県でのユニバーサル・デザイン・マップの見直し作業を含めた活動へ参画するなど、活動の広がりを見せている。今後も関係機関との連携を十分に図り、当事者だけではなく、様々な視点に立ち地域生活に密着した市民サービスの在り方を考えるきっかけづくりに取り組んでいきたいと考える。

◎地域の声

サガ・ライトファンタジー事業にとって、西九州大学をはじめ多くの学生や市民ボランティアの協力はとても大切なものです。今回、西九州大学の学生は、巨大ツリーに飾り付けるオーナメントを市内の子ども



佐賀市経済部
商業振興課
深水 未来

ちと一緒に作ってくれたり、インスタフレーム等のデザイン考え、各スポットに設置してくれたりしました。この取り組みの結果、ツリーの飾りがメディアで取り上げられたり、インスタフレームを使って写真を撮っている方を多く見かけたりなど、中心市街地への集客に大きく貢献してくれたと思います。

資料

コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト 運営委員会設置要項

(平成25年9月26日制定)

(設置)

第1 国立大学法人佐賀大学及び学校法人西九州大学に、地(知)の拠点整備事業(事業名称:コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト)の実施に関し、必要な事項を審議するため、コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

(審議事項)

第2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。
(1) プロジェクト実施に関する企画の立案及び推進に関すること。
(2) プロジェクトの予算管理に関すること。
(3) 自治体等との連携の推進に関すること。
(4) プロジェクトの自己点検評価に関すること。
(5) その他プロジェクトの実施に関する事項

(組織)

第3 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。
(1) 佐賀大学理事のうち佐賀大学長が指名した者 1人
(2) 西九州大学理事のうち西九州大学長が指名した者 1人
(3) 佐賀大学における事業実施責任者
(4) 西九州大学における事業実施責任者
(5) 佐賀大学におけるプロジェクト実施責任者
(6) 西九州大学におけるプロジェクト実施責任者
(7) 佐賀大学全学教育機構専任教員のうち佐賀大学長が指名した者 若干人
(8) 西九州大学グループ地域連携センター教員のうち西九州大学長が指名した者 若干人
(9) コミュニティ・キャンパス佐賀コーディネーター
(10) その他第5第1号に規定する委員長が指名した者 若干人

(任期)

第4 第3第5号から第8号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
2 第3第5号から第8号まで及び第10号の委員に欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5 運営委員会に委員長を置き、第3第1号の委員をもって充て、副委員長は第3第3号及び第4号の委員をもって充てる。
2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
3 委員長に事故があるときは、副委員長が、その職務を代行する。

(議事)

第6 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ、議事を開き、議決をすることができない。ただし、やむを得ない理由により出席ができない場合にあっては、代理者の出席を認め、その者を委員に代えることができる。
2 議事は、出席した委員の3分の2以上の多数をもって議決する。

(委員以外の者の出席)

第7 運営委員会が必要と認めるときは、運営委員会に委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(部会)

第8 運営委員会に必要な部会を置くことができる。
2 部会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第9 運営委員会の事務は、佐賀大学事務局関係各課及び西九州大学グループ地域連携センターの協力を得て、佐賀大学学術研究協力部社会連携課が行う。

(雑則)

第10 この要項に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し、必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

1 この要項は、平成25年10月1日から実施する。
2 この要項実施後、最初に選出される第3第5号から第8号まで及び第10号の委員の任期は、第4第1項の規定にかかわらず、平成27年3月31日までとする。

附 則(平成27年7月22日改正)

この要項は、平成27年10月1日から実施する。

附 則(平成28年3月25日改正)

この要項は、平成28年4月1日から実施する。

■コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト運営委員会名簿

〈佐賀大学〉

平成29年10月1日

部 局	職 名	氏 名
理事(研究・社会貢献担当)	副 学 長	寺 本 憲 功
工学系研究科	教 授	三 島 伸 雄
全学教育機構	教 授	五十嵐 勉
教育学部	教 授	井 上 伸 一
経済学部	准 教 授	戸 田 順 一 郎
医学部	教 授	杉 岡 隆
(農) 附属アグリ創生教育研究センター	准 教 授	上 埜 喜 八
全学教育機構	准 教 授	郡 山 益 実
全学教育機構	講 師	山 内 一 祥
社会連携課	コーディネーター	三 島 舞
社会連携課	課 長	木 塚 徳 男

〈西九州大学〉

部 局	職 名	氏 名
理事(社会貢献担当)	副 学 長	井 本 浩 之
健康栄養学部	准 教 授	堀 田 徳 子
健康福祉学部	教 授	酒 井 出
健康栄養学部	教 授	安 田 みどり
リハビリテーション学部	教 授	上 城 憲 司
健康福祉学部	講 師	岡 部 由 紀 夫
地域連携センター	コーディネーター	横 尾 仁 美
センター事務室	事 務 長	中 島 哲 男

■コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議設置要項

(平成25年11月15日制定)

(設置)

第1 地(知)の拠点整備事業(事業名称:コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト)の実施に関し,必要な事項を協議するため,コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議(以下「推進会議」という。)を置く。

(協議事項)

第2 推進会議は,次に掲げる事項を協議する。

- (1) 地域のニーズに対応した教育研究の推進に関する事。
- (2) 地域と大学間の積極的な連携・対話の推進に関する事。
- (3) その他プロジェクトの実施に関する事項

(組織)

第3 推進会議は,次に掲げる機関の担当者をもって構成する。

- (1) 佐賀県
- (2) 佐賀市
- (3) 神崎市
- (4) 唐津市
- (5) 小城市
- (6) 鹿島市
- (7) 嬉野市
- (8) 吉野ヶ里町
- (9) 佐賀大学
- (10) 西九州大学

(11) その他第4第1項に規定する会長が指名した者 若干人

(会長)

第4 推進会議に会長を置き,構成員の互選により選出する。

- 2 会長の任期は2年とし,再任を妨げない。
- 3 会長は,推進会議を招集し,その議長となる。
- 4 会長に事故があるときは,あらかじめ会長が指名した構成員がその職務を代行する。

(構成員以外の者の出席)

第5 推進会議は,必要に応じ構成員以外の者の出席を求め,意見を聴くことができる。

(事務)

第6 推進会議に関する事務は,佐賀大学事務局関係各課及び西九州大学グループ地域連携センターの協力を得て,佐賀大学学術研究協力部社会連携課が行う。

(雑則)

第7 この要項に定めるもののほか,推進会議の運営に関し必要な事項は,推進会議が別に定める。

附 則

- 1 この要項は,平成25年11月15日から実施する。
- 2 この要項の実施の際,現に会長の職にある者の任期は,第4第2項の規定にかかわらず,平成27年3月31日までとする。

附 則

この要項は,平成27年10月1日から適用する。

■コミュニティ・キャンパス佐賀推進会議委員名簿

平成29年10月1日

所 属	職 名	氏 名
佐賀県	政 策 部 企 画 課	大 上 真 哉
佐賀市	企画調整部 企画政策課	本 村 佳 介
神埼市	総務企画部 企画課課長	宮 地 丈 二
唐津市	企画政策課(交流協定担当者)	牛 草 和 人
小城市	企 画 政 策 課	池 田 博 信
鹿島市	総 務 部 企 画 財 政 課	宮 崎 剛 史
嬉野市	総務企画部企画政策課	島 村 大 流
吉野ヶ里町	企 画 課 課 長	川 原 憲 光
佐賀大学	工 学 系 研 究 科 教 授	三 島 伸 雄
西九州大学	副 学 長	井 本 浩 之
一般社団法人ユニバーサル人材開発研究所	代 表 理 事	大 野 博 之
佐賀大学	全 学 教 育 機 構 教 授	五 十 嵐 勉

<関係者>

西九州大学	事 務 長	中 島 哲 男
西九州大学	コ ー デ ィ ネ ー タ ー	横 尾 仁 美
佐賀大学	コ ー デ ィ ネ ー タ ー	三 島 舞
佐賀大学	教 務 課 長	浦 川 宗 久
佐賀大学	社 会 連 携 課 長	木 塚 徳 男
佐賀大学	社 会 連 携 課 係 長	井 上 謙 一
佐賀大学	社 会 連 携 課	諸 永 正

■佐賀大学地域創生推進センター大学COC事業推進部門設置要項

(平成28年4月25日制定)

(設置)

第1 佐賀大学地域創生推進センター(以下「センター」という。)に、国立大学法人佐賀大学地域創生推進センター規則(平成27年12月25日制定)第4条の規定に基づき、コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト(以下「プロジェクト」という。)を円滑に実施するため、大学COC事業推進部門(以下「部門」という。)を置く。

(組織)

第2 部門は、プロジェクト運営委員会委員のうち次に掲げる佐賀大学の関係者をもって組織する。

- (1) 理事
- (2) 事業実施責任者
- (3) プロジェクト実施責任者
- (4) 全学教育機構専任教員
- (5) コミュニティ・キャンパス佐賀コーディネーター
- (6) 社会連携課長

(業務)

第3 部門は、次に掲げる佐賀大学における業務を行う。

- (1) プロジェクトの評価に関すること。
- (2) プロジェクトの交付申請及び実績報告に関すること。
- (3) プロジェクトの予算配分に関すること。
- (4) 地域志向教育研究経費の公募及び担当教員の選定に関すること。
- (5) 地域を志向する教育・研究・社会貢献に関するアンケートの実施に関すること。
- (6) その他プロジェクト推進に関すること。

(議長)

第4 部門に議長を置き、第2第1号の委員をもって充てる。

- 2 議長は、会議を主宰する。
- 3 議長に事故があるときは、あらかじめ議長が指名した委員がその職務を代行する。

(雑則)

第5 この要項に定めるもののほか、部門の運営に関し必要な事項は、議長が別に定める。

附 則

この要項は、平成28年4月25日から実施する。

■佐賀大学地域創生推進センター 大学COC事業推進部門名簿

〈佐賀大学〉

平成29年10月1日

部 局	職 名	氏 名
理事(研究・社会貢献担当)	副 学 長	寺 本 憲 功
工学系研究科	教 授	三 島 伸 雄
全学教育機構	教 授	五十嵐 勉
教育学部	教 授	井 上 伸 一
経済学部	准 教 授	戸 田 順 一 郎
医学部	教 授	杉 岡 隆
(農) 附属アグリ創生教育研究センター	准 教 授	上 埜 喜 八
全学教育機構	准 教 授	郡 山 益 実
全学教育機構	講 師	山 内 一 祥
社会連携課	コーディネーター	三 島 舞
社会連携課	課 長	木 塚 徳 男

編集後記

地(知)の拠点整備事業
コミュニティ・キャンパス佐賀
アクティベーション・プロジェクト

コーディネーター **三島 舞**



本報告書は、5カ年の大学COC事業の最終年度の活動報告となる。平成25年度10月から始まった事業は、平成26年度に本格始動となり、これまでにさまざまな地域での活動を行ってきた。地域志向科目や地域志向教育・研究に携わる教員の増加もあり、約5年間の地域活動回数は、876回、活動に参加した学生は延べ14,765人となった(平成29年1月末現在)。年に1回実施する学生アンケート結果では、年々、地域志向科目受講が佐賀県内への就職のきっかけになっていると答える学生が増加しており、本事業の成果が徐々に見え始めてきている。また、本事業で連携する地域において地域住民アンケートを行った結果からは、学生の地域活動に対して7割以上が満足しているという結果が得られた。

本学の大学COC事業は、今年度で文部科学省からの補助事業としては終了となるが、本事業を発展させた事業として、平成27年度からは本学が主となる「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(略称:COC+)」が始まっている。今後は、このCOC+事業において、地域の方々の支援を受けながら、地域の中核的存在(COC:Center of Community)としての役割を発展的に継続し、地域で活躍する人材育成が推進されることとなる。「地域から学ぶ」教育が「地域で働く」地元就職率の向上にどの程度現れるのか。その成果を期待したい。

これまで、学生を受け入れ、「佐賀県ファン」を育ててくださった地域のみならずには、本当に感謝しかない。私自身も多くの方々と活動を共にし、佐賀県の魅力を教えていただいたことで、事業開始前よりも「佐賀県ファン」度が増している。

最後に、本事業にご協力いただいたみなさまに心からお礼申し上げます。

平成29年度
地（知）の拠点整備事業
コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト

成果報告書

平成30年3月31日発行

発行・企画・編集 国立大学法人 佐賀大学
地域創生推進センター
〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1番地
TEL 0952-28-8958
FAX 0952-28-8186
HP <http://www.ccsap.saga-u.ac.jp>
デザイン・印刷 福博印刷株式会社

本書に掲載されている写真及び記事の無断転載、複写を禁止します。



文部科学省
地(知)の拠点

SAGA
佐賀大学 * 西九州大学
コミュニティ・キャンパス佐賀